

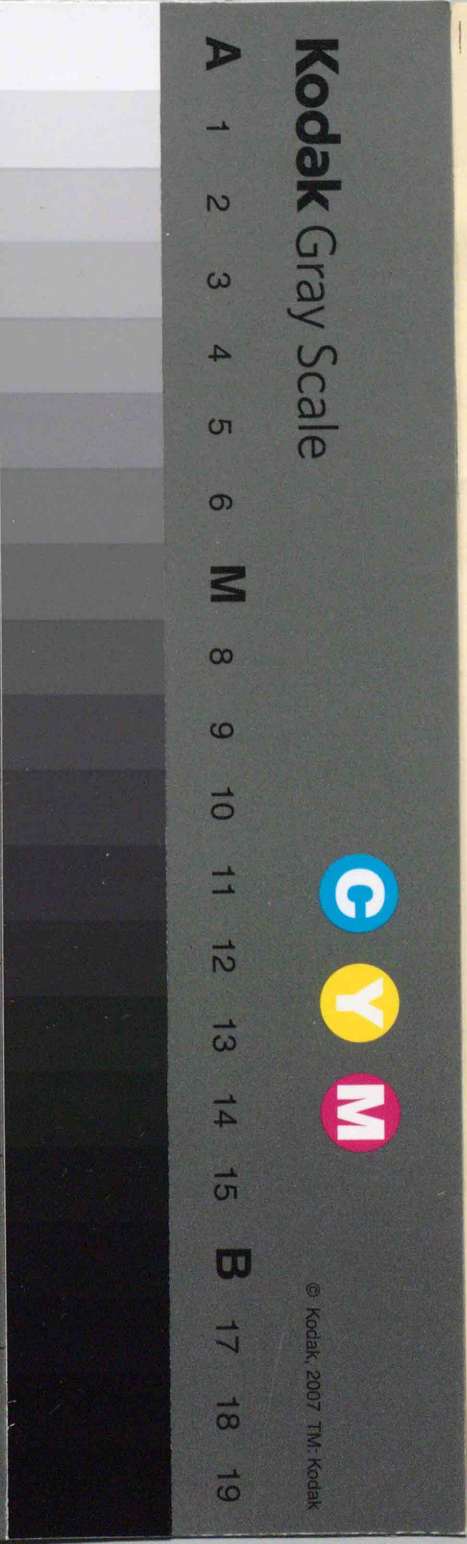
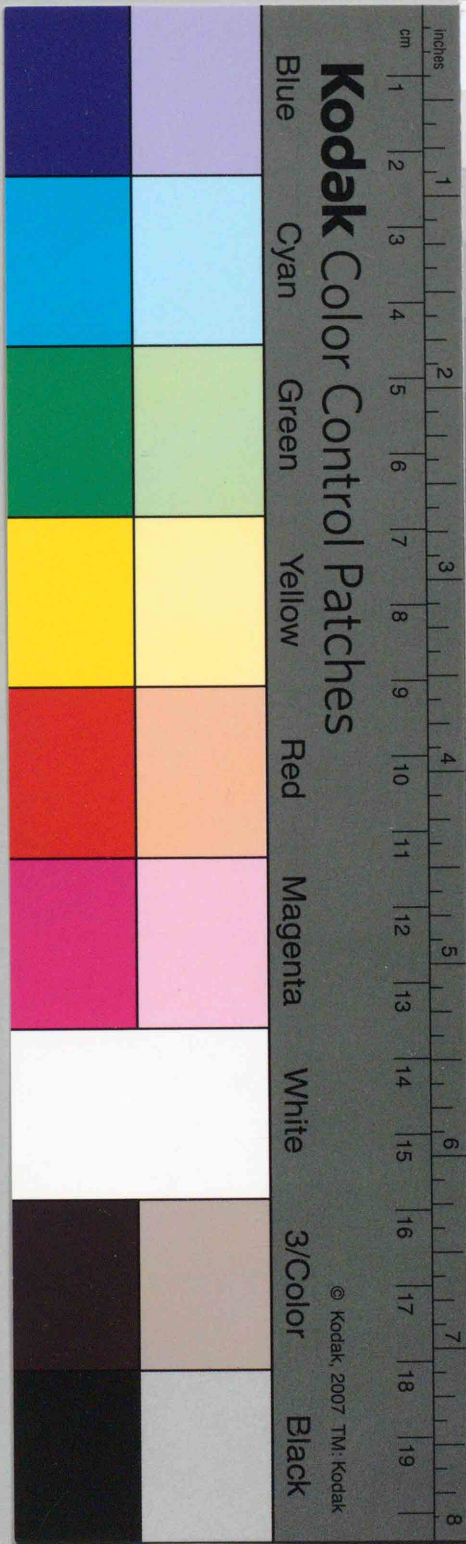
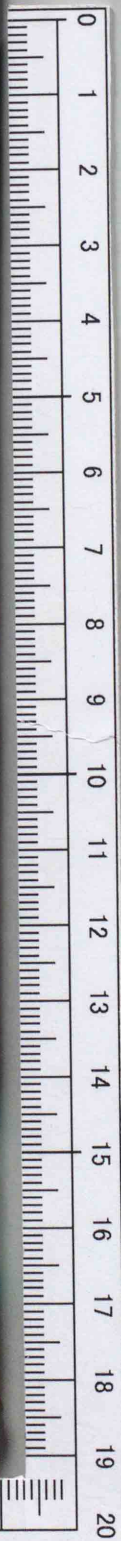
4a  
220  
x11

文學士中村久四郎著

訂五新編  
**外國歷史教科書**  
東洋 東洋  
之部

東京  
株式會社  
三省堂發兌

教  
4  
200



43000

教科書文庫

4.  
230.  
41-1922  
20000  
80475

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

教科書文庫

4

230

41-1922

2000080475

# 編新・訂五 書科教史歷國外

## 部之洋東

全

授教校學範師等高京東

士學文

郎四久村中

著



広島大学図書

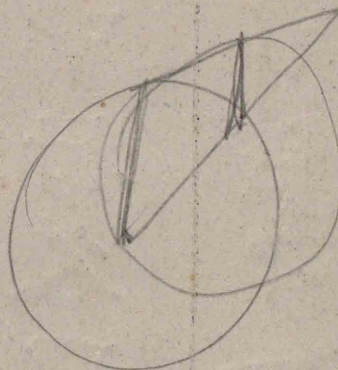
2000080475



社 會 式 株

兌 發 堂 省 三

4a  
220  
大11





古往歴史。是現世界。今來世界。是活歴史。(佐藤一齋)

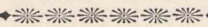
温故而知新。可以爲師矣。(論語)

史者國之典法也。(宋の歐陽修)

歴史は實例によりて人を教ふる哲學也。(ダイオニシアス)

歴史によりて與へらるゝ最大の利益は、吾人の感奮するにあり。(ゲーテ)

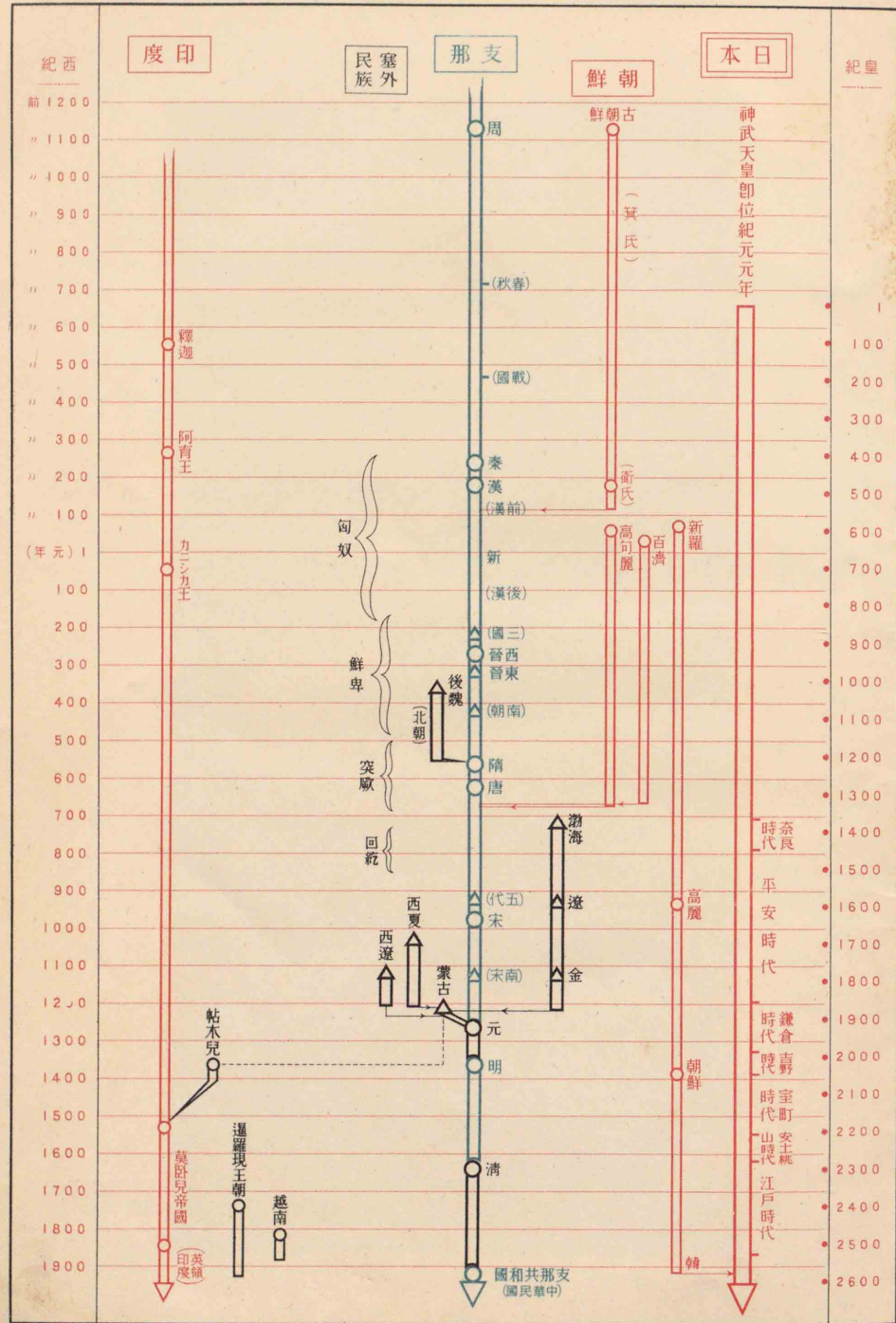
明治天皇  
御製



進みゆく世に生れたるうなるにも  
むかしの事を先つをしへてむ  
今の世に思ひくらへていそのかみ  
ふりにしふみを讀むそ樂しき  
いそのかみ舊きためしを尋ねつつ  
あたらしき世のことも定めむ  
よきをとりあしきを捨て外つ國に  
おとらぬ國となすよしもかな



表略覽總國諸史洋東



支那は周より始まるにあらず。周より約一千五百年以上の古史傳を有すれども、紙幅の関係上、はやく周以前を省略するものとす。印度の太古も亦本表以前に起るものと知るべし。





釋迦圖

(京都東福寺藏)

(傳心道人玄筆)





孔子の像

### 釋迦圖

支那の唐の世、文物大に興り、圖畫の術亦頗る發展す。吳道玄は唐の諸大家の一人なり。道玄、字は道子。吳道子の名、却て世に聞ゆ。玄宗時代の人。人物畫に長じ、佛寺等の壁畫を作りて名あり。本圖は、京都東福寺の藏にして、吳道玄の筆と傳へらる。



孔子の像

この像は山東省曲阜縣城内にある大成殿(孔子を祭る殿堂)に安置せらるゝものにして、東魏の興和年中(今より約一千三百八十年前)に作りしものなりと傳ふるも、未だ之を確定すること能はざるなり。

五新編 外國歴史教科書 東洋之部

例言

- 一 本書は、中學校及び之と同程度の諸學校に於ける外國歴史甲(東洋の部)の教科書に充てんが爲に著述せるものなり。
- 一 本書篇章の目次は、明治四十四年七月三十一日文部省訓令の中學校教授要目に準據せるものなり。
- 一 本書の記事は、簡明平易を主とし、事實の連絡關係に注意し、顯著なる逸話傳説及び詩歌等を附録し、欄外には簡潔なる小題目を掲げ、且つ本文中に正確有益にして趣味ある多數の圖畫を挿入し、専ら讀者の瞭解を助け、感興と趣味とを増さしむることを務めたり。
- 一 本書の紀年は、皇紀と西曆とを併記し、以て國史と西洋史との年代的關係を保たしめんことを圖れり。但し括弧内の紀年中西紀と特記せざるものは凡て皇紀の紀年なり。又重要なる紀年には我が歷朝の御諡、又は將軍執



權等の名を併せ記したり。但し明治以後に起りたる事實には、便宜上明治及び大正の年數を記したり。

一本書每篇の終には、沿革摘要の年表を掲げて、學習史實の復習と概括とに充て、卷末には、歴代地圖を載せたり。讀者の常に之を参照せんことを希望す。又諸章の末に記入したる諸王朝の系圖も、適宜に之を利用せられんことを切望す。

一本書の増訂は、今回を以て第五回とす。篇章の目次は凡て前の如しといへども、各章内の記事は、多數の中等諸學校長及び教師諸賢の輿論並に教育雜誌の所説に従つて、概ねやゝ詳細にして趣味あるものを加へたり。

一以上諸點著者の聊か注意せし所なりといへども、本書史料の選擇、排列及び文辭、其他の點につきて、なほ缺點あるを免れざるべし。幸に大方諸賢の示教によりて訂正改善することを得ば、豈ひとり著者の幸のみならんや。

大正十年八月本書第五回の大増訂に際して

中村久四郎識

五訂新編 外國歴史教科書 東洋之部

目次

第一篇 上古史

〔二—四八〕

第一章	上代の支那	一
第二章	夏殷周	五
第三章	春秋戰國	九
第四章	周代文物 孔子	一四
第五章	秦の統一	一八
第六章	漢の統一	二三
第七章	武帝の業 四夷の服屬	二七
第八章	前漢の衰亂 後漢	三二
第九章	西域との交通 印度 佛教の東流	三五



第十章 兩漢の文物……………四一

第十一章 三國 晋の統一……………四四

〔上古史摘要年表〕

第二篇 中古史……………〔四九—九二〕

第一章 胡族の侵入……………四九

第二章 南北朝 隋の統一……………五三

第三章 唐の創業……………六〇

第四章 玄宗 安史の亂……………六六

第五章 唐代の文物・宗教 南海の貿易……………六八

第六章 唐の衰亡 五代……………七五

第七章 宋の統一 渤海・遼・金の興廢……………七八

第八章 宋代の文物……………八九

〔中古史摘要年表〕

第三篇 近古史……………〔九二—一二五〕

第一章 蒙古の勃興……………九二

第二章 元の世祖 宋の滅亡……………九八

第三章 東西の交通 マルコポーロ……………一〇二

第四章 元の衰亡 諸汗國の盛衰 帖木兒……………一〇三

第五章 明の統一……………一〇九

第六章 明の衰運 滿洲の勃興……………一一三

第七章 莫臥兒帝國 葡萄牙人の來航 通商及宣敎……………一一八

第八章 元明の文物……………一二二

〔近古史摘要年表〕

第四篇 近世史……………〔一二六—一七三〕

第一章 清の統一……………一二六

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉……………一三〇



第三章	邊外の征服 清の文物	一三三
第四章	英國の東方經略	一三六
第五章	鴉片戰役	一三九
第六章	長髮賊 英佛軍の侵入	一四一
第七章	露國の滿洲經略	一四四
第八章	露國の中央亞細亞經略 伊犁事件	一四五
第九章	佛國の印度支那經略 清佛戰爭	一四七
第十章	清國に對する諸強國の壓迫	一四八
第十一章	支那の革命	一六五
第十二章	東洋近事	一七〇

〔近世史摘要年表〕

〔附錄 歷代地圖〕

第一圖

①	亞細亞地勢略圖
②	周代以前要地圖
③	春秋時代要圖
④	戰國時代略圖
⑤	古朝鮮略圖
⑥	印度古代佛教靈場並に亞歷山大王遠征行路略圖

第二圖

①	漢代亞細亞圖
②	漢楚分爭圖
③	三國鼎立圖

第三圖

①	唐代亞細亞圖
②	北宋遼西夏對立圖
③	南宋金西夏對立時代圖



第四圖

- 元代亞細亞圖
- 元代版圖擴張圖

第五圖

- 明代亞細亞圖
- 清初亞細亞圖
- 清初滿洲圖

第六圖

- 列強亞細亞侵略圖
- 露國中央亞細亞侵略圖
- 露國極東侵略圖
- 佛國印度支那侵略圖

訂五  
編新  
外國歷史教科書 東洋之部 目次終

訂五  
編新  
外國歷史教科書 東洋之部

文學士 中村久四郎 著

第一篇 上古史 (大約五千年前より皇紀九百年代西紀二  
百八十年頃に至る迄大約三千五百年間)

第一章 上代の支那

**東洋歴史** 東洋歴史は、西洋歴史と相併びて、世界史の半をなす所の普通歴史にして、東洋に於ける主要なる諸國の盛衰、社會の變遷及び文化の發展に關する事實を知らしむるものなり。而して我國と密接の關係ある東洋諸國の活動の舞臺は、支那を中心としたる諸國たり。故に本書に於ては、支那を主位とし、其他の諸國の歴史を之に附說せん。



世界最舊國の一

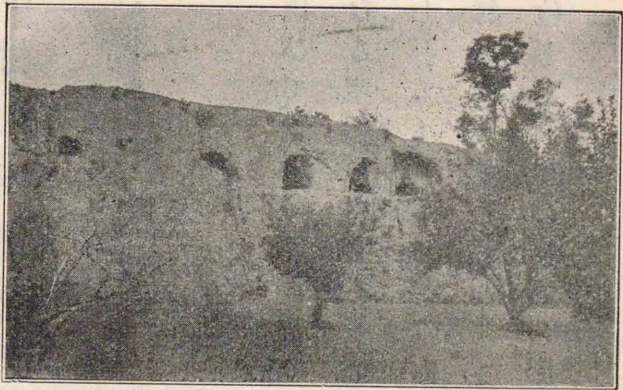
苗族

漢人種

黃帝  
開化の次第

### 建國の起源

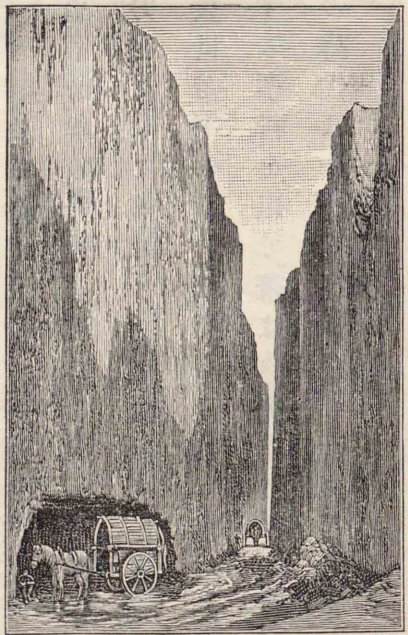
古來我國と地理的及び歴史的關係の深き支那は、亞細亞の一大國にして、世界最舊國の一なり。その太古には、苗族といへる人種ありて、江(揚子)河(黃)の間に住居せしが、今より五千年許り前に、漢人種は西北方より黄河の沿岸に移住し來り、次第に苗族を東征南伐して、先づ北支那の地を占領するに至れり。太古の漢人種は、穴居野處の生活状態にありしが、次第に繁殖發展し、傳説によれば、今より四千五百年許り前に、黃帝といふ英雄あり。諸部落を征服して、支那帝國統一の基を建てたり。黃帝以前、牧畜・農業すでに起り、醫藥の術も始まり、交易の道も開けしが、黃帝の時には、舟車を造り、



(眞寫)居穴の方地縣陽洛省南河得し想道を狀の古太

支那と黄色

音樂を定め、文字を製し、史官の設さへあり、東亞の名産たる養蠶も、亦帝の時に始まり、其他指南車及び實際生活に必要な度量衡など諸種の發明ありしと云ふ。



(眞寫)し通り切の土黄省西山

支那人の黃帝を支那國の開祖とし、漢人の大祖先として尊ぶこと、近來愈盛にして、近くは清朝を倒したる革命軍擧兵の檄文にも、黃帝紀元四千六百九年(明治四十四年)と記したり。支那の建國は黄河地方にして、同地方の土質は黄土(Löss)なり、而して其國統一の始祖は、即ち黃帝なり。黄色は實に支那人の神聖視せし色にして、人君の用ふる色として尊ばれたり。

### 堯舜二帝

黃帝の後に帝堯・帝舜の二君あり。支那の理想的二大



帝堯の政治

帝舜の文徳武功

父母兄弟子の五教

二十四孝の第一



(刻石の代時漢後像の堯帝)

帝堯放勳、其仁は天の如く、其知は神の如く、之に就けば日の如く、之を望めば雲の如し。

父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝の五教を明にして、人民を教へ、外は苗族を南征するなど、力を人事に盡せり。二帝は殆んど師父の態度を以て人民に君臨し、後世帝王に模範視せられたり。特に帝舜は古來支那人の最も重んずる孝行を以て著はれ、所謂二十四孝の第一人として名高し。二帝の時代は今より四千餘年前にして、ともに今の山西省地方に都せり。

聖天子なり。帝堯は心を天道に用ひ、支那曆法の基を定む。時に舜は孝悌賢明を以て名あり。帝堯之を舉げて政を攝せしめ、遂に帝位を舜に禪れり。帝舜は禹、契、棄等の賢臣を用ひ、内は巡狩朝覲の制を定めて、漸く天子の主權を固くし、又

治水の功

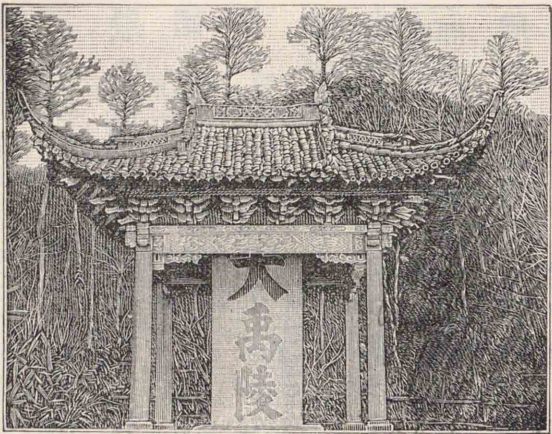
禹の勤儉

王位世襲の始

支那革命の始

### 第二章 夏 殷 周

夏の世 帝舜の賢臣中、禹は堯舜の時に起りし黄河の洪水を治めて、其父の治水に成功せざりし汚名をすすぎ、又帝舜の禪りを受けて、天子となり、國を夏と號し、安邑(山西)に都し、全國を九州に分ち、即位前後力を地道に盡せり。禹の勤儉は甚だ名高くして、孔子も之を稱して、禹は吾れ間然する所なしといへり。禹の子啓も亦賢なり。父につぎて王位に登り、始めて王位世襲の制を開く。其後桀王に至り、悪政を行ひて、殷の湯王に滅さる(皇紀前一七六〇年頃)



浙江省會稽道興縣東南會稽山の禹の陵

一〇〇年頃(西紀) 前一七六〇年頃

(皇紀前一)



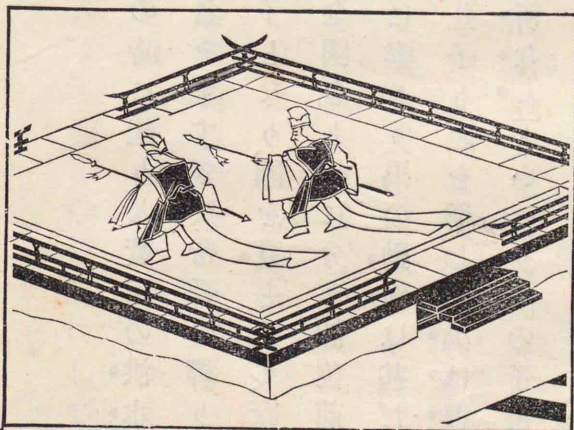
堯舜と桀紂

文武二王

かしくも君が治めし水の音は流れて末の世にひびきけり 近衛忠熙  
 治めえぬ水を治めてたらちねの親の恥をもすすぎつるかな 高崎正風

**殷の世** 湯王は舜の名臣契の後なり。桀王を滅して天子となり、  
 國を商と號し、亳南に都す。其後紂王暴惡にして、庶兄微子、王族箕子  
 及び比干の忠諫も其効なく、終に周  
 の武王に滅され、皇紀前四六〇年頃、西紀前一二〇〇年頃、其  
 末路前代に似たり。商の中頃、都を殷  
河南に遷し、また殷とも號す、

**周の武王** 武王も亦舜の名臣棄  
 の後なり。其父文王は殷の末に、大諸  
 侯となり、仁政を施し、人望あり。武王  
 之につき、太公望を用ひ、紂王を伐ち  
 て殷を滅し、王位に鎬京西陝に即き、一



武王殷の紂王を伐つたとき  
 戰勝祈禱の狀に象るれ舞樂圖譜  
の時るすとんた伐を王紂の殷王武

逆取順守の二王

伯夷・叔齊の高風清節

族功臣を封じて、王室の藩屏となせり。而して其國號は周と稱す。  
**支那の國體** 湯王と武王とは、一は君を放ち、一は君を伐つ。暴  
 力的革命を行ひしも、其政治は順良なりしを以て、逆取順守の聖人  
 と稱せられたり。道理に逆ふて之を取り、道理に順ふて之を守りた  
 りといふ義なり。斯の如く古來支那には王室興亡の革命行はれし  
 が、其革命は純然たる民主主義の革命にあらずして、英雄主義の革  
 命の狀勢をも有し、英雄的權力の所在に恭順して、其統治に服従す  
 る者といふべし。

殷周革命の際、伯夷・叔齊の二義人あり。武王出陣の時、武王の勢に屈せず、臣  
 として君を伐つ。暴舉を諫めしも、きかれず。天下既に周の世なるや、周の  
 粟を食ふを恥ぢて、山に入り、蕨をとり、終に餓死せりといひ、其高風清節は  
 永く後世に傳はれり。

山深くをりし蕨は萬世の道のしをりとなりけるかな 八田知紀  
 蕨のみ折りし心は敷島の大和人にもおくれざりけり 渡 忠秋



周公の賢才

東西兩都

六官

五爵

兵農一致

周の極盛

幽王の失政

周初の隆盛 武王死して子成王猶幼なり。叔父周公之を輔け、政を攝して王室の基を定む。周公賢明多才にして、制度を定め、禮法を正し、後世の模範となれり。又此時都を洛邑(河南)に營み、鎬京に對して東都と稱す。成王の子を康王といふ。成康二王の際には天下太平にして、周室極盛の時なりき。

周の時、中央政府には六官(天官は庶政を總理し、地官は民治教育、春官は祭祀禮、夏官は軍事、秋官は刑律、冬官は土木工藝を掌れり)ありて、國政を分掌し、地方には諸侯ありて、各其領地を分治し、諸侯の爵は、公侯伯子男の五等に分れたり。次に兵制は、事あれば農民を徵集して兵とし、事定れば農に歸らしめ、兵農一致以て常法とせり。

周の東遷 周初極盛の後、明君少くして、暗君多く、王威漸く衰ふ。幽王に至り、褒姒を愛して



(勝會圖名土唐)む諫を王武の周齊叔夷伯

犬戎の侵入

政を怠り、終に西方の犬戎といふ蠻族に攻め殺され、其子平王は犬戎を恐れて、都を洛邑に遷せり(皇紀前一〇〇年)。之を周の東遷といふ。

### 第三章 春秋・戰國

春秋の世 周の東遷の後、凡そ三百年間を春秋の世といふ。この間、周室上に衰へ、王命下に行はれず、諸侯互に相争ひ、夷狄益、侵入す。是に於て、有力なる大諸侯は尊王攘夷を名とし、王命をかりて、他の小諸侯に號令す。之を覇者といふ。

五霸の業 當時覇業をなせし者五人あり。之を春秋五霸と稱す。其第一は今の山東省内に國せる齊の桓公なり。桓公は管仲を用ひ

て、王室を尊び、夷狄を攘ひ、其功業盛大なり。孔子も其功を賛美して曰く、「管仲なかりせば、吾は其れ被髮左衽せん」と。桓公の時、實に我神武天皇紀元前後の頃なり。

齊の桓公

春秋の五霸

尊王攘夷と覇者



管仲の主義及び友道

管仲もと鮑叔と親しく所謂管鮑の交あり管仲曰く「生我者父母、知我者鮑子也」と管仲は富國を政治の先務とし「倉廩實而知禮節、衣食足而知榮辱」といひ、又「公法行私曲止、倉廩實而囹圄空」といへり、囹圄は監獄なり、唐の大詩人杜甫も貧交の詩を作りて管鮑の交を稱せり。

翻手作雲覆手雨、紛々輕薄何須數、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土。

晋文・楚莊及び吳・越二王

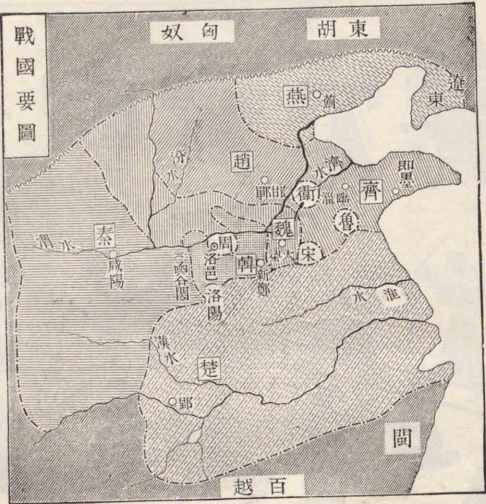
齊の桓公の後、晋の文公は北方に起り、楚の莊王、吳王夫差、越王勾踐の三人は南方に起り、各覇業を成せり。

南北の形勢

支那の南北 春秋時代は上記によりて古代支那の南北戦争時代と看做し得べきことを知るべし。而して後世支那の例によれば、南北並立の時、北常に南より強かりしが、春秋時代は、其初は北部強かりしが、大勢は漸く南部の強盛に傾けり。蓋し北部は夙に開け、漸く文弱となり、南部は久しく蠻勇武樸の風を維持したるによる。而して又古代支那西北文化の早く開けしこと、遠く南方に優りしが、春秋時代、楚、吳、越次第に興りしより、文物始めて東南に及びたり。

南北の文化

戦國七雄



看做すべし。

秦の富強

秦は春秋の時より西方に力を養ひしが、戦國の初、孝公立つに及び、商鞅の策を用ひ、農業を本とし、軍功を重んじ、國富み兵強く、其勢は東方の六國を壓せんとするに至りしかば、合従連衡の説起るに至れり。

孝公と商鞅

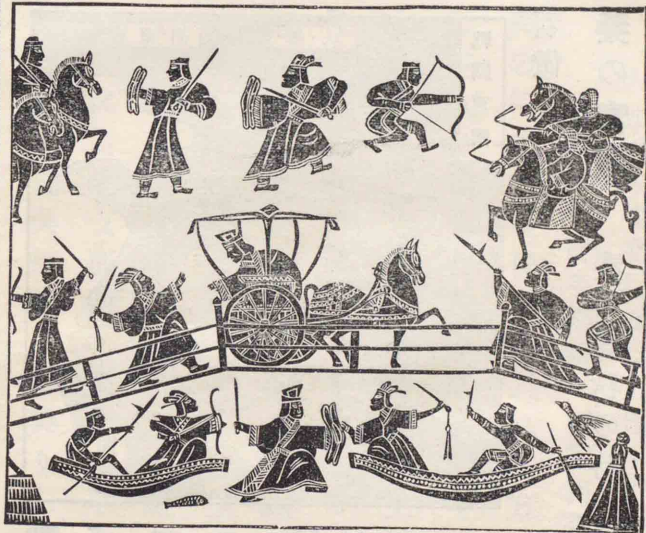
戦國の世

春秋の間、併呑篡奪はげしく行はれ、諸侯の數漸く減じ、平王より凡そ三百年後の支那には、諸侯の強大なる者七あり。秦、楚、齊、燕、韓、魏、趙の七國是なり。この七國は二百年許の間、互に戦争を事とせるが故に、戦國七雄の名あり。而して此時代は六國と秦との東西戦争時代とも



蘇秦の合従  
三寸の舌六國を  
脱く

張儀の連衡



この圖は、後漢時代の石刻によれるものにして、七部は陸上、中部は橋上、下道は水上の交戦を描きたるものなり。之を見て、古代の支那の戦争及び風俗を想像することを得べし。

合従連衡 合従とは六國同盟して秦に當るをいひ、雄辯の策士蘇秦始めて之を唱へ、六國に遊説して、遂に同盟の長となり、専ら秦を弱めんと謀りしも、六國が公約を重んぜざると、秦が離間策を施したるとによりて、合従忽ち破れたり。秦は乃ち權謀の策士張儀をして六國に説きて、秦と和せしめたり。之を連衡の策といふ。是より後、六國は策士の言に惑ひて、或は合従し、或は連衡し、其國是一定せざりしかば、國勢漸く衰へたり。

蘇秦の妙喻張儀の自信  
一舌存して六國亡ぶ

遠交近攻策

猛虎と群羊

上古の教學

蘇秦は諸侯に説くに當り、「寧爲鶏口、無爲牛後」といふ諺を用ひ、張儀は其最初の遊説に失敗して歸り、人に侮らるゝや、「視我舌有則足矣」といひて、其辯舌を自信すること甚だ強かりしといふ。

秦の統一 秦は六國と異なり、進略の方針を一定し、遠交近攻の策を用ひて、益々諸侯を弱め、先づ王室を滅し、秦の始皇帝は、終に破竹の勢を以て六國を滅して、天下を統一せり。(皇紀四四〇孝靈天皇、御代西紀前二二一)當時の秦對六國は、恰も猛虎の群羊を驅るが如き狀にありしなり。而して周は武王より三十八世、八百七十四年にして滅びたり。

西周(東遷前の周、三百五十二年) 春秋の世(約三百年間)  
東周(東遷後の周、五百二十二年) 戦國の世(約二百年間)

#### 第四章 周代の文物 孔子

#### 教育學術

支那教育の始は、帝舜時代の五教にして、夏殷以來學



六藝

大道と小事

上古學術發展の根と芽と花

人智の活動

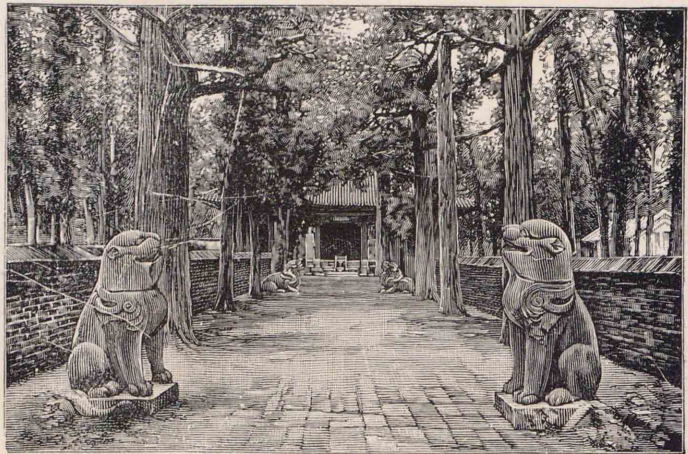
世界の大聖人

校の制あり。周に至りて、學制尤も備はり、大學、小學の設あり。禮、樂、射、御、書、數の六藝を教科とし、大學にては、修身、治國、平天下の大道を教へ、小學にては、洒掃、應對の小事を教へたり。

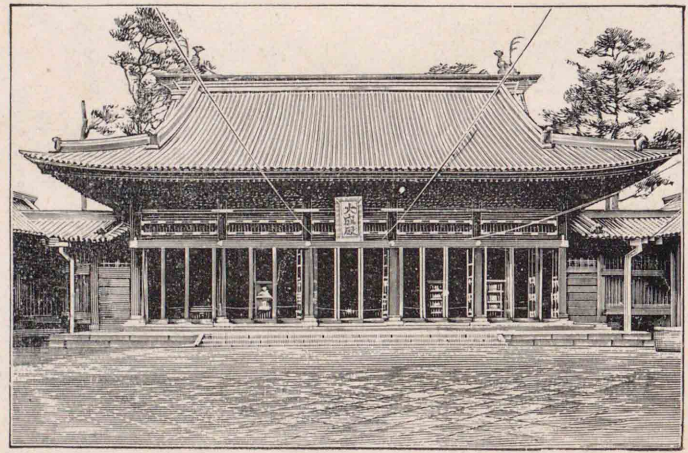
次に學術發展の狀を考ふるに、堯、舜の時、其根を植ゑ、夏、殷の世、其芽を發し、周代に至りては、花を開きて、其美を競ふの狀あり。特に春秋戰國時代は、社會の變動と共に、思想、言論、自由となり、立身、榮達の途開けしかば、學者論客競ひ起り、各自修養の學術を以て、世を救ひ身を立てんことを力めたり。

**孔子** 孔子は、周代學者中の偉人たるのみならず、世界の人類中に於ても、最も偉大なる人格を有する大聖人の一人なり。孔子名は丘キウ字は仲尼チウニ、春秋時代の末、今の山東省内の魯國ロに生る（皇紀一〇九綏靖天皇御代西紀前五

五）元來魯國は周初の元勳にして、周一代の制度、禮法を定めたる周公の封地にして、春秋時代に至りても、猶其餘風を存し、禮義の盛な



孔子墓前の享殿  
（山東省濟寧曲阜縣）



大成殿  
（東京湯島）



孔夫子墓前の享殿

大成至聖文宣王即ち孔夫子の墓の全境を至聖林又は孔林といふ山東省濟寧道曲阜縣城北十町許にあり。圖に示す所の享殿は即ち祭を致す殿堂にして、殿前には古檜老柏路を挟みて森茂し、檜柏の間には華表石虎石麟及び翁仲(陵墓の前の石像にして本邦社寺の矢大臣又は仁王に類す)各二を列し、苔厚く露冷かにして、肅敬の情自から禁ずること能はざるものあり、享殿の後は實に孔夫子の墓なり。

大成殿

大成殿一名聖堂は東京市本郷區湯島三丁目東京教育博物館所在地にあり。徳川時代毎年孔夫子をここに祭り、今また孔子祭典の式場たり、現存の殿堂は、寛政十一年の建築に修理を加へしものにして、既に一百二十餘年の星霜を経たれども、今尙壯麗なり。因にいふ、本邦にて初めて孔夫子を祀りし事の歴史上に明文あるは、今より一千二百餘年前の文武天皇の大寶元年なり。

義勇

孔子の志

論語

るを以て名あり。孔子は此國に生長し、幼より禮式を習ひ、十五にして學に志し、三十にして學成り、四十にして徳義の信念益々堅くして惑はず、七十に至りては、心の欲するまゝに行ひて、一々正義道理に合へり。かくて其學徳の高きと共に、多藝多才、音樂の趣味も人に優り、又其意思極めて強く、義を見て爲さざるは勇なきなり。といひ或は身を殺して以て仁を成す。といひ、道の爲には身命も亦惜まざるの風あり。而して孔子の志は經國實用にあり。其門人を教ふるや、道徳を重んじ、また事功を輕んぜず、孔子も一時魯に仕へて司寇(大體今の司法大臣)となり、政績燦然たりしも、惜むらくは、長く用ひられず。乃ち四方に週遊して、其道を諸侯に説きしも、志を得ず、教育及び著述に従事し、七十四歳を以て歿せり。論語は孔子及び門弟子等の談論を編輯せしものなり。孔子の遠孫は今日に連綿して、山東省の曲阜に住し、政府及び國民より非常の優待を受く。



儒教の大成

孟子と荀子

要は實行にあり



孟子の墓 (山東省濟寧縣)

儒教は實に孔子の大成せし徳教にして、孔子は身を修め國を治むるには人々相親愛する仁により、仁の最上徳に達するには、家族制度の中心道德たる孝悌の道より始むべしと教へ、又君臣の名分を嚴にせり。其孫子思は誠の道を説き、その後孟子は性善説を唱へ、又王を尊び覇を卑し、仁義を重んじて、功利を輕んじ、且つ人々皆聖人たることを得べしと説き、荀子は性惡説を唱へ、孟子と相反す。しかも皆孔子の流を汲めり。

聖賢の書は、随つて讀み、随つて行ふべし。若し讀みて行はざれば、徒に光陰を費し、精神を勞するのみ。要は實行にありと知るべし。

日のもとに仰げど高しから國のおほき聖人の道の光は 清水濱臣  
 日の本に渡らんとせしわたつみの深き思もありけるものを 渡 忠秋  
 右の第二の歌は孔子が我國に渡來せんとせられたるが如き言、論語に見

論語託孤の章

老莊の學

諸子百家

信玄と孫子の語

ゆるによりて詠じたるものなり。

豊臣秀吉薨ぜし年、前田利家は加藤清正及び浮田淺野諸將を招き、談論語に及ぶ。因りて曾子曰く、以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし。大節に臨みて奪ふべからざるは、君子の人なり。といへる一章を擧げて清正等に示して曰く、今日に在りて、此語を忘るゝものは、之を忠臣といふべからず。と。清正等の忠節を堅からしめたるは、利家の言、與りて力ありしといふ。因みにいふ、周代の一尺は大體今の曲尺七寸六分なり。

又、論語讀みの論語知らず、といふ諺あり。亦以て論語が實行教訓の書として普及尊重せられたるを見るべし。

諸子百家

孔子と同時代に楚の人老子あり。自然無爲の道を説き、列子、莊子、其説を傳ふ。此一派の學者を道家といふ。儒道二家の外、諸學者競ひ起り、楊子は自愛説を立て、墨子は兼愛説を唱へ、孫子、呉子は兵法を講ず。凡て是等を總稱して諸子百家といふ。

武田信玄嘗て孫子の語を以て、其旗に書して曰く、不動如山、侵掠如火、其靜如林、其疾如風。と。信玄の如きは、實に孫子名言の神味を悟りたるものなり。



第五章 秦の統一

政體改革



秦始皇帝

始皇帝の内征 秦の始皇帝

六國を滅して、天下を統一するや、大に政體を改め、中央政府には、丞相、太尉、御史大夫を置きて、全國を直轄し、地方には新に郡

文字の改定  
兵器の沒收

縣の制を布き、全國を三十六郡に分ち、各郡に守、尉、監を置きて之を治め、民心を一にし、叛亂の源を塞ぐ爲に、文字を改め、度量衡を一にし、民間の兵器を沒收し、且つ地方の富豪を帝都咸陽(周都鎬京の北)に集め、又大に宮殿を築き、屢、地方に巡幸して皇帝の尊嚴を示し、盛に中央集權の政を行へり。

文字の起源は堯舜以前にあり、上古の文字を古文と稱し、周の世まで用ひ

南越  
萬里の長城  
匈奴

草	行	楷	隸	篆	古文
日	日	日	日	日	日
月	月	月	月	月	月
魚	魚	魚	魚	魚	魚
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥

秦の天下は大に擴張し、其威名遠近に振ひ、諸外國は秦の名を訛り

來りしが、周の時篆書の發明あり、秦に至り、篆書を改良して隸書をつくり、其後楷行草の三體起れり。

始皇帝の外征 始皇帝は内に

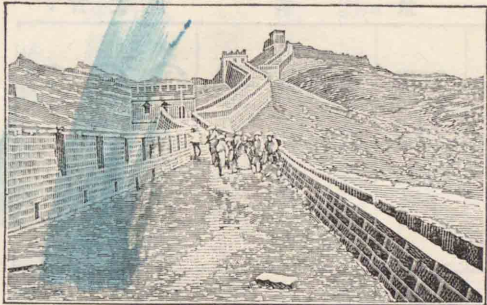
文帝威を示すと共に、外に向つても大に國威を輝せり。時に戰國以來支那の北邊に侵入せし匈奴(Histung-nu/Huns)といふ北狄は益、入寇の勢ありしかば、帝は將軍蒙恬をして之を擊退せしめ、北邊に長城を増築して、其侵入を防ぎ、また南越を征して今の安南地方まで定めたり。是に於て



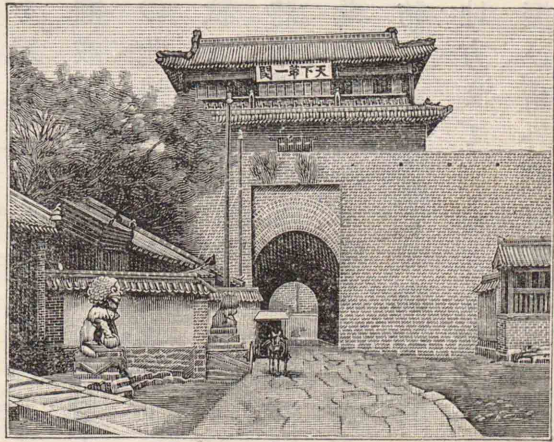
國民新政を厭ふ

過激手段

て、支那と呼び、遂に國名となすに至れり。  
 燒書坑儒 かくて帝の内外の事業は大なりしも、其費用と勞役も亦多し。國民は其負擔に苦しみて、漸く新政を厭ひ、學者も亦之を非難するものありしかば、帝は丞相李斯の議を用ひ、醫藥卜筮農業以外の民間の書を燒き、遂に儒生四百六十餘人を坑に埋めて、以て異論を抑壓せんとせり。



萬里長城



山海關 (萬里長城の一端)

秦の滅亡

秦の政事はかくの如く、かつ秦

趙高の專横

項劉二雄

大言不中



を怨める六國の遺臣の隙を窺ふ者ある時に際し、創業の英主始皇帝は統一後後僅に十二年にして死し、少子二世皇帝立つや、其暗愚なるに乘じ、宦官趙高權を專にして、暴政を行ひしかば、楚人陳勝まづ叛し、群雄相つぎて起れり。中にも江東(蘇江)に起りし楚人項羽と沛

(蘇江)に起りし劉邦とは、最も有力なる英雄なりき。而して劉邦はつひに項羽に先ちて咸陽の都に迫る。時に二世皇帝は趙高に弑せられ、秦王子嬰位に在り。終に出でて劉邦に降り、始皇帝が二世三世とかぞへて萬世に至り、之を無窮に傳へんと大言せし秦の天下も、始皇帝の死後僅に三年にして滅びたり(四五五孝元天皇御代西紀前二〇六)。是より先き、戰國の末に楚の亡ぶるや、楚の人は大に秦を怨み、楚は三戸といへども、



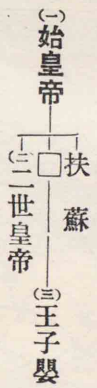
秦を亡ぼすものは必ず楚ならん」といへり。秦の滅亡に當り楚人最も多く奮闘せしは、三戸云々の言の實現したる者といふべし。我應神天皇の御代、秦の後と稱するもの朝鮮より歸化し、秦氏といひ、蠶織の功あり、秦氏は今も猶多し。

秦始皇帝

税所敦子

萬世につたふるものは國のためたてし、<sup>ナガキ</sup>長城のあとのみにして

秦の系圖



第六章 漢の統一

漢楚の争 劉邦既に秦を滅し、政を寛にして民心を收む。項羽後れて至り、その謀臣范增は劉邦を鴻門<sup>(咸陽の東)</sup>に撃たんことを勧めし、事成らず、項羽は遂に其勢力をたのみて、擅に群雄を分封し、劉邦

鴻門の會

漢王  
西楚の霸王

漢の三傑

長安の都

項羽の慷慨悲歌

には巴蜀<sup>(川)</sup>漢中<sup>(西)</sup>陝<sup>(西)</sup>の僻地を與へて、漢王と稱せしめ、自ら彭城<sup>(江蘇)</sup>に都して、西楚の霸王と稱す。

是に於て、劉邦大に怒り、項羽を攻めんとし、秦の滅後の天下は、つひに漢楚の争となれり。劉邦は其武勇、項羽に及ばざるも、よく民心を收め、且つ蕭何、張良、韓信の三傑及び陳平等を善用せしかば、漢楚相戦ふこと四年に及びて、項羽の勢漸く衰へ、終に垓下<sup>(安徽)</sup>に敗れ、烏江<sup>(揚子江下流)</sup>に自殺し、劉邦は天下を一統して帝位に即き、長安<sup>(古の鎬京)</sup>に都す。之を漢の高祖とす。<sup>(四五九孝元天皇御代西紀前二〇二)</sup>

明治天皇御製

山を抜く人の力も敷島の大和心を基なるべき

項羽垓下に圍まるゝや、四面皆楚歌するを聞き、驚きて、「漢皆己に楚を得たるか、何ぞ楚人の多きや」といひ、慷慨悲歌して、「力拔山兮氣蓋世、時不利兮驩不逝、驩不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」といひしに、左右の人泣きて、能く仰





(傳畫堂笑晚)王覇の楚四

ぎ視る者なかりしといふ。雖は羽の駿馬にして虞氏は其寵姫なり。太田蜀山人項羽の歌を意譯して曰く、山を抜くべき刀も折れぬ世を蓋ふべき袂も朽ちぬ。あはれ手弱女あはれ我が駒。

漢の高祖

高祖は微賤より起り善く文武の人材を用ひて天下を取りしが晩年に至り有爲の功臣を忌み憚りて多く之を誅せり。帝はまた秦の孤立して早く滅びたるに鑒み子弟同姓を諸方に封じて帝室の藩屏とせり然れども諸王の地廣大に過ぎ遂に諸王反抗の禍源を成せり而して高祖の創めたる漢朝は多年支那を支配して益支那帝國成立の基を定め其威名内外に振ひ後世に傳はり漢土及び漢人の名は支那人の別名となるに至れり。

漢の高祖は天下一統の後故郷に歸り故舊及び青年を招集して祝宴を開

子弟の分封

漢土・漢人

高祖の得意

兩雄の對照

呂氏の亂



漢の青年をして之に和して合唱せしめたり。得意の中に凜然たる活氣を存し勝利に油斷せずして勝つて胃の絡をしめるの趣あり之を前の項羽の虞や虞やの歌に比すれば、彼は悲愴此は雄壯項羽は失意高祖は得意其對照は實に著し更に兩雄を比較するに項は其才を恃み劉は其才を恃まず項の才氣は銳に過ぎ劉の才氣は銳からず項は一己の智勇に任じ劉は天下の智勇を用ひ項の度量は廣からず劉の度量の廣かりしが如きは兩雄成敗の分るゝ所にして尙具體的事實を擧げんか韓信陳平皆項を去りて劉に歸服し項は秦の降王子嬰を殺して秦人背き楚王を殺して楚將離れしが如きは項の失敗の源因の主なるものなるべし。

文帝景帝

高祖死して惠帝嗣ぐ母后呂氏創業以來内助の功あるを以て實權を握り惠帝の死後呂氏の族は帝位を篡はんことを



文・景二帝  
仁君文帝

諸王反抗の平定

圖りしが、成らずして皆誅せられ、惠帝の弟文帝位につきて、漢室また安らかなり。文帝及び其子景帝は良主なり。特に文帝は賢明の仁君にして、深く民治に注意し、刑罰を寛にし、儉約を行ひ、農業を勵まし、屢、租税を減ぜしかば、吏民安樂し、國庫も富裕となれり。ついで景帝の世には、當時既に漸く疎遠となり、且つ漸く驕慢の弊を生ぜし同族諸王の反抗を、平定して、高祖以來の禍源を除きしかば、漢朝統一の基礎益、固く、中央政府の權力始めて強大となれり。

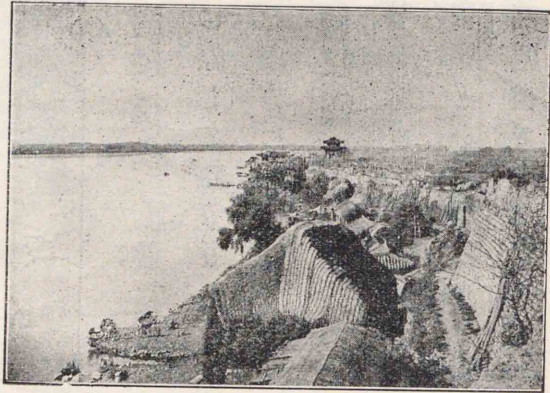
### 第七章 武帝の業 四夷の服屬

年號の始  
在位五十四年

文武の功業 景帝死して、その子武帝嗣ぎ、年號を建てて建元といふ(五二一開化 天皇御代)。帝は文・景二帝國家富裕時代の後をうけ、在位五十四年、文武の功業甚だ多し。文教の事は之を後の章に譲り、まづ漢人の武威を輝したる四方征服の事をのべん。

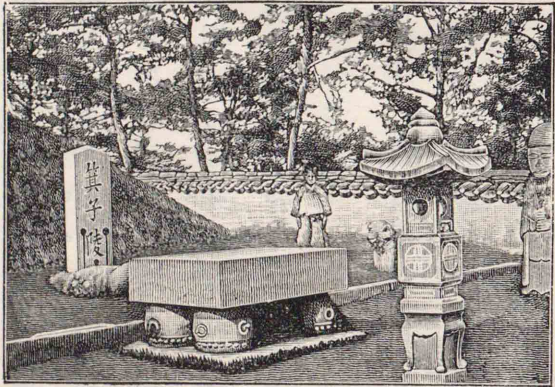
箕氏と古朝鮮

武帝の古朝鮮征服



江(眞寫) 同 大 都せしが、漢の初に至り、燕人衛滿來りて其國を奪ふ(四六、七)。

孫衛右渠は漢の命を拒みしかば、武帝は之を征服して(五五三開化 天皇御代)、其地に漢の四郡を置けり。時に半島の南部には、馬韓(京畿、忠清、南北、全羅、南北)、辰韓(慶尙、南北)、弁韓(慶尙、南、道、南部)の三



(眞寫) 陵の子箕

#### 古朝鮮征服

漢の東には古朝鮮あり。古朝鮮は周の初め殷の王族箕子の封ぜられる國にして、今の大同江と遼河との間の地を占め、箕氏はつひに今の平壤に



三韓  
和・韓・漢の交通



韓あり。漢と三韓との關係漸く起り、三韓と交通せし我國人と漢との交通も亦從つて開けたり。爾來その土地我國と支那との間にありし朝鮮には、和漢關係の事件頗る多く、文物の傳播も亦少からざるなり。

南方發展

### 南越征伐

曩に秦の始皇帝に征服せられたる南越は、秦末の亂に際して獨立せしが、武帝は其内訌に乗じて之を征服し、漢の勢力を南方に擴めたり。

匈奴の冒頓單子

### 匈奴征伐

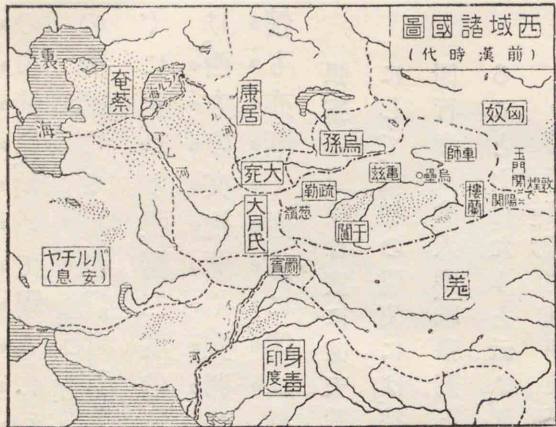
北方の匈奴は漢の大敵なり。是より先き匈奴は秦の勢を避けて、一時遠く北方に退きしが、漢の初、匈奴の單于(匈奴の王號)に冒頓(冒頓)といふ豪傑あり。支那北邊一帶の地を併吞し、屢、漢に入寇せり。高祖嘗て之を親征して敗れ、屈辱的の和親を結びしより、匈奴は益

武帝の雪耻

衛・霍二將軍

### 武帝の遠交近交策

西域・印度の事情



漢を侮る。武帝は之を慨き、匈奴を撃ち攘ひて、祖先と國民の耻を雪がんと欲し、屢、大軍を發して之を伐ち、終に内蒙古の地を取れり。衛・霍去病は時の二大將軍にして、霍去病の如きは、匈奴滅びずんば、家を以て爲すことなかれといひ、其意氣盛なるを以て名高し。

### 張騫の遠使

是より先き、漢の西北に月氏(トチベツ族)あり。匈奴に逐はれて、遠く中央亞細亞に走り、新に大月氏國を建つ。武帝は大月氏と同盟して、匈奴を挾撃せんことを圖り、堅忍寛大にして、又探險に長ぜる張騫をして大月氏に使せしむ。時に大月氏は新領地に安んじて、復讐の志なきを以て、張騫は目的を達せずして歸國せり。されども、其復命によりて、西域・印度



漢と西方諸外國

の事情は、始めて漢人に知られたり。張騫は再び西にゆきて、大月氏の隣國なる烏孫(今の伊犁地方のトルコ族の國)等に使い、匈奴を牽制して、其勢を殺ぐに至れり。張騫二度の遠使後、漢と西方諸外國との交通始めて開け、西方の文物漸く支那に入り、支那の事情も亦漸く西方に傳はれり。

往復十三年

張騫の遠使は實に破天荒の冒險的大旅行にして、最初の遠使には往復十三年を費し、同行者百餘人中、唯張騫と一從者とのみ還ることを得たりと云ふ。又張騫は西方諸國より葡萄、苜蓿、胡麻、胡桃、石榴等の物産を携へ還りしといふ。葡萄の字の如きは、希臘語のボトルスの音譯にして、ボトの上の音を譯して、下のルスを省略せしものなり。

宣帝の中興

武帝は上の如く外征を



(縣泉酒省肅甘)關峪嘉の方地上途征遠方西騫張

民力疲弊

事とし、又頗に土木を起せしかば、財政困難となり、民力疲弊して、人心漸く動きしが故に、帝も頗る自ら悔い改めたり。武帝は雄才大略の稱すべきのみならず、晩年過を悔い改めしは、特に稱すべく、英主の名に負かずといふべし。帝死して昭帝

武帝の英明

宣帝相嗣ぎ、ともに民力の休養を力めたり。特に宣帝は賢相、良吏を選び用ひて、善く國を治め、中興の良主と稱せらる。

民力休養

宣帝は又武帝の業をつぎ、烏孫を援けて、大に匈奴を破れり。是より匈奴大に衰へ、匈奴の衰微するに従つて、西域諸國多く漢に歸服せしかば、鄭

中興の良主



(眞寫代近) 景 風 の 亞 中

宣帝は又武帝の業をつぎ、烏孫を援けて、大に匈奴を破れり。是より匈奴大に衰へ、匈奴の衰微するに従つて、西域諸國多く漢に歸服せしかば、鄭



西域都護の初任  
漢の勢力範圍

吉を西域都護に任じ、烏壘城(天山南路)にありて、之を統監せしむ(六〇)。而して匈奴も後つひに漢に降れり。かくて武帝以來の征伐によりて、漢の勢力範圍は大に擴張し、東は朝鮮より、西は天山南路に達し、北は内蒙古より、南は安南地方に及び、四夷の服屬甚だ多し。

前漢の系圖



第八章 前漢の衰亂 後漢

王莽の篡奪  
漢の極盛は、武宣二帝の世にありて、其後漸く衰へ、宦官外戚政を執り、權を弄して、帝室愈振はず。特に外戚王氏の一族最も專横なり、中にも王莽は奸才に富み、巧に恭儉を装ひて、人望を

漢の中絶

收め、遂に宣帝より四代後の平帝を弑して、自ら帝位に即き、國を新と號せり。是に於て、漢は一旦中絶す(六六八垂仁天、皇御代西紀八)。

漢の再興

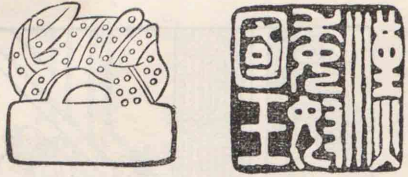
然れども人心未だ漢を去らず。王莽は即位の後、急に諸制度を變更し、課税亦重きを加へしかば、不平の群雄四方に起り、王莽は忍ち敗死せり。新の國運僅に十五年なり。時に四方の群雄中、

劉秀の威望  
洛陽の都

漢の皇族劉秀の威望最も高し。遂に推されて帝位に即き、都を洛陽(古の洛邑)に奠め(六八)、群雄を平定して、天下を一統せり(六九六垂仁、天皇御代)。之を後漢の光武帝とす。

望蜀の念

我國の九州と後漢

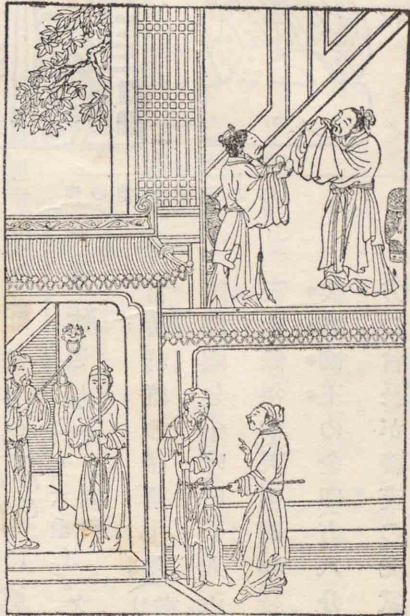


漢の委蜀國の印

當時群雄の諸國中、隴(甘肅)蜀(四川)の平定尤も後れたり。光武既に隴を平げ、曰く「人苦不自足、既得隴、復望蜀」と。今より百三十餘年前(天明四年)、筑前國博多灣頭の志賀島に於て、漢委奴國王の金印(方八分弱)を發掘せり。是れ即ち我九州地方の會長が後漢の光武帝より受けしものなるべしとい



光武帝の政治



(解像諒聖) く却を賂賄震楊

ふ、此印今は黒田侯爵家に保存せらる。

後漢の盛衰

光武帝は

天下平定後力めて兵を用ふることを避け、専ら内治に注意し、節義を奨励し、人民を休養せしめたり。明帝

漢運再盛

章帝も、亦よく其遺業をつぎ、漢の國運復た盛となり、漢と諸外國との交渉事件相ついで起る。其事は之を次章に述べん。

黨錮の禍

然れども第四世の和帝以後の諸帝、多くは幼弱にして外戚宦官の專横なること、猶前漢の末路の如し。而して宦官の專横甚しきに及んで、節義を重んずる學者等盛に之を攻撃せしかば、宦官は之を目して黨人となし、皆之を禁錮せり。之を黨錮の禍といふ。かくて政益

楊震の四知

亂れて、國家漸く衰へたり。

楊震は後漢の名士なり。其性極めて廉直、かつて郡守となるや、ある夜、人あり金を贈り、暮夜知る者なしといひて、金を受けんことを勧めたるに、楊震は、「天知、地知、子知、我知、何謂無知」といひて、之を却けたり。所謂楊震の四知即ち是なり。

をろかなる身を天地に恥ぢもせて心の知るを何かくすらん 宗祇

第九章 西域との交通 印度 佛教の東流

後漢の外征

さきに、漢に歸服せし匈奴は、王莽の時また叛きて

北邊に入寇せり。當時匈奴は南北二部に分れ、南匈奴は早く後漢に降りしも、北匈奴は西域諸國を威服して漢に反抗す。明帝は遂に竇固等をして之を征せしめ、又武帝時代の政策を用ひ、智勇兼備にして、眞實の情に富める班超を遣して、西域諸國を經略せしむ。

班超の遠征匈奴の衰微

班超西域に遠征し、示すに漢の恩威

南北匈奴



匈奴の西方移轉

西域都護の適任

匈奴の西方移轉

を以てせしかば、西域五十餘國、多くは漢に歸服せり。漢は乃ちまた西域都護を龜茲（天山南路）に置き、班超を以て都護となせり。是より北匈奴の勢衰へ、漢は之に乗じて頻に攻撃せしかば、匈奴は終に遠く西亞細亞の裏海方面に逃れ去り、匈奴の患ここに止みじが、鮮卑（蒙古）兩種の混合種なるべしと稱する蠻族東より遷りて、匈奴の地を占領し、亦漸く北邊の強國となれり。

班超の奮發  
班超（班固の弟）  
班固（史記の著者）  
班超（班固の弟）  
班超（班固の弟）

班超の兄妹



班超（無雙體）

東洋と西洋との交通 この時

班超西域に在ること三十餘年、其功甚だ大なり。家もと貧にして、寫字を業とせしが、一旦奮發して、筆を投じて、寶固の部將となり、其西域に使するや、途に匈奴の使者に遇ふ。班超部下を激勵して曰く、「不入虎穴、不得虎子」と。夜襲ひて匈奴の使者を殺せしより、西域諸國皆震恐せり。而して班超の兄班固は文章と修史に長じ、妹班昭は婦徳と文學を以て名あり。

世界の二大帝國

羅馬の使者

西洋人の東洋通

支那の輸出入品

支那と印度

に當り、西洋に於ては、羅馬帝國の勢盛にして、東洋の漢と相對して、世界の二大帝國たり。而して漢は羅馬の強大を聞き、羅馬もまた漢の富強を知り、互に相交通せんとせしも、中間の安息國（今の波斯地方）之を妨害せり。されども後漢の末に至り、羅馬帝安敦の使者は、海路より後漢に通ぜり（八二六成務天皇 御代西紀一六六）。是より後、西洋の商人は往々今の東京地方に來りて貿易を行へり。

當時支那人の輸入品には、珠玉、瑠璃、琥珀等あり。其輸出品の主なるものは絹なり。西方の人は支那の絹を再製して、輕紗、薄羅となし、大に羅馬の富民に嗜好珍重せられ、一時は絹と黄金と同一の重量を以て賣買し、輸入過多の弊さへ生ずるに至れり。

古代の印度 印度は、支那とともに世界最舊國の一なり。今より四千餘年前に、アリア人種（Aryans）の一派は、中央亞細亞より南下して、印度に入り、土人を征服して國を建てしこと、支那の上古、漢人が苗族を



印度の四種姓

衆生の渴望

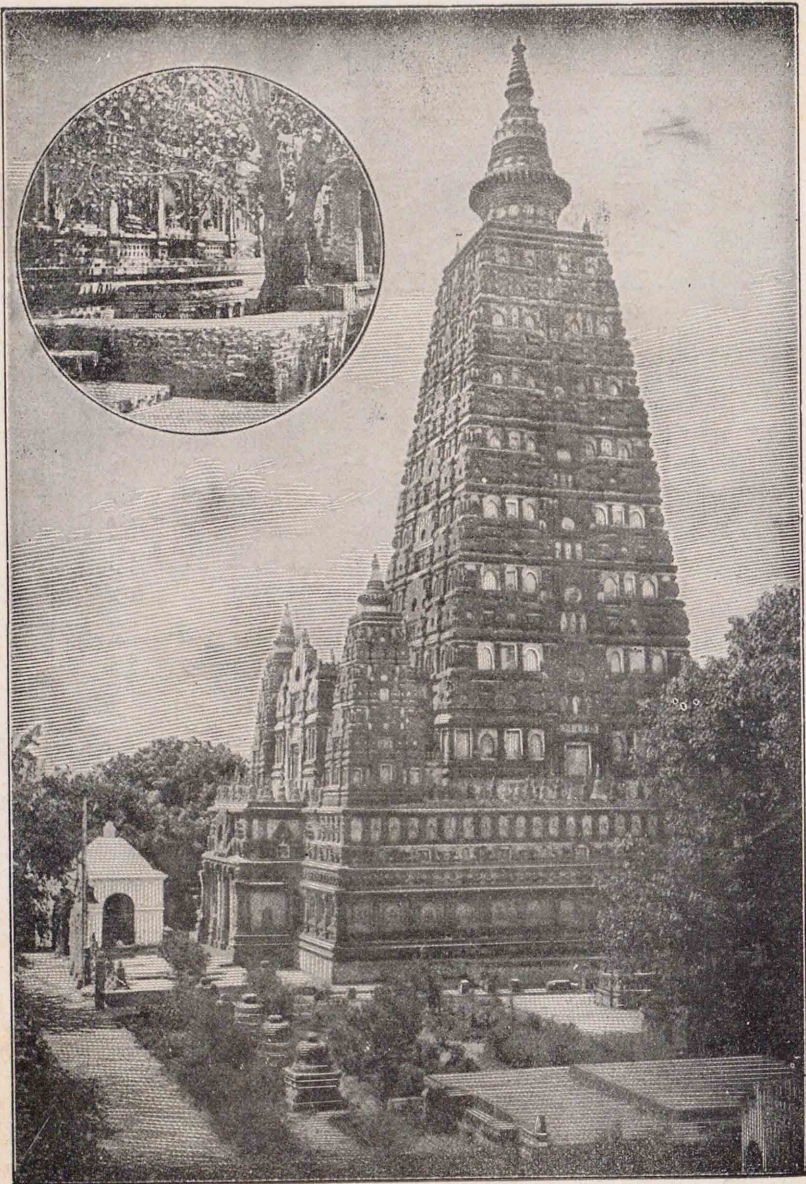
世界三聖の一

逐ひて國を建てしに似たり。かくて古代印度には優勝のアリア人と劣敗の土人混住し、婆羅門教と稱する宗教行はれ、國民は僧族・王族・平民・奴隸の四種姓に分れしが、種姓の階級區別嚴にして、最高の僧族は宗教と學術とを掌りて、專横貪慾を極め、他の三種姓は其壓制に苦しみ、世を救ふ聖人の出でて宗教を革新せんことを渴望せり。

**釋迦牟尼佛** この時世界三聖の一人たる

釋迦生る(九七頃綏靖天皇御代西紀前五六四頃)其本姓名を喬答摩悉達といひ、もと中印度迦毘羅城(今のネパールの地方)主の王子なり。深く社會の腐敗と人生の無常と

に感じて、衆生濟度の念を起し、遂に宮を出でて山に入り、難行苦學すること六年、後遂に山を出で、中印度の摩揭陀國に至り、眞正の解



釋尊大悟成佛の靈場の高塔及び金剛座



釋尊大悟成佛の靈場

此靈場は、今の印度のベンガル州のガヤ市の南三里許の佛陀迦耶 (Buddha-Gaya) にあり。釋尊の靈場印度に多けれども、之を以て第一とす。釋尊は此靈場の菩提樹下の金剛座に端坐し、沈思默念の末、廓然として大悟し、佛陀となられたり。圖中の高塔は此古蹟に建立せる者にして、其起源は、遠く二千一百餘年前の阿育王 (釋尊死後二百年許) の時にあり、而して近世緬甸王及び英國人の修復再興せし者なり。高さ百七十尺許、基址の一邊五十尺許なり。上圖圓形の部分は、即ち塔下の菩提樹及び金剛座なり。因にいふ。釋尊大悟の時は、其年三十五歳の二月八日にして、四月八日は釋尊の誕生日なりと傳へらる。

光と闇の分るゝ所

成道又は成佛

一切平等

釋迦も人なり我も人なり

脱ダツに到達する、必ずしも苦行に由らざることを自覺し、今の佛陀迦耶Buddha-Gayaに來りて、菩提樹下の金剛座に端坐し、若し正覺を得ずんば、誓つて此座を去らずと決心せり。

あゝ、釋迦は正覺を得るか、得ざるか。是れ正に善と惡との戦ふ所、正と邪との争ふ所、光と闇との分るゝ所なり。かくて釋迦は一意潛心、解脱の方法を思惟し、一旦廓然大悟し、正覺を得て佛陀Buddha (單に佛ともいふ眞理を悟りたる) となられたり。之を成道成道といひ、其教を佛教佛教といふ。釋迦は成道の後、四十餘年間諸國を巡りて説教せしが、一切平等一切平等を唱へ、種姓の差別なく、正道を行へば、皆成佛成佛することを得べしと説きしかば、從來僧族の壓制に苦しめる諸種姓は、皆喜んで佛教に歸依せり。

釋迦の歿したるは、皇紀一七七年頃 (西紀前四八四年頃) にして、孔子の歿したるより僅に五年前なれば、釋迦と孔子とは、殆ど同時の二大聖人なり。釋迦もまたあみだもとは、人ぞかし我もかたちは人にあらずや

一休和尚



阿育王と佛教の傳播



はシリアより、東は緬甸に達するに至れり。

佛教東流

大月氏のカニシカ王  
後漢の明帝佛教を大月氏に求む

阿育王の後、更に三百年許を経て、後漢に至り、中央亞細亞の大月氏國にはカニシカ王あり。また篤く佛教を信じ、その布教に盡力せり。當時大月氏の勢頗る強く、その領地は北西兩印度より天山南路にも連りしを以て、佛教は次第に天山南路にまで流行せり。而して天山南路の東方は即ち後漢の領地なり。時に後漢の明帝は佛教の事を傳聞し、蔡愔を遣して佛教を求めし

阿育王の佛教信仰 かくて佛教は次第に流行せしが、釋迦の死後、二百年許を経て、中印度の摩揭陀國に阿育王立つに及び(三三九頃)佛教を信ずること篤く、其保護傳播に熱心なりしかば、教化の及ぶ所、北は中央亞細亞より、南は錫蘭島に至り、西

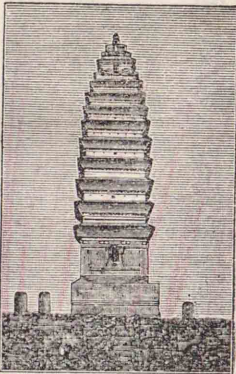
白馬寺

印度僧の譯經

武帝の儒教文學の獎勵

む。蔡愔大月氏より高僧を伴ひ、佛像・經論を携へ歸り、洛陽に白馬寺を建てたり(七二七垂仁天皇御代西紀六七)是より佛教は漸く支那に流行し、また本邦にも傳來して東洋の大宗教となれり。

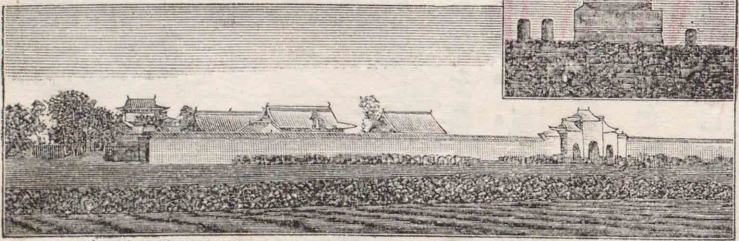
蔡愔とともに支那に來りたる中印度人迦葉摩騰と竺法蘭は、白馬寺に於て佛經を漢譯せり。これ支那に於ける譯經の始なり。



白馬寺の齊雲塔(塔は東のりに)河南省洛陽縣(洛陽縣)

第十章 兩漢の文物

前漢の文物 秦の燒書坑儒の暴政、及び其後の戰亂により、古典大に散亡して、學術の發達を妨害せしが、漢の統一後文敎漸く再興せり。特に武帝は儒教を好み、大學





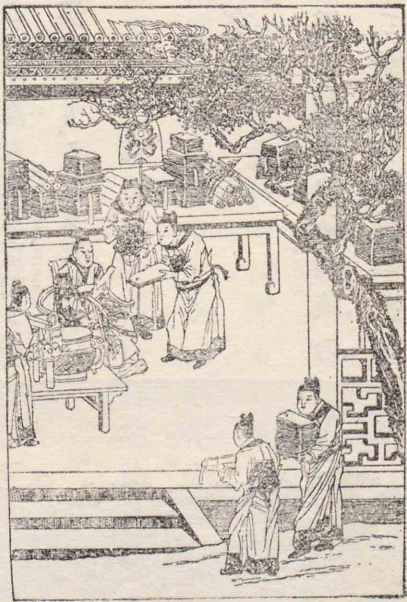
司馬遷の史才

を興し、五經博士を置き、儒教を以て國家政教の標準とせり。帝また文學を好みて之を獎勵せり。當時の文豪司馬遷の著はせし史記は後世修史の模範となれり。又高祖の時以來諸宮殿を建て建築の術も漸く發達せり。

後漢の文物

光武帝は武

功を以て漢朝を再興せしも、國既に定りては、妄に武功を食らず、學校を起し、特に名節を勵まし、諸功臣も、皆書を読み、儒者の風あり。明帝、章帝も亦儒を尊び、學を重んじたれば、後漢の學術頗る盛にして、清節の士も亦多かりき。是より先き秦の蒙恬始めて毛筆を精製せしが、後漢に至りて蔡倫は工藝思想に長じ、古來寫字の用に供した



(略) 帝武の經典表影 (欽定) 蔡倫の發明

名節獎勵

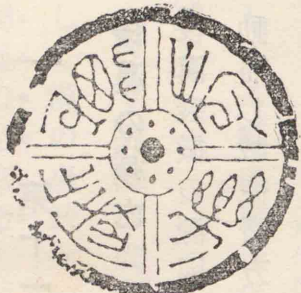
筆紙の改良發明

漢人の忠孝說



(右) 漢并天下 (左) 長樂萬歲

名節獎勵



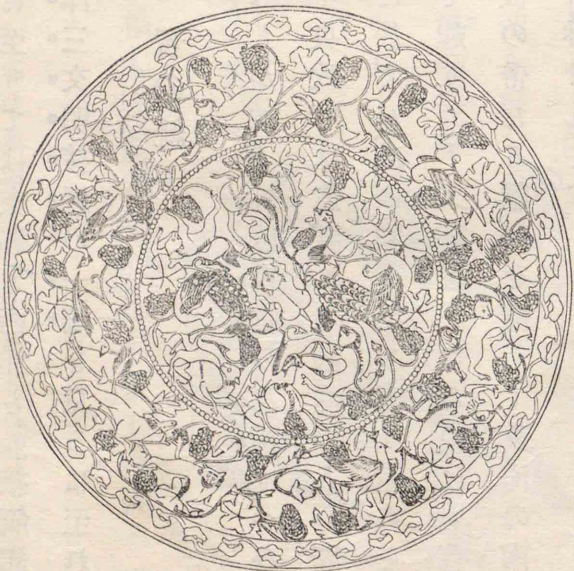
に漢代には佛教の東流あり。加之、前漢の武帝以來、支那と

三文明の近接

「求忠臣」必於孝子之門、といひ、帝に納れられたり。

る木版竹簡及び絹帛の類を不便不廉なりとし、始めて紙を製したり。

章帝の時、詔して人材貢舉を議せしむ。章彪は議して



(鑑古清西) 鏡銅青の代漢の草唐葡萄の櫻影的麗希



西方諸國との交通あり。後漢に至りては支那と西洋との接觸起りしを以て、ここに支那印度西洋文明接近の一端を見るに至れり。

### 第十一章 三國 晋の統一

**後漢の滅亡** 第八章にのべしが如く、外戚宦官の専横は、つひに後漢衰微の源因となり、其後中央政府は愈々亂れて、國內の人心漸く動搖し、賊徒諸方に起れり。是に於てか、或は賊をうち、或は宦官を誅するを名として、群雄相ついで起り、天下又亂世となる。中にも曹操は奸雄の智略に富み、後漢最後の帝たる獻帝を擁して、黄河の南北を征服し、ついで江南の地を併呑せんとす。

時に漢の王族劉備、大志あり、漢室の興隆を圖り、曹操を倒さんとして志を得ず。遂に忠臣諸葛亮の策に従ひ、援を江南の孫權に求む。孫權意氣を以て相感じ、其求めに應じて兵を出し、大に曹操の軍を赤

曹操の智略

劉備の大志

諸葛亮の忠武

孫權の意氣

赤壁の戰

天下三分

三國の名  
昔有名  
現在在る位

三國鼎立

壁湖に破れり八六八應神天皇御代

かくて劉備は更に孫權の後援によりて、巴蜀漢中の地を定めて之に據れり。是に於て支那の北部は曹操に、南部の東は孫權に、其西は劉備に屬して、天下三分の勢をなせり。既にして曹操の子曹丕は、終に獻帝を廢し、洛陽に都す八八〇應神天皇御代西紀二二〇之を魏の文帝といふ。漢は前後併せて四百六年にして滅ぶ。

ついで劉備は成都川に都

して、漢の皇統をつぐ。之を

蜀漢の昭烈帝といふ。やがて孫權も亦建業江蘇今の南京に都し、吳國を建て、大帝と號せり。

劉備は關羽及び張飛と友とし善し、名は君臣なれども、恩義は兄弟の如く、



(關紀俗清) 像帝聖關



關帝廟

始終苦樂を共にせり。關羽は特に忠義を以てあらはれ、後世武運の守護神として感靈著しく、又幸福長壽の神として崇拜せられ、所謂關聖帝を祭れる關帝廟は支那全國到る處にあり、朝鮮人も亦之を信仰す。

三國の鼎立 蜀吳魏



(傳畫堂笑晚) 亮 葛 諸

の三國相争ふこと五十年許、人材頗る多し。其中蜀の地は最も小なりしが、諸葛亮の忠誠武略によりて、能く魏吳の二國と並び立ちて、鼎立の勢をなせり。而して昭烈帝はついに其志を得ずして死し、諸葛亮は遺詔を奉じて、後主劉禪を輔け、必ず漢室を恢復せんと欲して、魏を伐ちたるも、魏は依然として最も強く、其將司馬懿よく防ぎしを以て、

鼎立の形勢

司馬懿の防戦

諸葛亮もまた其志を達せずして終れり。

水魚の交  
出師の表

諸葛亮字は孔明も、今の山東省の人なり。臥龍の名は、天下識者の間に高し。劉備は其草廬の中に三顧して之を臣とせり。君臣の情誼極めて密所謂水魚の交あり。劉備かつて孤之有孔明猶魚之有水也といへり。征魏の軍に臨みて上表したる前後二回の出師の表は、誠忠懇切の文にして之を讀んで泣かざる者は忠臣に非ずとの評あり。孔明は又兵法に長ず。忠武侯の諡あるは偶然にあらざるなり。其陣中に歿するや、魏の兵は退却の蜀軍を追撃したるに、蜀軍は少しもさはがず、將に之に向はんとす。魏兵は畏れて敢て迫らず。されば時の百姓は「死諸葛走生仲達」といふ諺を作れり。仲達とは魏の將司馬懿の字なり。

明治天皇御製 龍の臥す岡の白雪ふみわけて草の廬を訪ふ人や誰  
鷺も雪の古巢をいでめやも聲をさゝしる人のとはずば 加藤千浪

諸葛武侯

齋藤 拙堂

諸葛亦書生

兩篇文字壓西京百代長懸赫々明莫謂書生暗時務元來諸葛亦書生。  
兩篇の文字とは、即ち前後二回の出師の表の文にして、西京とは即ち西方



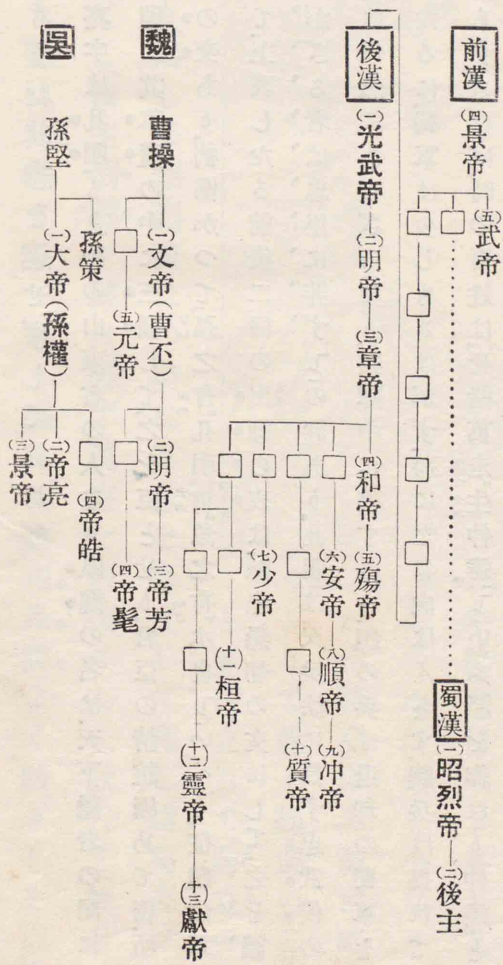
司馬氏の勢

西晋の武帝

の長安に都せし前漢なり。

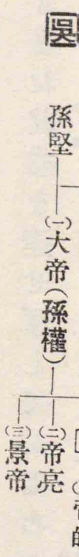
**晋の統一** 諸葛亮の死後、蜀の勢つひに振はず。魏の司馬氏は、司馬懿以來勢力漸く強く、其子司馬昭は蜀の疲弊に乗じて、之を滅し(九二)昭の子司馬炎に至り、終に魏の位を篡ひ、更に吳を併せて、天下を一統し(九四○應神天皇、御代西紀二八〇)洛陽に都す。之を西晋の武帝といふ。

後漢と三国の系圖



神武	同	同	同
[後]	二〇	三七〇	五三三
一〇	同	同	同
五三	殷の箕子古朝鮮の王となる	同	同
齊の桓公霸業全盛	周の東遷 <small>春秋時代始まる</small>	同	同
武帝古朝鮮を平ぐ	衛青・霍去病匈奴を撃破す	張騫西域より還る	同





上古史摘要年表

本系の左傍に括弧を附して、匈奴及び鮮卑と記せるは、匈奴は  
秦より後漢に亘り、鮮卑は後漢の末より西晋に亘りて、史上に  
あらはれたる事を示すものなり。

太古... 黄帝... 帝堯... 帝舜... 夏... 殷... 周... 秦... 前漢... 新... 後漢... 三國... 西晋

匈奴 鮮卑

年	皇紀	代	重要事蹟	年	皇紀	代	重要事蹟
同	三〇〇	前	黄帝君臨	同	同	同	項羽・劉邦鴻門の會
同	一六〇	前	帝堯即位	同	四五九	同	項羽自殺、漢の高祖の天下統一統
同	一六〇	前	帝舜即位	同	四六七	同	衛滿古朝鮮王となる
同	一五四	前	夏興る	同	四八二	同	漢文帝元年
同	一〇〇	前	夏亡び殷興る	同	四八一	同	漢武帝即位元年
同	一〇〇	前	殷亡び周興る	同	三三一	同	五經博士を置く
同	四六〇	前	殷の箕子古朝鮮の王となる	同	二二六	同	張騫西域より還る
神武	一一〇	後	齊の桓公覇業全盛	同	二二九	同	衛青・霍去病匈奴を撃破す
同	二五	後	晋の文公立つ	同	一〇八	同	武帝古朝鮮を平く
同	四八	後	楚の莊王立つ	同	九二	同	司馬遷の史記成る
同	九七	後	釋迦生まる	同	六〇	同	鄭吉西域都護の初任
同	一〇九	後	孔子生まる	同	三七	同	高句麗の建國
懿德	一七七	後	釋迦死す	同	六四	同	百濟の建國
同	一八三	後	孔子死す	同	六三	同	王莽の篡立
孝昭	一八八	後	越王勾踐吳を滅す	同	六五	同	後漢の光武帝即位元年
孝安	二九〇	後	孟子生まる	同	七〇	同	大月氏のカニシカ王即位
同	三〇〇	後	秦の孝公立ち商鞅を用ふ	同	七七	同	佛教始めて支那に傳來す



上古史摘要年表

(本系の左傍に括弧を附して、匈奴及び鮮卑と記せるは、匈奴は  
 秦より後漢に亘り、鮮卑は後漢の末より西晋に亘りて、史上に  
 あらはれたる事を示すものなり。)

太古…黄帝…帝堯—帝舜—夏—殷—周—秦—前漢—新—後漢—三國—西晋

匈奴 鮮卑

年	皇紀	代	重要事蹟	年	皇紀	代	重要事蹟
同	同	同	黄帝君臨	同	同	同	項羽・劉邦鴻門の會
同	前	前	帝堯即位	同	同	同	項羽自殺、漢の高祖の天下統一
同	前	前	帝舜即位	同	同	同	衛滿古朝鮮王となる
同	前	前	夏興る	同	同	同	漢文帝元年
同	前	前	夏亡び殷興る	同	同	同	漢武帝即位元年
同	前	前	殷亡び周興る	同	同	同	五經博士を置く
同	同	同	殷の箕子古朝鮮の王となる	同	同	同	張騫西域より還る
同	同	同	周の東遷 <small>春秋時代始まる</small>	同	同	同	衛青・霍去病匈奴を撃破す
同	同	同	齊の桓公覇業全盛	同	同	同	武帝古朝鮮を平く
同	同	同	晋の文公立つ	同	同	同	司馬遷の史記成る
同	同	同	楚の莊王立つ	同	同	同	鄭吉西域都護の初任
同	同	同	釋迦生まる	同	同	同	新羅の建國
同	同	同	孔子生まる	同	同	同	高句麗の建國
同	同	同	釋迦死す	同	同	同	百濟の建國
同	同	同	孔子死す	同	同	同	王莽の篡立
同	同	同	越王勾踐吳を滅す	同	同	同	後漢の光武帝即位元年
同	同	同	孟子生まる	同	同	同	大月氏のカニシカ王即位
同	同	同	秦の孝公立ち商鞅を用ふ	同	同	同	佛敎始めて支那に傳來す
同	同	同	蘇秦の合従策成る	同	同	同	班超西域都護となる
同	同	同	張儀の連衡策成る	同	同	同	後漢と羅馬との交通の始
同	同	同	阿育王摩揭陀王となる	同	同	同	此頃黨錮の禍あり
同	同	同	周亡ぶ	同	同	同	赤壁の戰
同	同	同	秦の天下統一	同	同	同	魏の曹丕篡立して後漢亡ぶ
同	同	同	秦の蒙恬匈奴を征す。長城増築起工	同	同	同	蜀漢の劉備帝を稱す
同	同	同	秦南越を取る	同	同	同	吳の孫權帝を稱す
同	同	同	秦の燒書	同	同	同	諸葛亮(孔明)死す
同	同	同	秦の坑儒	同	同	同	蜀漢亡ぶ
同	同	同	陳勝兵を起す	同	同	同	司馬炎篡立して魏亡ぶ
同	同	同	秦亡ぶ	同	同	同	西晋の武帝(司馬炎)の天下統一



1/6



第二編

中古史

(皇紀九百年頃に  
至る迄一千八百  
九百年四十四年  
間)

75  
43  
—  
26

75  
43  
—  
26



第二編

中古史

(皇紀九百年代より一千八百年代西紀一  
千二百年頃に至る迄大約九百四十年間)

第一章 胡族の侵入

東西同軌

上古の晩年に當り、東に後漢あり、西には羅馬ありて、  
世界東西の二大帝國たりしが、其末路はもとに分裂の非運に陥れ  
り。支那に於ては、晋はよく天下を統一せしも、畢竟一時の事に過ぎ  
ず。分裂の形勢は依然として存し、彼の西洋中古史の初には諸蠻族  
の移轉あり。我が東洋中古史の初にも胡族の侵入ありて、東西殆ん  
ど同様なり。

五胡十六國

晋の武帝は天下統一の後、魏の早亡に鑒み、子弟を  
封じて、帝室の藩屏となせしが、其子惠帝の愚なるに乗じ、諸王八人  
政權を争ひて、骨肉互に相害せり。然るに當時の士人は漢末名士の  
奇禍に懲り、所謂清談に耽り、名教を卑み、世務を輕んじて、眞に國事

天下分裂の形勢

八王の争

清談の流行

Handwritten red numbers: 75, 49, 26, 75, 49, 26.

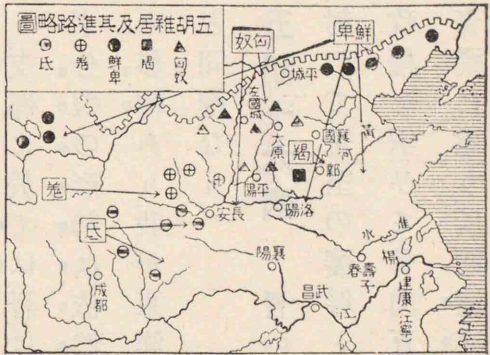


異人種の侵入

匈奴の再興

東晋の興起

五胡十六國



（吳の建業）に即き、僅に江南の地を保てり。之を東晋の元帝といふ。東晋の初、名臣王導等熱心に恢復を圖りしも、内亂等の爲に其志を果さず。支那の北部と西邊は、異人種の侵略益甚しく、晋の遷都の前後に侵入せし異人種は五種（匈奴、羯、鮮卑、氐、羌）にして、列國の興亡せしもの十六ありしを以て、五胡十六國と總稱す。

を憂ふる者少きが上に、晋初地方の武備を弛めしかば、晋の元氣漸く衰へ、漢魏以來支那内地に雜居せし異人種は、漸く其侵略を恣にす。中にも南匈奴は漢の世より支那に内附して、劉氏と稱せしが、晋の衰ふるや、其酋長劉淵まづ兵を起し、平陽（山西）に據りて、國を漢と號し、其子劉聰に至り、晋を攻めて之を滅せり。是に於てか、司馬懿の曾孫司馬睿は位に建康

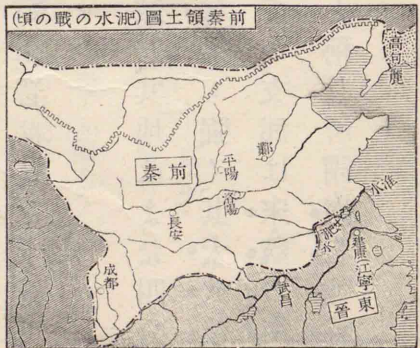
前秦の苻堅の大望

謝玄の奇勝

人和の有無

### 淝水の戰

晋の南遷より五十年許の後、苻堅は長安に都せる前秦（氐）に君たり。五胡中の雄傑にして、王猛を重用し、江北諸國を併せ、東夷・西域の諸國をも征服したれば、更に進んで江南の東晋を滅して、天下を一統せんと欲し、九十萬の大軍を擧げて、東晋に迫りしに、東晋の名相謝安の甥謝玄等は、之を淝水（安徽）に逆へ撃ちて、大に奇勝を得たり（一〇四三）。當時東晋の兵は少かりしも、上下一



謝安（晚笑堂畫傳）

致して、人和を得たるに反して、前秦の苻堅は自國內部の統一鞏固を圖らず、九十萬の大軍ありといへども、人和を缺きしが上に、徒に敵軍を輕んじ、意外の大敗を招きたり。謝安少時より重名ありしも、風流を事とし、四



謝安の雅量

十餘歳に至るまで、久しく仕官せざりしかば時の人は、安石不出、如蒼生何、といへり。安石は謝安の字なり。秦軍來侵して、上下恐怖するや、安は獨り日に客を會し、悠然として碁を圍み、以て人心を鎮靜せりといふ。あだ浪をうち返したる喜びの心はしばし碁にしづめけん。伊達宗熙

東晋の滅亡・後魏の勃興

かくて東晋は淝水の戦に勝ちしも、年來の衰弱は、遂に之を恢復し難く、且つ内亂相ついで起しりしが、劉裕は之を鎮定し、また外征の功ありしかば、遂に篡立して帝位に即き、又建康に都せり(一〇八〇西紀四二〇)。之を宋の武帝といふ。晋は凡そ十五帝、百五十六年にして亡ぶ。

次に江北に於ては、淝水の戦後、前秦は俄に衰滅し、其地はまた四分五裂せしが、今の山西地方に據れる後魏(鮮卑)の勢最も強く、其太武帝は、遂に江北諸國を一統せり(一〇九九西紀四三九)。是に於てか、支那は宋魏の南北二國に分れ、江南を南朝といひ、江北を北朝と稱し、所謂南北朝時代ここに起れり(允恭天皇御代)。

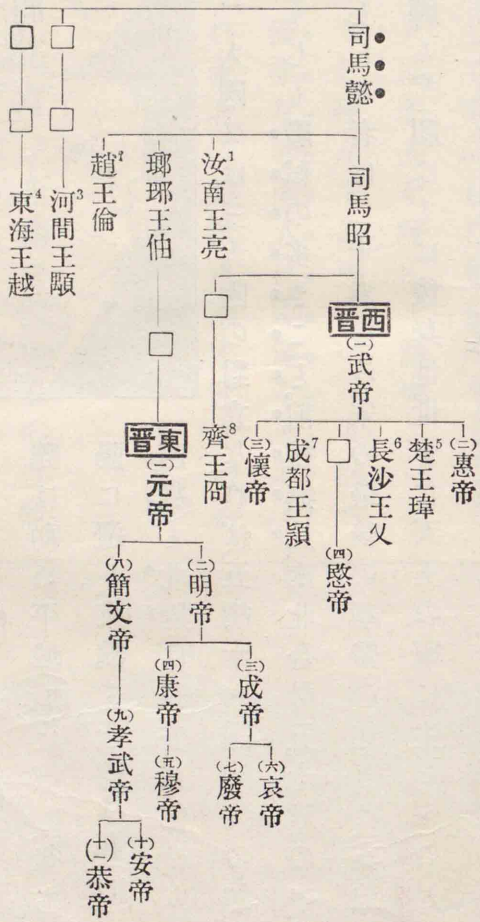
宋の武帝の篡立

後魏の太武帝の江北一統

南北對立

晋の系の圖

(所は8りよ1りな王八謂)



第二章 南北朝 隋の統一

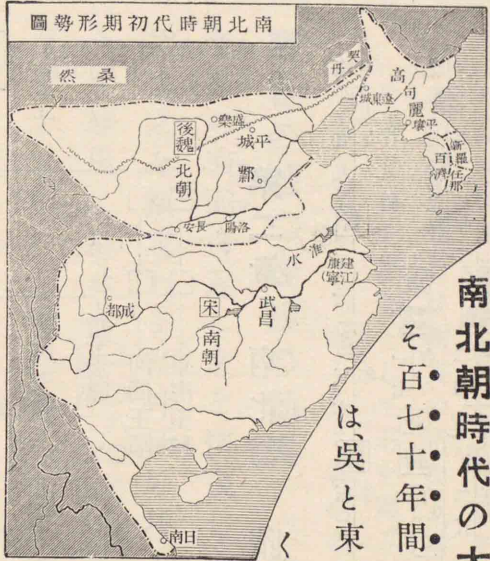




六朝

南北朝帝王の不幸

天子の歎息



### 南北朝時代の大勢

右の表の如く、南北朝は凡そ百七十年間(允恭天皇—崇峻天皇十四天皇御代間) 對立し、南朝の都

は、吳と東晋と同じく、すべて建康にあり。か

くて吳、東晋及び南朝の宋、齊、梁、陳を

總稱して六朝といふ。北朝の後

魏は初め平城(山西)に都し、後ち洛

陽に遷り、東魏と北齊は鄴(河南)に、

西魏と北周は長安に都せり。

南北朝は、二大國又は三大國の對立なれば、五胡十六國時代の如き紛亂なかりしも、廢弑の多きこと、前後無比。南北合計五十君の中、其位を全うしたる者は、二十君のみ。宋の最後の順帝の如きは、其迫られて位を禪るや、願はくは後身世世また天王の家を生るゝこと勿れと歎息せられたり。又多年戰亂の結果として、全國の戸口頗る減

南柔北剛  
北人の勝利

後魏の孝文帝の漢風模倣

國粹輕蔑の弊

少せり。而して南北互に相排斥すること甚しく、南人は北人を呼んで醜虜といひ、北人は南人を呼んで島夷といへり。然れども、大體優柔なる南人は、剛健なる北人に制せられ、南北の對抗は、漸く北人の勝利に歸し、北朝系統の隋は、終に天下を統一せり。

### 漢人の同化力

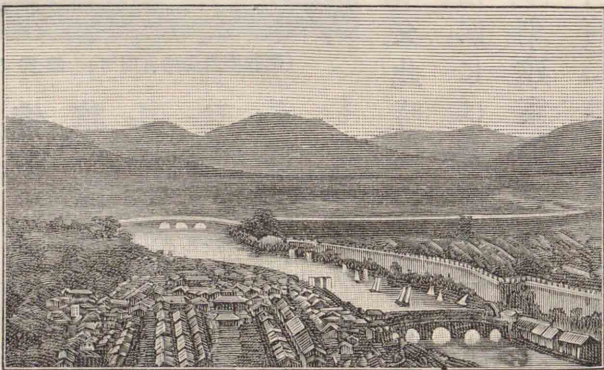
北朝諸國の風俗は概

して粗野剛健なりしが、後魏の孝文帝(太武帝の玄孫)は國風の粗野なるを厭ひ、洛陽に遷

都し、祖國の衣服言語を禁じ、風俗言語等皆漢人に模倣せしめられた

ば、國人頗る開化せり。されど剛健の元氣を失ひ、國勢漸く衰微せり。

是れより後も、異人種の支那に入りて國を建つる者、亦概ね支那の



(真寫の世近) 景 風 の 康 魏



27.6.13

梁の武帝

外僧三千人  
佛教の流行と諸  
藝術の進歩



(門龍南縣陽洛省南河) 像佛の代時魏後

文化を慕へり、亦以て漢人同化力の大きなを知るべし。

佛教の流行

佛  
教の流行は、晋及び南北朝時代に共通なる現象なり。梁の武帝(武烈繼體安閑宣化)(欽明五天皇御代)も篤く佛教を信じ、

自ら三寶奴と稱し、屢、身を佛寺に捨てたり。又此時代には、支那印度等の東西名僧の往來少からず。後魏の都洛陽には、僧侶の西域諸國より來るもの三千人の多きに及び、繪畫彫刻建築等の藝術も、佛教の流行に伴ひ、次第に進歩し、建康南朝の首府には、七百餘寺、洛陽に

朝鮮の佛教

法顯

達磨



(縣同大省四山、像佛代時の魏後)

は一千三百六十七寺ありしといふ。若し夫れ當時の佛教藝術の記念として名高きは、今の山西省大同及び河南省龍門の石佛なり。この流行の勢は獨り支那に止まらずして、尙、更に東に傳はれり。

當時朝鮮には、前漢の武帝より後、少許の變遷を経て高句麗百濟新羅の三國鼎立せしが、前秦(五胡十六國の一)の時、佛教始めて高句麗に入り(一〇三二仁徳天皇御代西紀三七二)、高句麗は之を新羅に傳へ、百濟は別に東晋より之を傳へたり。而して百濟が更に之を本邦に傳へたるは、實に梁の武帝の子の時代なり。

東晋の末、支那の僧法顯は、陸路を経て印度に往き、海路より支那に歸る。往復十二年、初め同行十餘人、歸るに及んで、法顯一人のみ、是を支那僧印度に入るの始とす。又彼の南天竺の達磨大師(Bodhidharma)が、海路支那に來りしは、梁の武帝



の時なり。

**隋の統一** 南北朝の末、北朝最後の北周の外戚にして好運なる楊堅は、丞相の職に在ること僅に九月、安坐して周室を篡ひ、帝位に長安に即きて(一)隋の文帝となり、ついで南朝の陳を滅して、南北を併せられたれば、西晋以後、天下分裂、三百年許にして、支那はまた統一せられたり(二)御代西紀五八九

隋の文帝の勤儉

文帝は性勤儉、多年の亂世に疲れたる國民を休養せしかば、即位の初、民戸僅に四百萬弱なりしが、其末年には八百萬を踰え、國力恢復し、漢族雄飛の曙光あらはれたり。

**煬帝の豪奢遠征及び外交** 然るに文帝の子煬帝は性豪奢を好み、宮苑を營み、運河を開き、又遠征を好み、東は今の臺灣を征し、南は今の佛領交趾、支那地方を平げ、西は



四方遠征

9. 7. 13

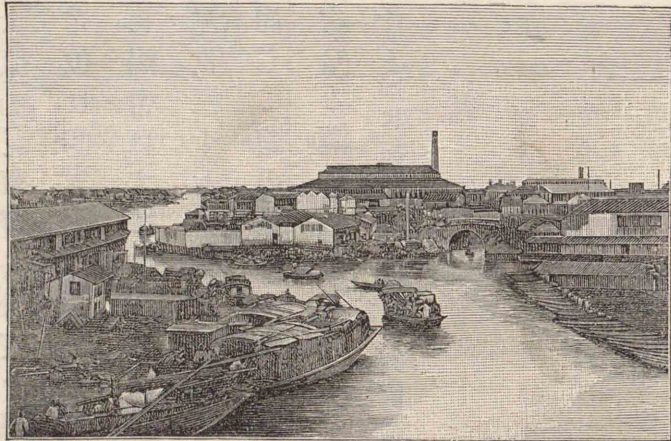
煬帝の失敗

今の青海地方を降し、西域諸國を招き、更に遠く西洋の東羅馬帝國と交通せんと欲するに至り、又突厥(トルコ族)を破りたり。かくて隋の國威一時四方に振ひしが、當時朝鮮三國の一たる高句麗を攻めて、再び失敗するに及び、騷亂忽ち發し、群雄四方に起れり。

煬天子いでます道の柳かけ

江都の春に千三百里 白岩艶子

運河は、其開通工事に服役したる隋の民を苦しめられたとも、支那の交通を助け、後世支那人は、其利益を破りたり、右の歌にいふ所の江都は即ち今の江蘇省江都縣にして、煬帝の好みて遊幸



(眞寫) 河運の方地州蘇省蘇江

運河の利益



秦・漢と隋・唐との比較

日・支國交の始

せし所なり。而して運河の堤には黄河より、淮水方面に至るまで、一千三百支那里の間、柳を種え、隋堤の柳と稱せられたり。

此時李淵は其次子李世民と共に兵を太原(山西)に擧げて長安を陥れ、一時恭帝を立て、やがて其禪を受けて帝位に即き(一二七八推古天皇、御代西紀六一八)また長安に都す。之を唐の高祖とす。時に煬帝はすでに南方に於て臣下に弑せられたり。かくて隋は僅に三世三十七年、盛時の短きこと、猶八百年前の秦の如くにして亡び、而して隋の次なる唐の隆盛にして、國運また長きことは、恰も秦の次なる漢に似たり。

推古天皇十五年煬帝即位の三年、小野妹子を隋に派遣す。是れ日支國交の始なり。

隋の系圖

(一)高祖文帝 — (二)煬帝 — (三)恭帝

第三章 唐の創業

第二期

李世民の力

英主と名臣

太宗貞觀の治

濟世安民の相

三鏡の教訓

**太宗の功業** 唐は國を保つこと、大約三百年(一二七八—一五六七)推古天皇—醍醐天皇御代(西紀六一八—九〇七)漢とともに支那人の建てたる世界的大帝國なり。而して唐の高祖建國の事業は、次子李世民の力によるもの大なりしかば、高祖は在位久しからずして、位を李世民に譲る。之を太宗とす。太宗は非常の英主にして、房玄齡、杜如晦、魏徵、李靖、李勣等の文武の名臣を用ひしかば、天下よく治まり、國威四方に輝けり。後世之を貞觀の治と稱す。貞觀は太宗の年號なり。

太宗は、其幼時、一書生之を見、**濟世安民**の人相ありといひしによりて、世民と名けしと云ふ。帝常に修身治國に注意し、曰く、**以銅爲鏡、可正衣冠、以古爲鏡、可見興替、以人爲鏡、**



(解像兼聖)ふ賜に子太を範帝宗太





房玄齡 (凌烟閣功臣圖)

可知得失。と。又曰く、土城竹馬は兒童の樂なり。珠玉絹帛は婦人の樂なり。有無を貿易するは商賈の樂なり。大官厚祿は士人の樂なり。戰ふて前敵なきは將軍の樂なり。四海安寧なるは帝王の樂なり。快樂の種類は一ならず。概して論ずれば、衰世の樂は飲宴歌舞に集中

太宗の樂しみ  
帝範

し、興國の樂は事業に集中す。太宗の樂は治國安民に存す。眞に帝王の模範とすべし。また帝は親ら帝範四卷を撰し、以て太子に賜へり。

武韋の禍

太宗の子高宗も

初めは名臣の輔佐によりて、よく父の業をつぎしが、常に病多



李勣 (凌烟閣功臣圖)

人見意なき  
明  
下  
論

則天武后



則天武后 (百美新詠)

然るに中宗も柔弱の君にして、皇后韋氏に弑せられしが、中宗の姪李隆基韋氏を誅して、父睿宗を立て、後自ら帝位に即く。中宗を即位せしめて、唐室を復興せり。唐初の武功 太宗及び高宗の時、外征の武功また甚だ多し。突厥は、阿爾泰山附近より起りて、南北朝の末より、漸く勢を増し、遂に今の内外蒙古、新疆、中央亞細亞等を併せしが、隋末唐初に至りて内亂あり、部族漸く衰へたるに乘じ、太宗及び高宗は伐ちて之を滅し、ま

玄宗の即位  
突厥の降服



西藏の來聘

支那の帝國主義

高句麗遠征の失敗

た西域諸國を征服せしかば、唐の領土は中亞地方までも延長せり。西藏は重疊せる山岳を以て、久しく支那と隔離せしが、太宗の時、始めて支那に降り、其南隣のネパール及び印度も、亦唐に來聘せり。かくて今の後、印度及び南洋諸島も、亦唐の威風を望みて來朝する者多し。蓋し支那の帝國主義は、遠く前漢の武帝を隔て、太宗によりて實行せられたる者といふべし。



大唐平百濟國碑塔 (真寫) (近附餘扶道南清忠鮮朝)

然れども太宗も高句麗の遠征には失敗せり。是より先き朝鮮の三國は互に相争ひしが、太宗の時に及び、高句麗は百濟と連合して新羅に當り、新羅は孤立し、保護を唐に乞ふ。太宗乃ち親征して遼東に

百濟と高句麗の滅亡

新羅の半島統一

新羅の太宗武烈王

漢族最盛と六都護府

赴き、白巖城(今の遼陽縣東北)を降せしも、安市城(今の蓋平縣東北)を圍み、功なくして軍を還せり。高宗の時、新羅又救を乞ひしを以て、唐は海軍を遣し、新羅と協力して、百濟を滅し(一三二三天智天皇即位前五年西紀六六三)、ついで、高句麗を併せたり(二二八)。而して新羅はよく唐に事へて國を保ち、且つ漸次高句麗、百濟の故地を占領して、殆んど半島を統一し、二百年許之を支配せり。

當時の新羅王武烈王は半島史上の一英主にして、其廟號は唐の英主と同じく、太宗と稱す。其即位前本邦にも來朝せり。其唐に至るや、唐の太宗も其威儀堂々たるを見て、厚く之を遇せしといふ。而して新羅の半島統一は、近世朝鮮の基礎を定めたるものとして注意すべし。

### 六都護府

かくて唐の國威は四方に輝き、其勢力の及ぶ所非常に廣く、東は朝鮮半島より、西は中亞地方に至り、南は南洋諸島より、北は外蒙古に達し、漢族の盛なる、此時を以て第一とす。唐はよりて六都護府を置きて之を統治せり。



- |                     |      |               |      |
|---------------------|------|---------------|------|
| 府名                  | 統治區域 | 府名            | 統治區域 |
| 一、安東都護府(遼東及び朝鮮)     |      | 二、安北都護府(外蒙古)  |      |
| 三、單于都護府(內蒙古)        |      | 四、北庭都護府(天山南路) |      |
| 五、安西都護府(天山南路及び中亞地方) |      | 六、安南都護府(南海諸國) |      |
- 右の中、安東都護府は、初め平壤にあり、後に遼東に徙れり。

### 第四章 玄宗 安史の亂

**開元の治** 玄宗は宮中の禍を定めて位に登り、大に政治に勉勵せしかば、天下泰平にして、文學藝術も亦發達せり。後世之を貞觀時代と並稱して、開元の治といふ。開元は玄宗の年號なり。玄宗は又意を邊境に用ひ、四邊の要地に十節度使を置き、兵馬の大權を委ねて、四方を守らしめたり。

**安史の亂** 玄宗在位四十三年、晩年漸く政に倦み、驕奢に流れ、楊

Handwritten notes in the top right corner of the page, including the characters '安史の亂' and other illegible scribbles.

開元の治

楊貴妃の寵愛

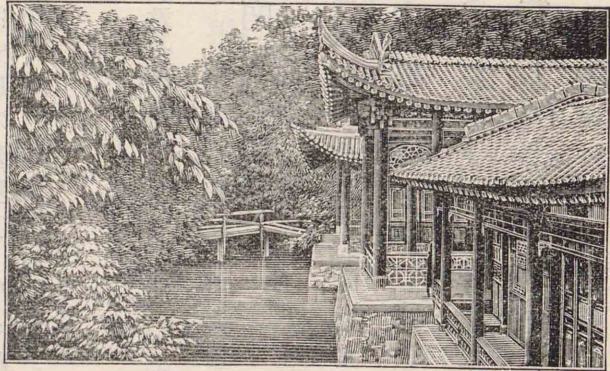
安祿山の叛旗

勤王の諸將

前後別人の如し

貴妃を寵して、國政を顧みず、東北方面の三節度使を兼ねたる安祿山之に乗じて叛旗を擧げ、直に洛陽を陥れ、長安に迫る。玄宗は蜀に出奔し、子肅宗位をつぎ、郭子儀、李光弼等の勤王の諸將善く戦ひ、且つ回紇(突厥の滅後、其漠北の故地)及び大食(アラビヤ)を占領せしトルコ種族)の援兵をかりて、賊軍を伐ち、子代宗の世に至り、賊の餘黨史朝義を滅して、前後九年の大亂を平定せり。之を始むる難きに非ずとは、開元時代の善政を評すべく、終りを善くするを難しとなすとは、天寶(玄宗の年號)時代の惡政を評すべく、前後の良否より見れば、同一人の玄宗にして殆んど別人の如し。

安祿山の叛せしは、我遣唐使吉備眞備の歸朝せし孝謙天皇天平勝寶六年



(眞寫) (南東縣潼陽道中關省四陝) 宮山驪の宴遊宗玄



二顔・張許の忠烈

壯烈なる要塞戰

の翌年にして當時我太宰府は此亂に因りて邊備を修めたり。此亂の初に於ける顔真卿・顏杲卿の忠節は二顔の忠と稱して名高く、又張巡・許遠も忠烈を以て名あり、其睢陽の籠城は、四萬の城兵、餘す所僅に病傷の四百人に至るも、終に叛く者なく、力盡きて皆死せり。實に支那の要塞戰中最も壯烈なるものなり。

顔真卿

人ありてふたゝび國をおこし、も思へば君が勳なりけり 渡 忠秋

### 第五章 唐代の文物・宗教 南海の貿易

文藝の美 五胡侵入以來、支那の社會は久しく分裂混亂して、文教發達の勢微々たりしが、隋より唐に至り、文藝燦然として興れり。之を譬ふれば、五胡以來隋に至る迄は、寒冬風雪の下、百草俱に萎み唐に至りて、始めて一陽來復し、春光方に麗はしくして、千紫萬紅の美を競へるが如し。

唐代文學の美

李白及び杜甫 諸藝術の發達

韓愈及び柳宗元 白氏文集の作者



(傳畫堂笑晚)(左)甫杜(右)白李

唐は實に歷代中文學隆盛の時にして、詩文の中、詩は特に發達せり。中にも玄宗の頃は、盛唐時代と稱せられ、李白と杜甫の二大詩人の出てたるを以て名あり。又此時代前後は、他の藝術も發達し、書には張旭あり、顔真卿あり、畫には李思訓あり、王維ありて、善く山水を畫き、吳道玄は佛畫に長ぜり。又玄宗の世には、雅俗の音樂共に流行し、中古時代の我國に傳來せる者また多し。なほ又玄宗より數十年を経て、韓愈と柳宗元の二大文章家あり。又白氏文集の作者たる白居易も其頃に出でたり。



13.9.110

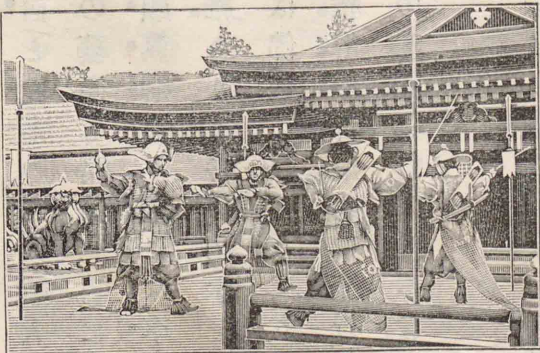
三省・六部

國破山河在。城春草木深。(杜甫)  
 國破れて山河あり。城春にして草青みたり。(芭蕉、奥の細道、平泉懷古の條)  
 人皆有一癖。我癖在章句。(白居易)  
 人ごとに一つの癖はあるものを我にはゆるせ敷島の道(慈鎮和尚)

制度の備 唐の制度は、大體その最盛時

たる太宗・高宗二代の世に成りし者なり。

〔官制〕中央政府は三省・六部よりなる。三省は  
 尚書中書門下なり。其中、尚書省の權力最も  
 重し。六部は此尚書省に屬し、政務を分擔す  
 る者にして、吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部な  
 り。地方制度は全國を十道に分ち道の下に  
 州あり、州の下に縣あり。州に刺史、縣に令を  
 置きて、民政を掌らしめ、各道に巡察使あり、州縣を監督す。(税法)唐



大平樂邦樂

道・州・縣

租・庸・調

六百三十四府

五刑

代歳入財源の大本は租・庸・調の三なり。租は田地に課するもの、庸は丁  
 男が毎歳二十日間公役に就く  
 こと、調は郷土の産物を上納す  
 ることなり。(兵制)全國に六百  
 三十四府を置き、各八百人乃至  
 千二百人の兵を備へ、地方を鎮  
 し、且つ番上して宮城護衛の務  
 にも服せり。(刑法)刑罰には、笞  
 杖・徒・流・死の五刑あり。皆金を納  
 めて罪を贖ふことを得れども、  
 君・父・國家に對する大惡(謀反不  
 孝の類)は之を贖ふことを許さず。又刑  
 の適用に當りても、主從尊卑屬親の別によりて輕重あり。老者(九十  
 以上)



萬歲樂(原圖六人上)邦樂(樂昌武)一(原圖四人下)邦樂(舞樂圖)一



13.9.19

唐の風俗

幼者(七歳以下)は、死罪を犯すも、其罪を論ぜざりき。  
 唐の制度は、支那後世の模範となりしのみならず、我國古代の制度も唐制に則る所多し。之と同じく唐代前後の風俗も亦大に我國に入れり。例へば、正月元旦の屠蘇酒の祝杯、三月三日の曲水流觴の遊、四月八日の灌佛の式、五月五日の菖蒲湯、七月七日の七夕祭、同十五日の中元孟蘭盆の供養、歳の終りの追儺の禳ひ等是なり。又種々の舞樂、唐と朝鮮より我國に傳はり、我國に於ては支那樂を左方とし、高麗樂を右方とせり。  
 祝ひてや御國の舞と定めけん高麗もろこしを右に左に 井上通泰



玄奘の天渡井天  
(宋代又は元の代原圖)

宗教の盛 唐の宗教も前代に比して特色あり。「佛教」佛教は南北朝流行の餘勢をうけ、唐に至りて更に盛にして、當時流行せ

八宗

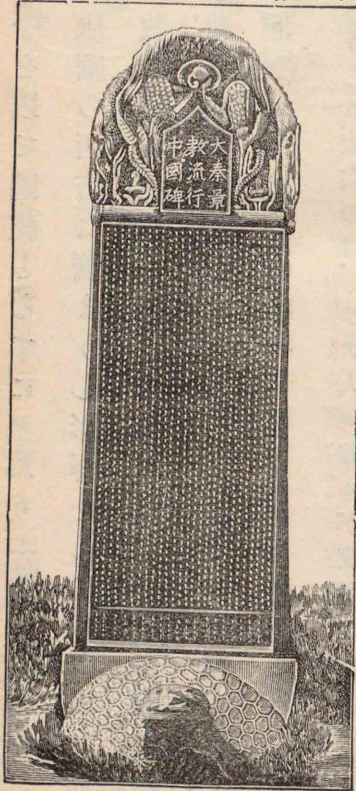
玄奘及び義淨の渡天

し佛教の分派には、三論ホツソクケ法相ソクケ華嚴オン律ジヤウ成實ジヤウ俱舍クセ天台テイ眞言シンゴンの八大宗派あり。是等の宗派は我奈良朝より平安朝にかけて、概ね我國にも傳はれり。

唐の太宗の時、玄奘は天山南路中亞を経て天竺に入り、往復十七年間に百三十餘國を遊歴し、經論六百五十餘部を得て還り、之を翻譯して、支那佛教史上に一新紀元をなせり。又高宗の時、義淨は海路より天竺に入り、往復廿四年を費し、經論四百餘部を齎せり。

〔道教〕 神仙の術

に老莊道家の説を附會せる道教も、亦唐に至りて頗る盛となれり。唐の皇室は之を



景教流行紀念碑  
(陝西長安縣)



唐室の正教

景教及び回教

阿羅本

大秦寺

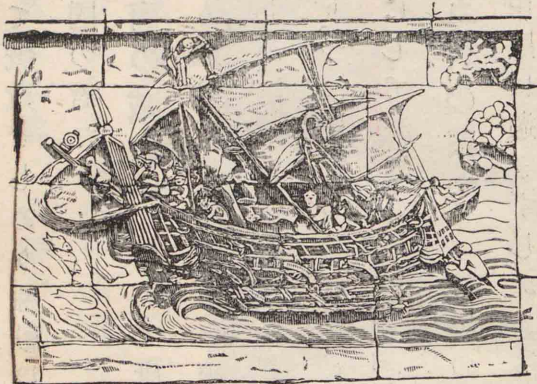
以て正教とし、老子を以て國祖となすに至れり。〔諸西教佛道二教の外、唐代には、其版圖の西方に擴まりし影響として、當時中亞地方に流行せし諸宗教は、漸次支那に傳はれり、中にも、景教及び回教最も注意すべし。景教は即ち基督教の一派たるネストル教にして、回教は即ち亞刺比亞のムハメドの唱へしイスラム教なり。

景教の支那に入りしは、太宗の時、シリア人阿羅本アロパンが支那に來り、太宗の尊信を受けたるに始まり、玄宗等も之を信仰せり。其寺を大秦寺といふ。前ページの圖は唐より八百餘年後に、長安即ち今の長安縣より發掘せし當時の景教流行の碑にして、近世西洋人の注意をひけり。又唐代建立の回教寺の廣東に存する者あり。

**日唐交通** 我日本は既に隋と修交せしが、唐に至り、其關係益密接し、我國よりは、屢遣唐使を派遣し、また僧侶學生の入唐せる者多し。弘法傳教の兩大師、吉備眞備、阿倍仲麿等は、其最も有名なる者なり。

遣唐使及び留學生

唐と阿刺比亞



中古時代南洋航海の船

**南海の貿易** 唐の對外事業の盛なりし事、上に述べしが如し。かくて對外通商も頗る發展し、特に其中世以後は、當時東西の二大帝國たる唐と阿刺比亞との間には、通商盛に行はれ、阿刺比亞人は、遙に支那南海の廣州廣東泉州福建に來航して貿易を營めり。

當時支那の輸入品の主なる者は、芳香藥品、象牙、犀角、玻璃、珠玉等にして、其輸出品には、絹帛、穀類、金屬陶器あり。當時廣州居留の外國商人は、十數萬人に及びしと

第六章 唐の衰亡 五代

安史亂後の唐朝 唐は高祖より玄宗に至る迄、既に百四十年許

September 18th 1924



外患内憂

天子の慨歎

を經過し、玄宗以後なほ百五十年許繼續せしが、安史亂後の國勢は、前の如く盛ならず、外國人も唐を侮りて入寇し、内には節度使の專横、宦官の横暴相つぎて起り、財政の難また之に加はれり。特に宦官の横暴については、時の天子中、**赧**獻受制強臣。今朕受制家奴。といひて慨歎せしあり。赧獻は即ち周の赧王と後漢の獻帝にして、俱に亡國の君たり。

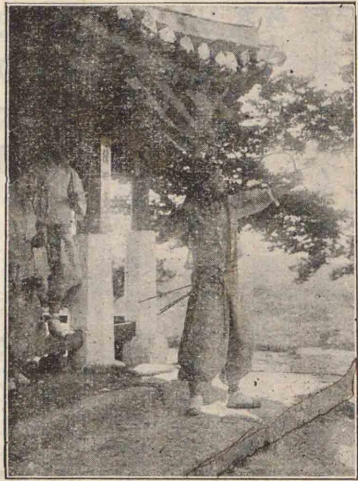
賊徒黃巢

朱全忠の篡立

**唐の滅亡** かくて唐末の天下漸く亂れて、賊徒四方に起る。中にも賊將**黃巢**は諸方を掠めて、遂に長安に入れり。この賊は一時平ぎしが、賊の降將**朱全忠**權略あり、悉く宦官を誅し、功を以て梁王となり、つひに唐の位を篡ふ。之を後梁の太祖とす。唐は廿世二百九十年にして滅ぶ。(一五六七醍醐天皇、御代西紀九〇七)

**五代の興亡** 後梁の太祖既に帝と稱せしも、其勢力の及ぶ所は中原に過ぎず。しかも後梁は、僅に二世にして亡び、其後後唐、後晉、後

五十年十三君



朝辭人射術

漢・後周の四代忽ち興り、忽ち亡び、共に天下を統一せず。唐の滅後約五十年間に五代の興亡、十三君の更迭あり。實に革命紛々、世道人心の亂れたる時代なり。而して五代の都は多く(汴・河・南)にあり。

**高麗の統一** 五代の頃、東方諸國も亦頗る多事なり。今まづ標題

の事をのべ、他の諸國の事は之を次章に譲らん。

新羅は曩に朝鮮半島を統一せしも、唐の末に至り、其政治亂れて、半島また分裂せしが、**王建**は遂に新羅を滅し、**松嶽**(京畿道開城)に都せり。之を高麗の太祖とし、其半島統一の年は五代の中頃なり。(一五九六朱雀天皇御代西紀六三)

唐の系圖

August 21st 1908  
王氏高麗朝

12/22/08





### 第七章 宋の統一 渤海・遼・金の興廢

國民の希望  
宋の太祖の政治

宋の太祖 唐末及び五代八十餘年の紛亂は、國民の既に厭ふ所早く英主の統一政治に歸せんことを望むは國民自然の情なり。かくて後周(五代の最後)の末に至り、諸將は節度使趙匡胤を以て有爲の君と爲し、之を推戴して汴(河南)に即位せしむ。之を宋の太祖とす(一六二〇村上)。太祖は深く武人の專横を憂ひ、宰相趙普と謀り、文官を任用し、文治

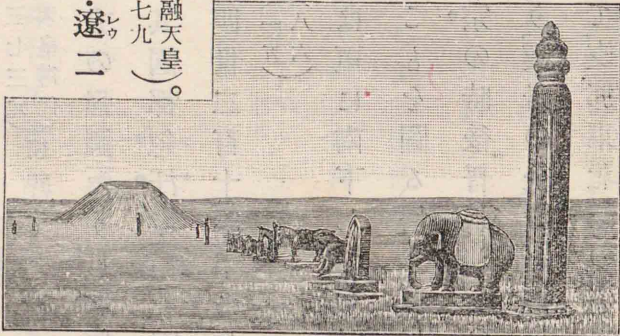
宋代武力の弱  
漢唐と宋以後

を以て民を撫育せり。是より國民休息することを得たれども、宋代武力の弱も亦ここに原因せり。支那は古來文武並重の方針を執り、漢唐國勢の強盛なりしも、此故によりしが、宋に至りて、武臣を忌み且つ輕んずる習をなし、其餘弊は後世にも及びたり。而して宋初なほ獨立の數小國ありしも、太祖及弟太宗は、次第に之を征服して、遂に天下を一統せり(一六三九圓融天皇御代西紀九七九)。時に宋の東北に建國せし遼の勢盛にして、宋遼二國將に相争はんとす。

契丹人の遼

契丹の太祖

遼と渤海 遼は即ち契丹人の國なり。契丹は南北朝の頃より、今の遼河の上流地方に居りし滿洲族にして、唐に歸服せしが、唐の末、其主耶律阿保機雄略あり、遂に皇帝と稱し(一七六一五)、臨潢(遼河上流)に都す。之

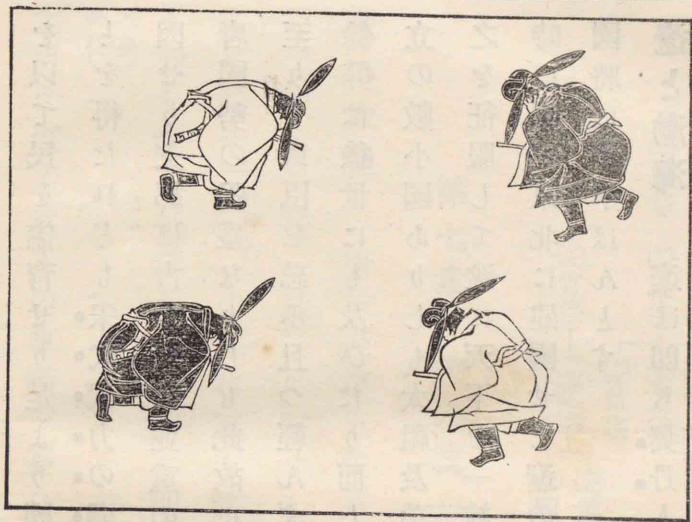


(真寫) (南西縣鞏道洛河省南河) 陵の祖太の宋



を契丹の太祖とす太祖は悉く今の蒙古の大部分を併せ更に東して渤海をうつ。

靺鞨族の渤海



新靺鞨族の風俗舞腰を履て舞ふは舞禮の體なり(邦樂舞圖說)

渤海も今の滿洲族たる靺鞨族が唐の中世(一三三三元)に建てし國にして一時東方の強國たりしが契丹の太祖は其國都忽汗城(吉林)を陥れ渤海は十四世二百十餘年にして滅びたり(一五八六)。かくて契丹は更に南下して支那に侵入せんことを圖る。恰もよし、太祖の子太宗の時後晋(五代の第三)は其建國に當り契丹の後援を要し、其報酬として支那東北部の十六

十六州の割與  
遼の國號

契丹の侵入

キタイ又はカタ  
イ

澶州の役  
宋の屈辱

August 9, 1124.

州を契丹に割與せり既にして太宗は國を遼と改め號し後晋の契丹に對して無禮なるを怒り大舉南征して後晋を滅し其國都汴に據りしも支那人の反抗に堪へずして忽ち北に還れり。

契丹の盛時には支那北部滿洲及び蒙古等を併合して其勢甚だ強く且つ後には其一族中央亞細亞に建國せしかば其名遠く西人に傳はり露西亞人及び中亞等の人は契丹の名を訛り北支那をさしてキタイ又はカタイと稱し其名今も猶西洋に存す次に渤海は我聖武天皇以後二百年許本邦と交通し屢貂皮虎皮熊皮及び人参等を貢獻せり。

宋遼の和戰と遼の全盛 さて宋の太祖の時には宋遼二國の

間平和なりしが宋の太宗は天下一統の勢に乗じて遼をうちしも志を得ず其子眞宗も遼の軍を澶州(直隸)に防ぎしも勝利の望なきを以て遂に歲幣として多額の銀絹を遼に與へて之と和せり(一六六四)時に遼は太祖の玄孫聖宗位に在り遼の全盛時代なり。



宋の外交軟

宋の仁宗 眞宗の子仁宗に至り、西藏族の趙元昊の建てし西夏も、屢々宋の西邊に侵入して、宋は又一外患を加へたり。遼は之に乗じて、又宋に迫りしかば、宋は歳幣を増額して、和約を繼續し、更に西夏にも歳賜を與へ、宋の臣下たる禮を執らしむることを約して、戰爭を避けたり。

かくて對外の勢は振はざりしも、仁宗は恭儉の君にして、人を愛し民を恤れみ、宋代第一の仁君として、漢の文帝と並べ稱せられ、また名臣大儒頗る多く、中にも范仲淹は宋朝の人物第一の名あり。

宋代第一の仁君

范仲淹の名言

先天下之憂而憂  
後天下之樂而樂

藤田東湖の范仲淹の名言

范仲淹(字は希文)曰く、士は當に天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂むべし。と、其天下の事に熱誠なる想ふべく、先憂後樂の語は實に名言と

神宗と王安石

新・舊兩黨の争

司馬溫公

謂ふべし、東湖の書は、先天下之憂而憂、後天下之樂而樂なり。たのしみは人に後れん心こそ世を照すべき鏡なりけれ。西三條季知

新法と舊法 仁宗より英宗を経て神宗に至るや、雄心氣慨あり多年不振の國勢を振ひ興さんと欲し、王安石を擧げて宰相とす。是に於て王安石は舊法を改めて、新法を發布し、富國強兵の策を建て、富國策としては、青苗均輸市易の諸法を、強兵策としては、保甲保馬の法を行へり。

然るに司馬光等の保守的政治家は之に反對し、保守改革其主義を異にせるを以て、ここに新法舊法兩黨の争をなせしこと三十餘年にして、其間國家の經綸を主眼とせる政論に加ふるに、個人的私怨の相互的報復を以てするに至れり。

司馬光は、即ち幼時より穎敏にして、嘗て水をいれたる甕を撃ち破りて、其中に陥りたる小兒を救ひ出せりと傳へらるる司馬溫公なり。其長ずるや



October 21st 1914



司馬光(晩笑堂畫像)

益賢明。其在官中は、遼人も西夏の人も之を畏敬し、  
司敢て侵入を恣にせざりしといふ。温公嘗て曰く、平  
生所爲、無不可對人言者。と、また或人温公に一言以  
て終身之を行ふべきものを問ひしに、温公は、其誠  
乎、といひ、其人重ねて其修養の法を問ひしに、自不  
妄語入、と答へたり。又曰く、徳勝才、謂之君子。才勝徳、  
謂之小人。と、君子小人の區別簡明といふべし。

石とりて碎さしかめの水よりや惠の波は世にあふれけん 高崎正風

徽宗の不徳

### 宋遼の衰運と金の勃興

神宗の後哲宗を経て徽宗に至り、多

天祚帝の暗弱

藝の君なるも、治國の徳に乏しくして、宋の國運漸く衰ふ。又遼に於  
ても全盛時代は既に過ぎ去りて、徽宗と同時代の暗弱なる天祚帝  
に至り、其國運の衰へたる時に當りて、金といふ強國、遼の北方にあ  
らはれたり。

女真人の金

金はもと女真(滿洲)と號し、黑龍江地方に居り、遼に屬せしが、阿骨打  
Dürchi(族)と號し、

遼の滅亡  
西遼の建國



徽宗帝筆繪(華國)

とを約し、金は東北より、宋は南より遼を攻めて、遂に之を滅せり(七  
八)遼は九世二百十年にして滅びたり。時に遼の王族耶律大石は、餘  
衆と共に中央亞細亞に走りて、西遼國を建てたり。

是役金軍は連勝し、宋は連敗せしを以て、金は殆んど遼の舊領全部  
を取り、宋は僅に今の北京附近の地を得たるのみ。而して、宋は遼よ

其長となるに及び、遼の  
衰へしに乘じ、其軍を破  
りて獨立し、都を會寧(吉  
林)に奠め、國を金と號す(七  
五)之を金の太祖とす。宋  
の徽宗は金の勃興を聞  
き、之と協力し、遼を挾撃  
して、其地を分割せんこ



狼と虎

宋の失策

宋の二帝執へらる

りも更に強大なる金と其境を接するに至りしは、之を譬ふれば、狼を拒ぎて、虎を引き入れたるが如し。失策といふべし。

宋の南渡

かくて金は宋の弱點を看破し、太祖の弟太宗は長驅南下して宋を攻む。徽宗急に位を子欽宗に譲り、之を防ぎしも、金は

遂に宋の都を陥れ、徽宗、欽宗並に后妃等を執へて北に還れり(一七七八)

崇徳天皇御代  
西紀一一二七

南宋

是に於てか欽宗の弟高宗位に即きしが、金の勢を避け、遂に江南に退却して、都を臨安(江浙)に還せり(一七九八)之を宋の南渡と稱し、高宗以後を南宋といふ。

宋金の和戦

南宋の初、岳飛、胡銓等軍人學者の主戦論者少からず。若し上下一致したらんには、恢復の業また難からざりしならん。元來高宗は性怯懦なるが上に、二帝及び生母章太后の擒となりて金に在るを以て、和議を希望せるにより、宰相秦檜は巧に和議を

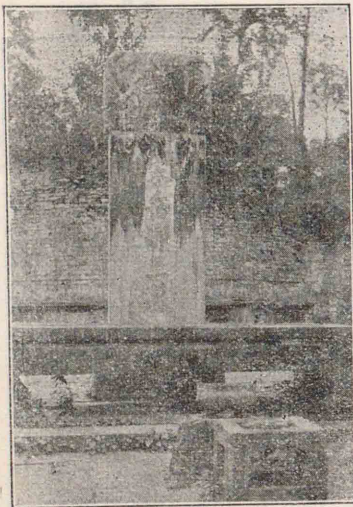
宋の屈辱

岳飛の忠勇



岳飛 (晚笑堂畫像)

平生盡忠報國の四大字を其背に入墨せり。或人嘗て「天下何時太平」と問ひしに、「文臣不愛錢、武臣不惜死、天下太平矣」と答へたり。岳飛又曰く、「運用之妙、存於一心」と。活用を貴ぶは、戦略のみにあらざるなり。



宋の岳鄂王(岳飛)の墓

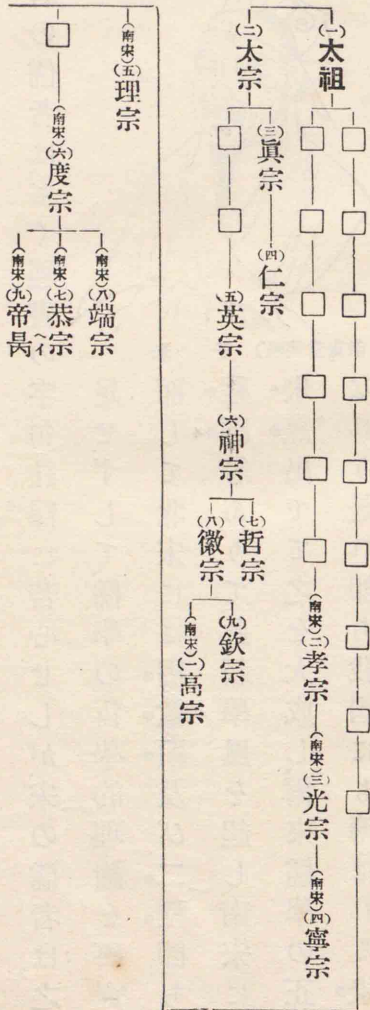
唱へ、遂に歳貢を納めて金と和し、且つ金の封冊を受けしのみならず、主戦論者たる岳飛を殺せり(一八〇一西紀一一四一)

支那人の兵力を以て蠻族と戦ひ、勝利の希望ありしは、蓋し岳飛を以て歴史上の最後とすべし。岳飛の忠勇は、金人も之を畏れて、撼山易、撼岳家軍難といひ、其死を聞くや、酒を酌みて相賀せり。



October 16th 1924

第八章 宋代の文物



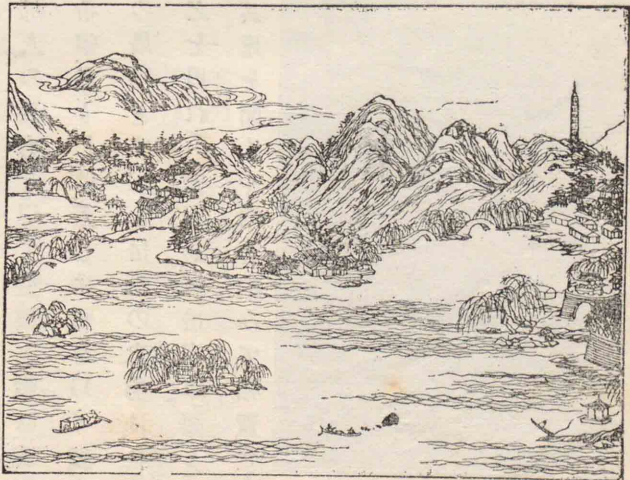
宋の系圖

金主亮は江南併呑の大志あり。畫工をして宋の都臨安及び附近の西湖吳山の景を寫さしめ自ら詩を題して「萬里車書盡混同。江南豈有別封疆。提兵百萬西湖上。立馬吳山第一峰。」といへり。美しき西湖の春の船のごと卓にならべしいろくの具 與謝野 寛

金の遷都

金・宋の衰弱と蒙古の勃興

君がせにしるしおきけん一言を誰も心にさざむべきかな 井上文雄  
 是後、金主亮は國都會寧の邊鄙なるを厭ひて、今の北京に遷都し、ついで大軍を以て宋を攻めしが、利あらず、且つ軍中に弑せられ、其從弟世宗位に即く賢明にして國人は小堯舜と稱す。時に南宋の孝宗位に在り、また賢明にして、宋・金の間事なきこと、三十餘年に及べり。然れども、兩國の元氣漸く衰へて、其餘命長からざる時に當りて、蒙古人新に北方に興り、遂に世界無比の大帝國を作り、東洋史上の一大變局をなすに至りしことは、之を次篇に説かん。



(誌地國清)湖西の近附安臨都宋



漢・唐の學風と宋の學風

儒學の新學風

宋代の特色は、武にあらざして、文にあり。特に其儒學の研究法を一新せしは、支那學術史に光彩を添ふる者なり。漢唐の儒者は、多く經書の字句註釋に苦心せしが、宋の儒者は之に滿



朱子 (晩笑堂畫像)

なり。朱子と同時に陸九淵(象山)あり。別に一家の説を立てたり。

朱子の宋學大成  
陸象山  
朱子の教訓

朱子即ち朱熹は、七十一を以て死す、四書の註釋其他の著述甚だ多し、少年易老學難成、一寸光陰不可輕、朱子偶成の詩の二句及び左記の如き、皆吾人の守るべき金言なり。  
勿謂今日不學、而有來日、勿謂今年不學、而有來年、日月逝矣、歲不我延、嗚呼

同 同

九七七 一〇七三

三七 東晉興る  
三三 淝水の戰

同 孝謙

同 一四五

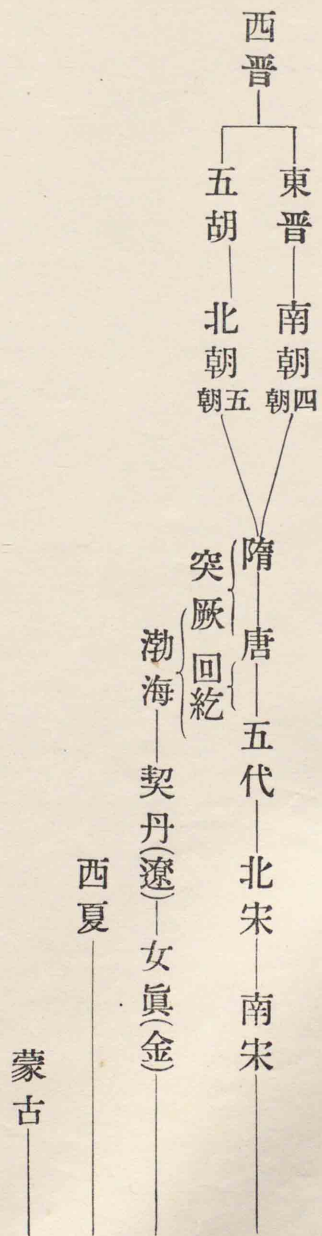
同 七五

渤海建國の始  
安祿山反す



### 中古史摘要年表

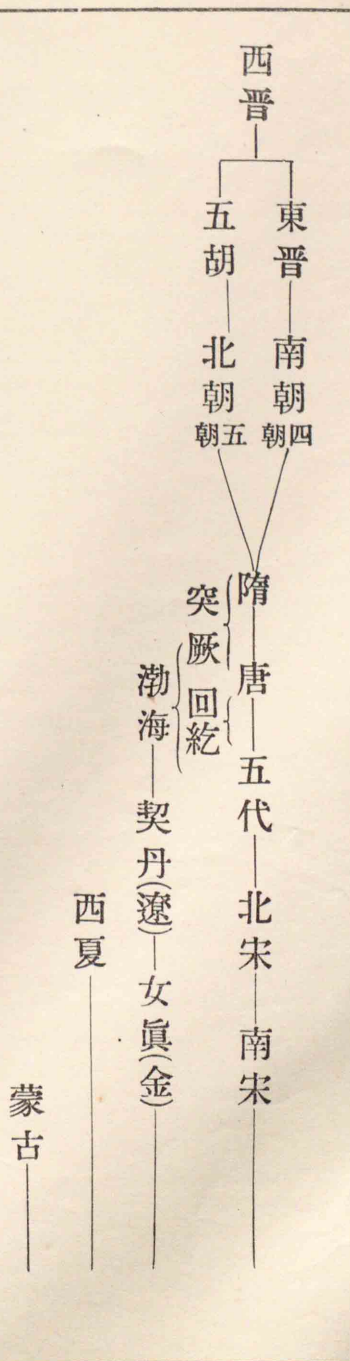
(本系の左傍に括弧を附して、突厥・回紇及び渤海と記せ  
るは、是等の諸種族の史上にあらはれし時代を示すも  
のなること上古史年表に記せしが如し。)



年	皇紀	代	重要事蹟	年	皇紀	代	重要事蹟
應神	九四五	六五	百濟漢學を我國に傳ふ	持統	一三五〇	六九〇	則天武后の篡立
同	九六四	三〇四	匈奴の劉淵漢王と稱す	文武	一三六五	七〇五	武氏の亂平ぐ
仁德	九七六	三六	西晋亡ぶ	元明	一三七三	七三	唐の玄宗開元元年
同	九七七	三七	東晋興る	同	同	同	渤海建國の始
同	一〇三三	三三	淝水の戰	孝謙	一四一五	七五五	安祿山反す
同	一〇四六	三六	後魏の太祖道武帝即位元年	淳仁	一四三三	七三	安史の亂平ぐ
允恭	一〇八〇	四〇	東晋亡び宋興る	仁明	一五〇五	八四五	唐の武宗諸外教を禁じ道教を崇ふ
同	一〇九九	四三	天下宋・魏の南北兩朝となる	宇多	一五五四	八九四	日本遣唐使の廢止
雄略	一一三二	四七	後魏の孝文帝即位元年	醍醐	一五七六	九〇七	後梁の朱全忠唐を篡ふ
仁賢	一一五三	四九	後魏の孝文帝洛陽に遷る	同	一五七六	九二六	契丹の太祖即位す
武烈	一二六三	五〇	梁の武帝即位元年	同	一五六六	九二六	契丹・渤海國を滅す
欽明	一二三三	五三	百濟佛教を我國に傳ふ	朱雀	一五九六	九三六	高麗の朝鮮半島統一
同	一三三三	五三	新羅・任那の日本府を陥る	同	一五九七	九三七	契丹國號を遼と改む



（るは、是等の諸種族の史にあらはれし時代を示す）のなること上古史年表に記せしが如し。



年	皇紀	代	重	要	事	蹟	年	皇紀	代	重	要	事	蹟
應神	九四五	六五	百濟漢學を我國に傳ふ	持統	一三五〇	六九〇	則天武后の篡立						
同	九六四	三〇四	匈奴の劉淵漢王と稱す	文武	一三六五	七〇五	武氏の亂平ぐ						
仁德	九七六	三六	西晋亡ぶ	元明	一三七三	七三	唐の玄宗開元元年						
同	九七七	三七	東晋興る	同	同	同	渤海建國の始						
同	一〇二三	三三	淝水の戰	孝謙	一四二五	七五	安祿山反す						
同	一〇四六	三六	後魏の太祖道武帝即位元年	淳仁	一四三三	七三	安史の亂平ぐ						
允恭	一〇八〇	四〇	東晋亡び宋興る	仁明	一五〇五	八四五	唐の武宗諸外教を禁じ道教を崇ふ						
同	一〇九九	四九	天下宋・魏の南北兩朝となる	宇多	一五五〇	八四	日本遣唐使の廢止						
雄略	一一三二	四二	後魏の孝文帝即位元年	醍醐	一五六七	九七	後梁の朱全忠唐を篡ふ						
仁賢	一一五三	四九	後魏の孝文帝洛陽に遷る	同	一五七六	九六	契丹の太祖即位す						
武烈	一二六三	五〇	梁の武帝即位元年	同	一五六六	九六	契丹・渤海國を滅す						
欽明	一二二二	五三	百濟佛教を我國に傳ふ	朱雀	一五九六	九六	高麗の朝鮮半島統一						
同	一二三二	五三	新羅・任那の日本府を陥る	同	一五九七	九七	契丹國號を遼と改む						
同	一二三二	五七	ムハマド阿刺比亞に生る	同	一六〇六	九六	遼の太宗後晋を滅す						
崇峻	一二四九	五九	隋の天下一統	村上	一六二〇	九六	宋の太祖即位元年						
推古	一二六五	六五	隋の煬帝即位元年	圓融	一六三九	九七	宋の太宗天下を一統す						
同	一二六七	六七	小野妹子隋に使す <small>日本支那交通の始</small>	一條	一六四四	九四	高麗遼に服し入貢せず						
同	一二七八	六八	隋亡び唐興る	同	一六四四	一〇四	宋・遼澶州の和議						
同	一二八七	六七	唐の太宗貞觀元年	後朱雀	一六九八	一〇八	西夏の建國						
舒明	一二八九	六九	唐の僧玄奘印度にゆく	同	一七〇四	一〇四	宋の仁宗西夏と和す						
同	一二九〇	六九	日本遣唐使の始	後三條	一七一九	一〇九	宋の王安石新法を行ふ						
同	同	同	唐の太宗東突厥を滅す	同	一七三二	一〇七	高麗また宋に入貢す						
同	一二九五	六五	景教唐に入る	鳥羽	一七五五	一〇五	金(女真)の太祖の元年						
同	一三〇一	六四	吐蕃唐に服す	崇德	一七五五	一〇五	金・宋連合して遼を滅す						
孝德	一三〇五	六四	唐の太宗高句麗を伐ち利あらず	同	一七六七	一〇七	北宋亡び南宋の高宗即位す						
齊明	一三二七	六五	唐の高宗西突厥を破る	同	一八〇一	一四一	宋・金の和						
天智	一三三三	六三	唐の高宗百濟を滅す	近衛	一八三三	一五三	金主亮今の北京に遷る						
同	一三三八	六六	唐の高宗高句麗を滅す	二條	一八三三	一六三	蒙古の鐵木真(成吉思汗)生る						
同	一三三一	六七	唐の僧義淨印度にゆく	土御門	一八六〇	二〇〇	宋の朱熹死す						



中華郵政特准掛號認爲新聞紙類 (第100號) 中華民國三十三年七月二十日



本報地址：重慶市中區... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

電話：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

發行所：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

印刷所：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

代售處：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

訂閱處：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

廣告部：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

編輯部：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

總編輯：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

社長：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

經理：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

副經理：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

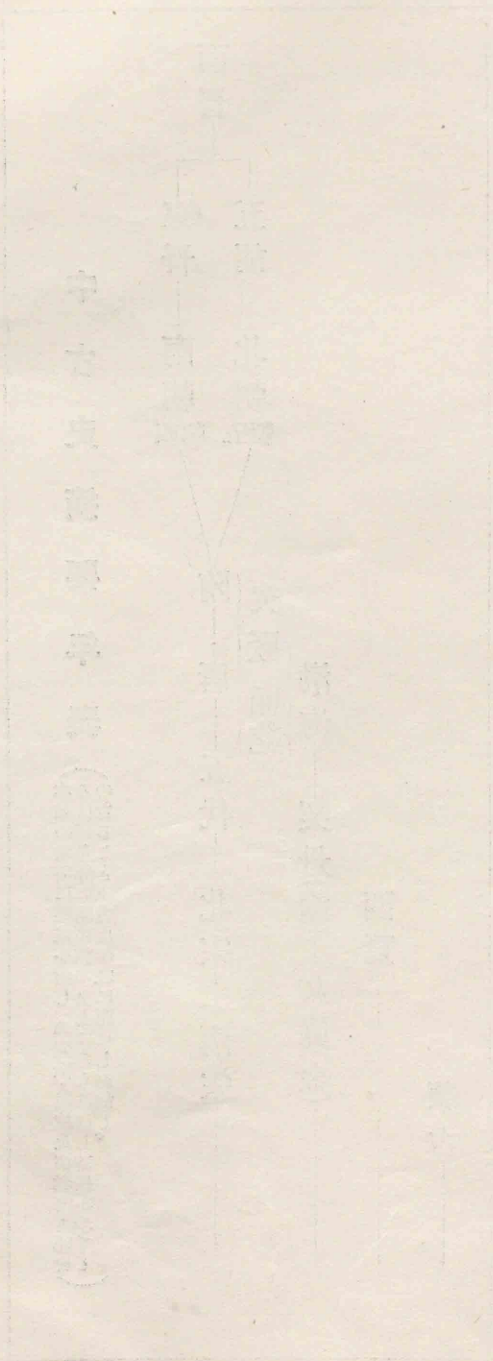
主任：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)

副主任：... (The rest of the text is extremely faint and illegible.)



老矣是推之意 (朱子勸學文)

轉念  
所學  
功  
行  
致  
用  
致  
效  
五  
年  
功





Handwritten notes in red ink on the right page, including the characters '禪宗' (Zen Buddhism) and other illegible characters.

古今圖書集成

宋代文章の特長

唐宋の八大家

資治通鑑

美術奨励

禪宗の流行

文藝

老矣是誰之愆アヤトチツ (朱子勸學文) 朱熹曰陽氣發處金石亦透精神一到何事不成 (朱子格言)

唐に美觀を極めたる文章も、唐末五代の亂に衰へしが、宋に至りて再興し、特に議論文の妙は、唐の人にも優るの趣あり。前の唐と、この宋の二代の八大家の文章を編輯したるものを唐宋八大家文讀本といひ、徳川氏以來、漢文教科書として、弘く我國にも行はれたり。而して八大家の中、唐人は二人(韓愈と柳宗元)にして、宋人は六人(歐陽洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石)なり。次に宋代の修史も頗る發達し、中にも司馬光の資治通鑑は最も著はる。

宋の畫も亦發達し、徽宗は特に美術の發達を奨励せり。

佛教 宋代尤も盛に行はれたる佛教は、禪宗にして、また我國に傳はり、我僧榮西、道元の入宋及び宋の僧道隆の歸化等ありて、禪宗は鎌倉時代以後盛に流行せり。



第三篇 近古史 (皇紀一千八百六十年頃より二千三百年頃西紀)

第一章 蒙古の勃興

蒙古の過去と其名稱は世界的なり

成吉思汗即位 今や蒙古人の大部分は支那に屬し、其一部分は露西亞に屬し、政治上固より大なる勢力なけれども、其過去を顧みれば、大に人意を強うする者あり。六七百年前、古今無比の大帝國を建て、其名世界に鳴り渡り、蒙古の名は、遂に所謂黃人種の總稱となるに至れり。

英雄鐵木眞

成吉思汗の尊號

蒙古部は、もと外蒙古の黑龍江の上流、オノン・ケルレン兩河の地方に遊牧し、遼と金に屬せしが、宋末に至り鐵木眞なる者あり。幼にして孤となり、逆境の間に成長して英雄となり、遂に蒙古部の長となり、ナイマン等の諸部を併せて、略内外蒙古の地を占領し、つひに諸酋長をオノン河上に會して、大汗(大皇帝)の位に即き、成吉思汗(強盛なる大皇帝)と

いふ尊號を受く (一八六六源實朝の時西紀一二〇六)。

蒙古人は當時開化柔弱の弊を受けずして、粗剛の蠻風を保存し、騎馬射術に長じ、軍紀特に嚴なるを以て、其戰鬥力最も強きが上に、蒙古勃興の際は、



成吉思汗

金人も漸く弱く、其他の支那塞外の諸民族にも強者なかりしを以て、大に好機を得たり。成吉思汗より十餘世の祖にアラン媛あり、五子を生じ、五子の父既に死し、而して五子互に不和の事あり、其母一日五子を列べ、一條の矢を與へて之を折らしむ。皆容易に之を折れり。又五條の矢を一束して折らしめしに、皆折ること能はず。母は因りて不和孤立の害と、共同一致の利を教へたりといふ。

束矢の教諭



西夏の降服  
金人の屈服

成吉思汗遠征

かくて劉邦と項羽との兩雄を合せて一としたるが如き成吉思汗は先づ南下して西夏を降し、尋いで金を攻めしに、金人之を防ぐこと能はずして、和を請ひ、黄河以北の地を失へり。時に蒙古の西方、天山北路及び中亞地方には遼の王族耶律大石の建てし西遼、並にホラズムといふトルコ族の國あり。而して成吉思汗の征服せしナイマン部の餘衆は西に走りて西遼を奪ひ、其勢に乗じて蒙古に復讐せんとせしかば、成吉思汗は金の征伐を止め、鋒を轉じて西方遠征を企て、先づ其將を遣してナイマンの餘衆を征服せしむ。

中亞の二大國

四子の從軍

是に於て蒙古の領土は中亞のホラズムと其境を直接せり。既にして蒙古の隊商ホラズムに入りて殺されしかば、成吉思汗は自ら其四子チヌーチ・チヤガタイ・オゴタイ・ツルイと共にホラズムに侵入して忽ち之を征服し、敗走せるホラズム王を追撃せる一隊は、更に進み

て、阿羅思(今の露西)を侵略せしが、印度方面に進入せる成吉思汗本軍の東歸と共に、亦軍を收めて東に歸れり。

西征七年

西夏の滅亡

西征七年にして凱旋せし成吉思汗は、又西夏を攻めて之を滅し、更に金を攻めんとせしが、六盤山(甘肅)南の軍中に病歿せり(八七八七西紀)。之を蒙古の太祖といふ。

太祖の遠逝

太祖用兵神の如く、その一生征服の地は、内外蒙古、天山、山、北路及び中西亞細亞等に亘り、滅國四十、その雄圖は古來稀なり。そ



蒙露兩族カールカ河邊の戰



太祖の人物

クリルタイ

喀喇和林の奠都

金の滅亡

高麗の降服

歐洲諸國を蹂躪す

の訓言も亦少なからず。例へば、「一言而見爲善、必行其言。見爲不善、則不必行其言」といひ、「臨民之道如乳牛、臨敵之道如鷲鳥」といふの類なり。

### 太宗南征

蒙古の俗、大汗の推戴及び和戦の大事はクリルタイ(王族功臣)の議決を要す。太祖の死後第三子オゴタイは衆議によりて大汗の位に即く。之を太宗とす。太宗は都を喀喇和林(外蒙古オル)に奠め、また父の志を繼ぎ、建國以來百廿年の金を攻めて之を滅し、更に從來宋遼金の三大國に對して、巧に其國運を維持せし高麗を威壓して、之を降したり。

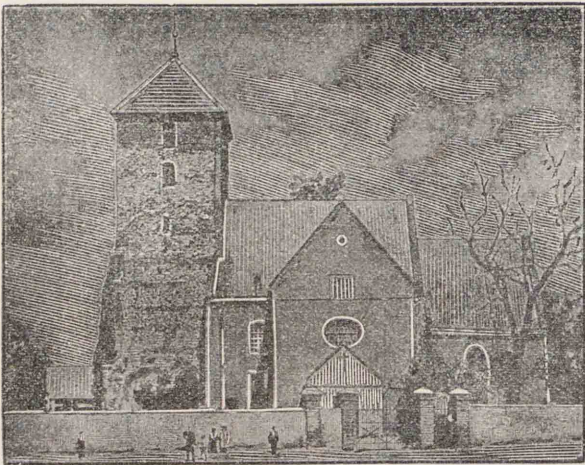
### 拔都西征

かくて東方稍無事なるを以て、太宗は又父の志をうけて、西方遠征の役を起し、拔都(太宗の兄)を元帥とし、グユク(太宗の子)、ング(太宗の弟)及び老將スブダイ等を副として、歐洲に侵入せしむ。蒙古軍は先づ阿羅思を蹂躪し、遂に中部歐洲に迫り、一隊は匈牙利に進み、一隊は波蘭を攻め、シレジアに入りて、波蘭及び獨逸の諸王

ヴールスタットの役

蒙古宗室の不和

忽必烈の南征



シレジア公ヘンリー二世戦死の跡の教會堂(獨逸ヴールスタット)

侯騎士等の聯合軍をヴールスタットの野に破り(一九〇一北條泰時)、大に全歐洲を震ひ驚かせしが、太宗の訃音に接して、急に東に歸れり(一九〇二)。

### 蒙古宗室の不和

太宗の後、其子定宗(クユ)立ちしが、在位三年にして死するや、クリルタイ會議は、太宗の孫を立てずして、マングを推して大汗となせり。之を憲宗といふ。是より後太宗の子孫は、不平を抱き、後年蒙古大帝國分裂の一遠因をなせり。

### 憲宗時代の征伐

憲宗はまた征伐を企て、弟忽必烈をして雲南の方面を征せしめ、自ら將として、金の滅後蒙古と其境を直接する

November 7th 1924.



旭烈兀の西征

に至りし宋をうちしが、軍中に死せり。而してまた憲宗の弟フラーグは、波斯・小亞細亞の回教諸國を遠征し、將に埃及エジプトに入らんとせしが、兄の死を聞きて軍を旋せり。

### 第二章 元の世祖 宋の滅亡

世祖の統一 忽必烈兄につぎて大汗となる(一九二〇北條時宗の時西紀一二六〇)。之

を世祖とす。世祖は都を今の北京に遷し、之を大都と名け、國號を立てて元と稱す。時に南宋は前篇の末に記せし孝宗の後國勢つひに振はず。世祖は父祖の遺志を繼ぎ、大舉南征す。宋の文天祥等勤王の師を起せしも、衰弱の宋は連勝の元に敵すること能はずして皆敗れ、國都臨安終に陥りし後は、南海に漂泊し、崖山(廣東)に戦ふに及んで、宋の君臣皆海に没し、宋は十八世三百廿年にして滅び(一九三九北條時宗の時西紀七九)。世祖は全く支那を統一せり。

大都燕京  
國節新定

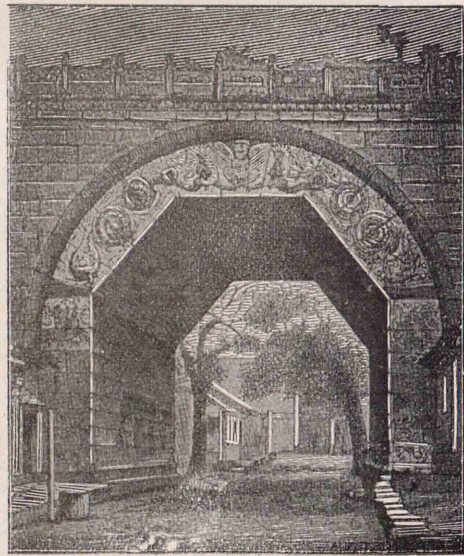
宋の滅亡



祖世の元(一)



祥天文の宋(三)  
(像畫堂笑晚)



關庸居(二)



字二孝忠の意筆祥天文(四)



- (一)元の世祖が度量廣大、人を知り善く任じ、祖父成吉思汗以來の遺業を大成して、大帝國を建てし事の、大要は載せて本文にあり。よりて今茲に贅言せず。而して世祖の服裝の支那的なるは、祖父成吉思汗の服裝(九十三頁)の蒙古風なるに對して、注意すべきものなり。
- (二)居庸關は、北京の北約十七里の昌平縣の西四里許にあり。京張鐵道の南口停車場より二里許なり。此關門は元の世祖の創築に、かから、關の長さ二十二尺、高さ四間、廣さ四間、佛像を彫刻し、且つ漢字、蒙古字、梵字、西藏字、西夏字、ホルイク字(西藏字の一種)の六種の文字を以て、喇嘛教頌讚の文を刻す。印度、西藏、支那及び蒙古の藝術趣味を混和加味し、建築の宏壯雄大なる、彫刻の精巧活躍せるは、當時の元氣充實せる時代精神を發揮せるものなり。
- (三)は文天祥の像(四)圖に示す所の忠孝の二字は、唐崎常陸介が文天祥の筆意を模せしものにして、廣島縣賀茂郡竹原町磯宮八幡社内の千引巖に刻する者にして、忠孝碑として名高し。常陸介は竹原の人、世々磯宮八幡社の祠官たり。忠孝節義の念に厚し。高山彦九郎正之と親交あり。正之筑後久留米に自殺するに及んで、常陸介其墓下に至り、亦自殺す。明治三十一年正四位を贈らる。

文天祥の忠義



藤田歌氣の書後二句

風簷書を開いて讀めば古道顔色を照す。

らるること二年。其節操益々堅く、終に從容死に就けり。其獄中の作なる、正氣歌は最も有名にして、我藤田東湖及び吉田松陰も亦之に和して、各正氣歌を作れり。正氣とは即ち權勢威武に屈せずして、我守るべき所を守るものなり。

身はかくてひとやのうちに朽ちぬとも心ばかりはいかでけがさん

佐々木弘綱

高麗は既に蒙古に降りしも、心服せざりしが、世祖の時には、全く元に臣服せり。其外今の後、印度諸國も、世祖の遠征軍に降服せしかば、

高麗の臣服  
後印度及び南洋  
諸國の降服



東征の失敗  
元と高麗



南洋征伐の蒙古古戦艦

瓜哇蘇木都刺等の南洋諸國も亦皆元  
Java Sumatra  
に來貢せり。斯の如く世祖の外征は常  
に功ありしも、唯我國に對せる入寇(我國)  
史上の文永(弘安の元寇)は非常の大失敗に終れり。

元寇弘安の役當時の高麗王は、其二十五  
世忠烈王なり。是まで高麗も遼金二國に  
對しては、朝貢の禮をとるに過ぎざりし  
が、此時に至りて高麗の内外の政治、共に  
元の干涉を受け、殆んど元の一諸侯の如  
く高麗の世子は元の都に質子となり、且  
つ元の皇女を娶るを常とし、又一時蒙古  
風の衣服及び辮髮半島に行はれたり。

最大帝國

かくて元は太祖より其  
孫世祖に至るまで、七十年許にして、亞細亞の大部分と歐洲東部と

November 13th 1911

四大汗國

元の皇帝としての世祖

漢人の文化

を征服して、世界空前の最大帝國を作るに至れり。但し此内には諸國征服に大功ありし蒙古諸王の自治的私領の大なる者四あり。

(國名)

(始祖)

(領地)

(首府)

一、察合臺汗國

察合臺

中央亞細亞及び天山北路地方

アルマリク

天山北路

二、窩闊臺汗國

窩闊臺

西部蒙古アルタイ山脈一帶地方

エミル

外蒙古

三、欽察汗國

拔都

西亞及東歐の一部

サライ

露西亞東南部

四、伊兒汗國

旭烈兀

西亞の大部分

マラグア

波斯の西北部

元の皇帝たる世祖は、支那本部蒙古遼東高麗及び其他の東洋諸國を直轄または制御し、且つ名義上、右の四汗國をも統治せり。而して世祖は此大帝國を治むるが爲に、漢人の學者を任用して諸制度を定め、又曆法及び道路を改善し、且つ運河を修めて、大都と南支那との交通を便にせり。

今や支那に君臨せる主權者は漢人に非ずして、文化は則ち大體漢



人に従ふ。故に漢人主權の宋朝は亡びしも、漢人の文化は亡びざる者といふべし。

### 第三章 東西の交通 マルコ・ポーロ

東西通商の繁昌

#### 東西の交通

元の領地は亞歐の兩大陸に跨りしより、東・西の交通大に開けたり。特に南支那の泉州(福建)は、

一時繁昌の港となり、外國商人の來住者頗る多く、上海(江蘇)も亦當時の貿易港たり

き。

且つ世祖は勿論、他の蒙古の諸王も、國の内、外、人種の異同を問はず、廣く人材を求

めしかば、波斯、阿剌比亞、小亞細亞、及び伊、太、利等の遠國人も、亦元朝に來り仕へたり。中にも、伊、太、利人マルコ・ポーロ最も有名なり。また



廣く人材を求む

マルコ・ポーロ

Marco Polo

蒙古人の大國建設、及び東西交通の勃興は、西洋の地理學の發達と見識の進歩を助けて、世界文化の發展に資する所ありたり。

マルコ・ポーロの家はもと伊、太、利Italy ヴェニス港の商人なり。マルコ・ポーロは十七歳の時、父と共に故郷を出て、元に滞在すること十七年、頗る世祖の信任を得たり。彼は其東洋見聞録を公にせしが、西洋諸國殆んど之を翻譯せざる國なく、我國も近時之を翻刻せり。我國は同書により、ジバングJapan (日本國)の名を以て、始めて歐洲に紹介せられたり。

#### 耶蘇教の傳來

宋以來、歐洲の耶蘇教徒は回教徒に對する十字軍に従事せしが、遠く蒙古と同盟して、近く回教徒を攻撃せんと企て、又東洋に耶蘇教を布教せんと欲せしかば、定宗、憲宗の頃より、羅馬法王、佛蘭西王等の使者、及び宣教師の東に來る者少からず。耶蘇教は再び支那に行はれたり。

### 第四章 元の衰亡 諸汗國の盛衰 帖木兒

蒙古時代の耶蘇教

ジバング(日本國)始めて西洋に紹介せらる



元朝衰微の源因

元朝の衰微

元朝は世祖に至りて隆盛を極め、其後漸く分裂衰



(代現) 僧 喇 喇

喇教を尊信し、遂に僧侶專横の弊を生じ、且つ佛事供養の費多かり

微の傾向あり。其源因の主なる者は、  
〔一〕元の版圖廣きに過ぎて、各方面  
特別の文化を存し、統一の實なき事。  
〔二〕元の相續法は、必ずしも父子の  
世襲を認めず、クリルタイ大會の決  
議によりて定まるを以て、帝位相續  
の際は常に多少の争を生じ、權臣の  
專横之に伴ひ、或は内亂を起すに至  
りし事。〔三〕多年戰役の結果として、  
財政困難となりし事。〔四〕世祖以來、  
西藏より傳來の佛教の一派なる喇

不平の漢人  
朱元璋の優勢  
元・明の革命

し事なり。

元の滅亡

かくて元朝漸く衰へたる時、洪水飢饉地震等の天災

地變相ついで起りしかば、さなきだに北方異人種の抑壓に不平な

る南方の漢人諸方に蜂起せり。中にも江淮(揚子江と淮水)地方に起りし朱

元璋の勢最も強く、まづ南方を平定し、帝位に金陵(古の建康今の南京)に即く。之

を明の太祖(洪武帝)といふ。而して明軍北征して、元の大都に迫るや、元

の順帝は大都を棄てて、蒙古に奔り、其子孫は韃靼の可汗と號せり。

かくて元は世祖の國號制定以來十世九十八年にして滅ぶ(一二八〇足利義滿)

西紀一  
三六八

明の太祖洪武帝洪武は太祖の年號なり、明代より天子一代一年號の制な  
り、従つて年號を以て帝王を呼ぶの風起れり。は少時父母及び兄を失ひ、孤  
立依る所なく、佛寺に入り僧となり、乞食までしたることあり。嘗て漢の高  
祖が微賤より起りて天下を一統せる偉業を聞きて、大に感奮し、亂世の風  
雲に乗じ、つひに大業を成し、其一代を總覽すれば、一人にして賢君英雄窮

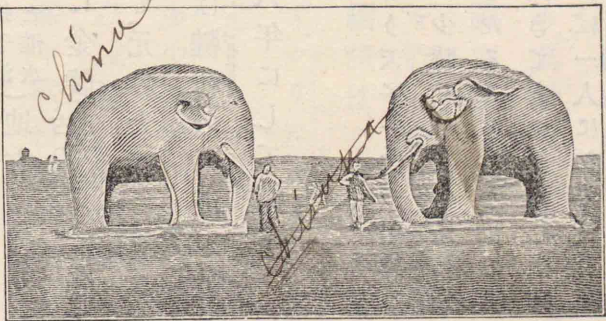


窩濶臺汗國の滅亡

西方三汗國の衰頹

民の諸性行を兼ねたり。  
諸汗國の盛衰 蒙古の四大汗國中、太宗の後たる窩濶臺汗國の諸王は、常に不平を抱き、世祖に至り、太宗の孫ハイヅ遂に叛旗を擧げ、其亂四十年に亘りしも、亂の平定と共に、同汗國は滅亡し、其地は察合臺汗國に併せられたり。

而して察合臺伊兒欽察の三汗國も各一時の盛を致せしことありしが、蒙古の諸王は、概ね戰爭に長じて、治國の能に乏しく、且つ其相續法の不完全なるが爲に、王位繼承の際、常に紛紜を起せしが故に、元朝が東方に衰亡せる間に、西方の三汗國も亦漸く衰微分裂して、互に相攻め争ひたり。



(真寫) 京南ち即縣寧江道陵金省蘇江) 象石の前陵孝祖太の明 定利田前 人石馬石るて立に生芝の陵孝を年百幾と然默

帖木兒の世界一統の覇氣

### 帳木兒の雄圖

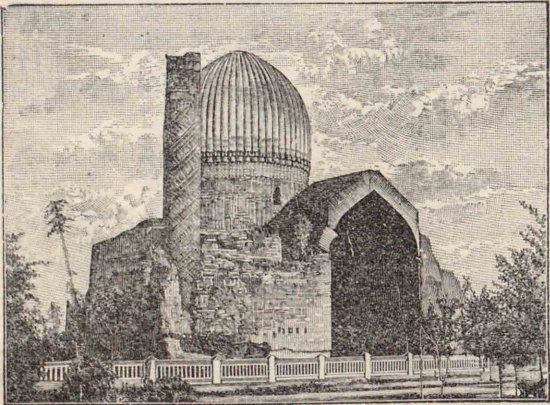
石(中亞サマルカンドの南)



帖木兒統一し、元朝滅亡の翌年、都を撒馬兒罕(Samarkand)に奠め、

遂に伊兒汗國を併せ、欽察汗國を降し、ついで印度に入り、更に小亞細亞に進み、土耳其帝バチャシドを破りて之を擒にせり。かくて中・南・西・亞の大部分を平定し、埃

時に蒙古の疎族に帖木兒といふ者あり、もと碣石(中亞サマルカンドの南)より起り、察合臺汗國に屬し、世界一統の覇氣あり。當時諸汗國中尤も慄悍なる察合臺汗國人を率ゐて、まづ同汗國の分裂を



(ドンカルマサ) 廟の兒木帖



第二の蒙古帝國

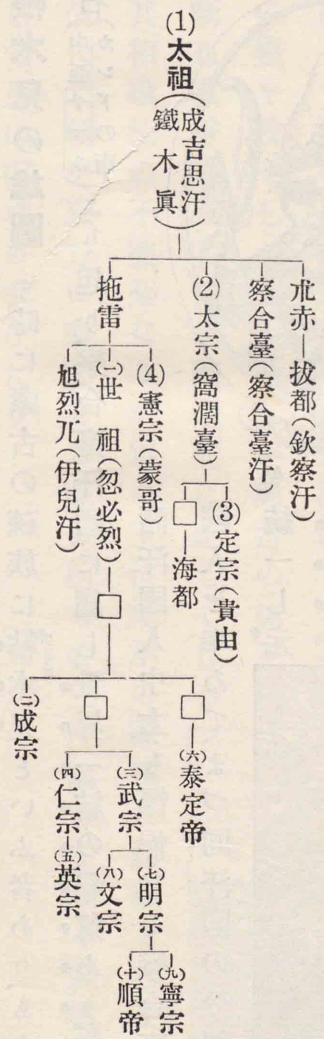
帖木兒の大言

及をさへ入貢せしめられたれば、第二の成吉思汗ここにあらはれ、第二の蒙古大帝國また起りたり(足利義持の頃)。

帖木兒常に「天に二日なく、地に二王なし。世界大なりと雖も、我大望に比するに足らず」といひ、其意志極めて強固なり。用兵の初め足を傷けて跛となり、チムール・レンク(チムール跛者)の號を得たるが、西人は之を訛りて「タメルラン」と稱す。

蒙古(元)の系圖

(西洋數字は元といふ國號制定前、日本數字は國號制定後の世數)



第五章 明の統一

太祖の政治

明の太祖は、即位の後、元の餘衆を擊破し、國內の群雄を征服せし後は、意を内治に注ぎ、且つ力めて、漢人的文物を復興し、法律を修正せり。かくて太祖は武を以て亂を定め、文を以て太平を致し、漢人はまた喜びて漢人の天子を戴けり。太祖はまた諸王族を要地に封じて、帝室の藩屏とせしは可なるも、死後の事を過慮して、多く功臣を誅戮せしは失策なり。

成祖永樂帝

太祖死し、その孫惠帝即位せしが、叔父諸王の強大を恐れ、之を抑壓せしかば、霸氣ある燕王朱棣(太祖四子)は、遂に兵を燕京(今の北京)に擧げ、君側の奸臣を除くを名として、金陵を攻めしに、之に敵する勇將なく、且つ金陵の宦官燕王に内通せしかば、惠帝遂に出奔し、燕王代りて天子となる(二〇六二)。之を成祖(永樂帝)とす。

漢人の天下

叔姪の争



方孝孺の義烈

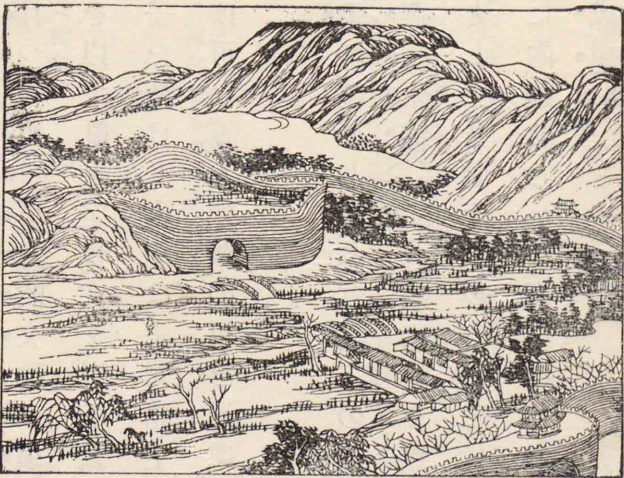
此事變に當り、方孝孺は節を守りて難に殉ぜり。方孝孺はもと惠帝の侍講にして、若し方氏を殺さば、天下讀書種子絶矣、と稱せられたる學者なり。成祖は即位の詔を草せしめんとしたれども、方孝孺は成祖の不義を攻めて之に應ぜず。成祖の之を強ふるや、燕賊篡立の四字を大書し、終に磔刑に處せらる。

北京に遷都す

永樂帝はやがて燕京を以て北京とし、後之に遷り、舊都金陵を南京とす。

永樂帝の外征

帝の時、内治頗る擧がり、外征の功亦少からず。北は長城を修築し、漠北に親征して、蒙古の餘衆を鎮壓し、南は安南地方を伐ちて、一時之を征服せり。また成祖は惠帝の或は海外に出奔せしやを疑ひ、宦官鄭和に命じ



(誌地國清) 址故の宮明の陵金

鄭和の海外經略

明初の盛事

て、海外を探らしめたり。鄭和は前後七回遠洋諸國に使用して、明の恩威を示せしかば、南洋及び印度洋方面の三十餘國、明に來貢し、明人は國家の盛事として誇りたり。次にまた成祖の時、彼の中亞の帖木兒大王は、明を滅して世界一統の大望を遂げんと欲し、東征の軍を起せしが、中途に病死し、(二〇)成祖と帖木兒との東西兩雄の衝突を見ずして終

東西兩雄の衝突を見ず

明初の盛事



(近附縣平昌北京省謙直) 陵の祖成の明

れり。宣徳の治 成祖の後、仁宗を経て、宣宗(宣徳帝)に至り、立國の基礎既に固く、賢相多くして、國內善く治まり、明の盛時



美麗なる陶器

と稱す。また此頃より、明は支那の工業中美麗なる陶器の製造を以て有名なり。

**日明交通** 元寇弘安の役

後、日本と支那との間には、僧徒商人等の私に通ずるのみ。公然國際の交通稀なりしが、

永樂錢輸入



我足利義滿は屢、明と交通貿易し、明の永樂錢を輸入して、流通を助けたり。其後足利時代の本邦と明とは、其交通頗る繁く、明よりは藥種、顔料、錦繡諸織物を輸入せり。

雪舟と絶海

而して當時明にゆきたる本邦人中最も有名なるは、雪舟及び絶海なり。



支那の陶器

November 29th 1924.

宦官專横の由來

瓦刺の侵入

英宗の大敗

韃靼の入寇

所謂倭寇

### 第六章 明の衰運 滿洲の勃興

**北人侵入**

初め明の太祖は前代の弊に鑒みて、宦官の政事に與るを禁ぜしが、成祖の即位せし時、宦官の内通せしを徳として、其禁を解きしかば、宦官漸く政に參與し、其弊は宣宗の次なる英宗の世に至りて漸く甚し。かくて其政治の亂れたるに乗じて、Lake Baikalバイカル湖

西の瓦刺部ウエーラといふ蒙古の屬部南下して、明に侵入し、英宗之を親征し、反つて生擒の辱を受け、和議によりて放還せられたり。其後も蒙古の餘衆たる韃靼の入寇また止まず。明はたゞ其防禦に苦むのみ。

**南倭の患**

明の北邊の患かくの如きが上に、其東南海邊も亦不穩なり。我吉野の朝廷の頃より、我邊民の朝鮮及び支那の沿海を侵掠する者あり。彼國の人は之を倭寇と稱す。永樂帝の時、我足利義滿と修交し、倭寇の勢一時稍減ぜしが、足利氏の衰ふるに及びて、また



倭寇と臺灣

北虜・南倭

日本刀の銳利

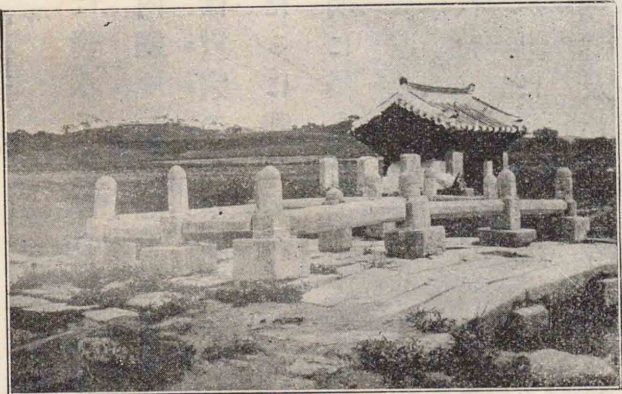
八幡船

盛となり、明の奸民も之に加はりて、侵掠を事とせり。其後明の世宗(足利義晴、義輝、義隆)の世(輝義、榮時代)に至り、略之を平定したるも、其殘黨は猶臺灣によりて其近海に出沒せり。

明人は倭寇を畏れ、北方の蒙古と並稱して、北虜・南倭といひ、特に日本刀の銳利を嘆美、恐怖して、倭人揮刀如神、人望之輒懼而走といへり。當時我國の海寇船は八幡大菩薩の旗を立てたれば、八幡船ともいへり。

鄭夢周

朝鮮の興起 高麗は久しく元に臣服せしが、元末明初に至り、内には姦臣の憂あり、外には倭寇の患ありて、其國勢漸く衰ふ。時に李成桂は倭寇をうちて功あり、漸く人望を收め、高麗王朝晩年の忠臣たる鄭夢周等の反對ありし



(眞寫) 橋竹善の城開鮮朝

高麗の滅亡

にもかかはらず、遂に自立して王位に即き(二〇五二、足利滿義の時、西紀一三九二)、高麗は四百五十六年にして滅びたり。

鄭夢周は我國に使し、倭寇をやめんことを請ひしことあり。九州探題今川貞世之を厚遇す。夢周の九州に在るや、詩を求むるもの少からず。後ち夢周は李成桂の黨與の爲に殺されて國難に殉せり。九州の人傳聞して、之を悼惜せり。今高麗の舊都たる朝鮮開城の城外に善竹橋あり、鄭夢周殉難の處として名あり。

李王家の祖先

かくて李成桂は今の京城に都し、明の冊封を受けて其東藩となる。之を朝鮮の太祖とす。今の李王家の祖先なり。

萬曆朝鮮の役

北虜・南倭の患僅にやみて、明の邊境稍ししばらく無事の姿なりしが、神宗(萬曆帝)の世に至り、俄に東方の大事變起れり。是れ即ち我豊臣秀吉の朝鮮の役なり。是時、明の神宗は藩國の救援と、自衛との爲に、朝鮮に出兵せしが、大軍を動かし、巨額の兵糧其他の軍需品を費し、而してつひに大敗せしを以て、國力大に疲弊せり。

國力疲弊

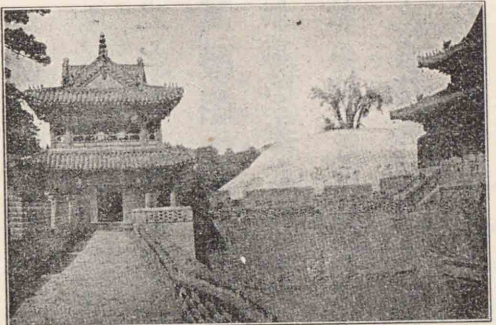


November 28th 1924

滿洲と明  
蒙古と南宋

愛親覺羅氏

後金  
清朝の太祖



(天奉ち即縣陽省天奉)陵の祖大の清

滿洲の勃興 この時に當りて、やがて明朝を覆すべき強敵滿洲人は、明の東北に勃興せり。其狀恰も中古史の末、南宋の衰弱せる時に當りて、蒙古が其北方に勃興せしが如し。

蒙古人が金を滅してより後、滿洲族の勢振はざりしが、明の萬曆時代に至り、一酋長あり愛親覺羅氏にして、名を努爾哈赤といふ。Aisin-Gioro Nurhachu 兵を今の奉天の東方にある興京地方に起し、次第に滿洲族を統一し、遂に國號を建てて後金と稱し、帝位に即けり。(二二七六徳川秀忠) 之 太祖はついで明と朝鮮との聯合軍を破り、愈勢を得て、今の奉天を取り、遷りて之に都せり。是より太祖及び子太宗は、益遼東及び蒙古

November 28th 1924

國號の改定

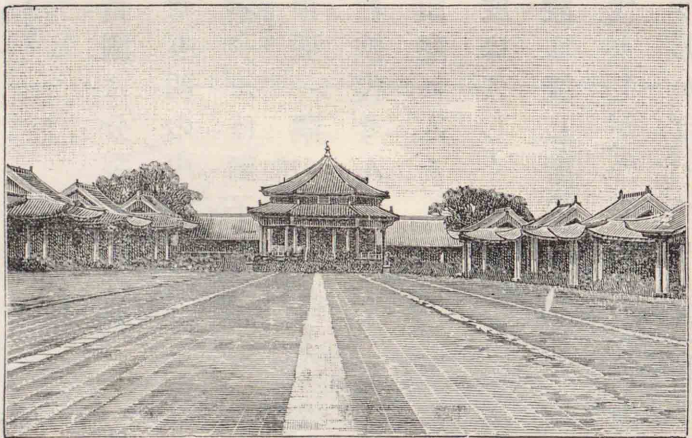
清と朝鮮

事大主義

朝鮮人と明清二朝

地方を征服し、太宗の時には、國號を改めて清と稱せり。(二二九六徳川家光) 時代西紀一六三六 時に朝鮮は猶明に通ぜしかば、清の太宗は之を征して、全く屈服せしめたり。(二二二九七)

此時朝鮮城下の盟をなしてより以來、清朝に對して「事大」と稱し、毎年清朝に入貢し、京城の郭外には迎恩門、慕華館を建て、清の使者來れば、遠く之を鴨綠江邊に迎へ、使者入京の時には、朝鮮王之を迎恩門に迎へ、慕華館に休憩せしめ、而して後京城に入らしむるを常とせり。然れども、朝鮮人は久しく明朝に好意を存して、清朝に悦服せざりき。



(建創の宗太清)殿政大の天奉



### 第七章 莫臥兒帝國 葡萄牙人の來航

#### 通商及宣教

#### バベル王

帖木兒大王の死後、其大帝國は分裂して、帖木兒の遺業衰へたり。明の中世に至り大王五世の孫バベルは獅子王の如き勇氣を以て、中亞一隅のフルガナより起り、祖業を恢復せんとして成らず。轉じて北印度に入る。



像の王ルマバ

時に印度は久しく回教徒及び蒙古人等の外人の侵入あり。加之、印度の佛教は既に唐の中世より衰へて、婆羅門教の一變體たる溫都教之に代りしが、外來の回教徒との軋轢常に絶えず。其國勢衰へたる時なりしかば、バベルは容易に印

印度の衰弱

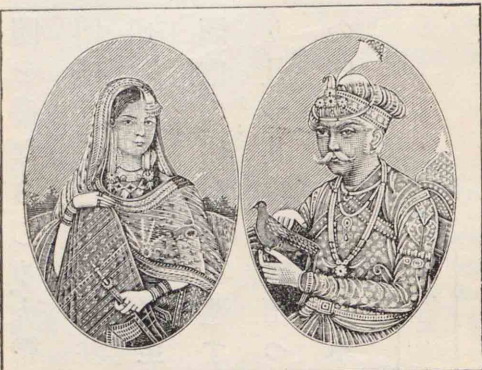
第三の蒙古帝國

アクバル

度の北部を定め、デリーに都して、第三の蒙古帝國と稱すべき莫臥兒(蒙古の訛り)帝國を興すことを得たり(一八六足利義晴時代、西紀一五二六)時に帖木兒大王の死後、一百二十一年なり。

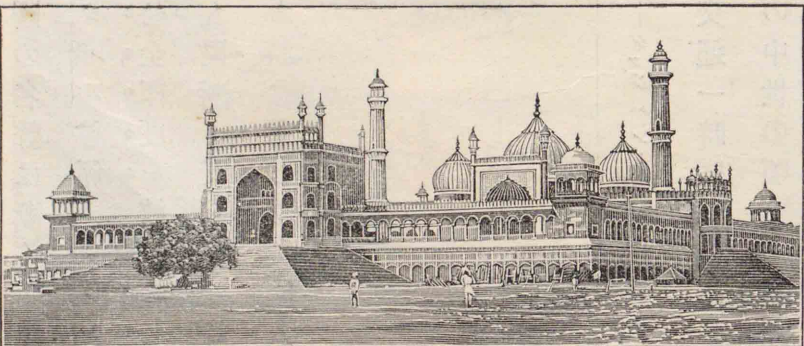
#### 莫臥兒帝國

バベルの孫アクバルは祖父の長所を傳へ、意志堅固にして、王者の徳に富み、また雄略あり。在位五十年、中東兩印度及びアフガニスタンを統一して、益々莫臥兒帝國



后皇び及帝大ルバクア

父の長所を傳へ、意志堅固にして、王者の徳に富み、また雄略あり。在位五十年、中東兩印度及びアフガニスタンを統一して、益々莫臥兒帝國



寺大教回のりデ



I wish you a happy new year.

~~November~~  
December 4<sup>th</sup> 1911

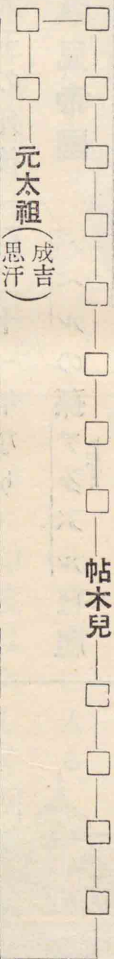
アウラングゼブ

草臥兒帝國の衰微

歐洲の新機運

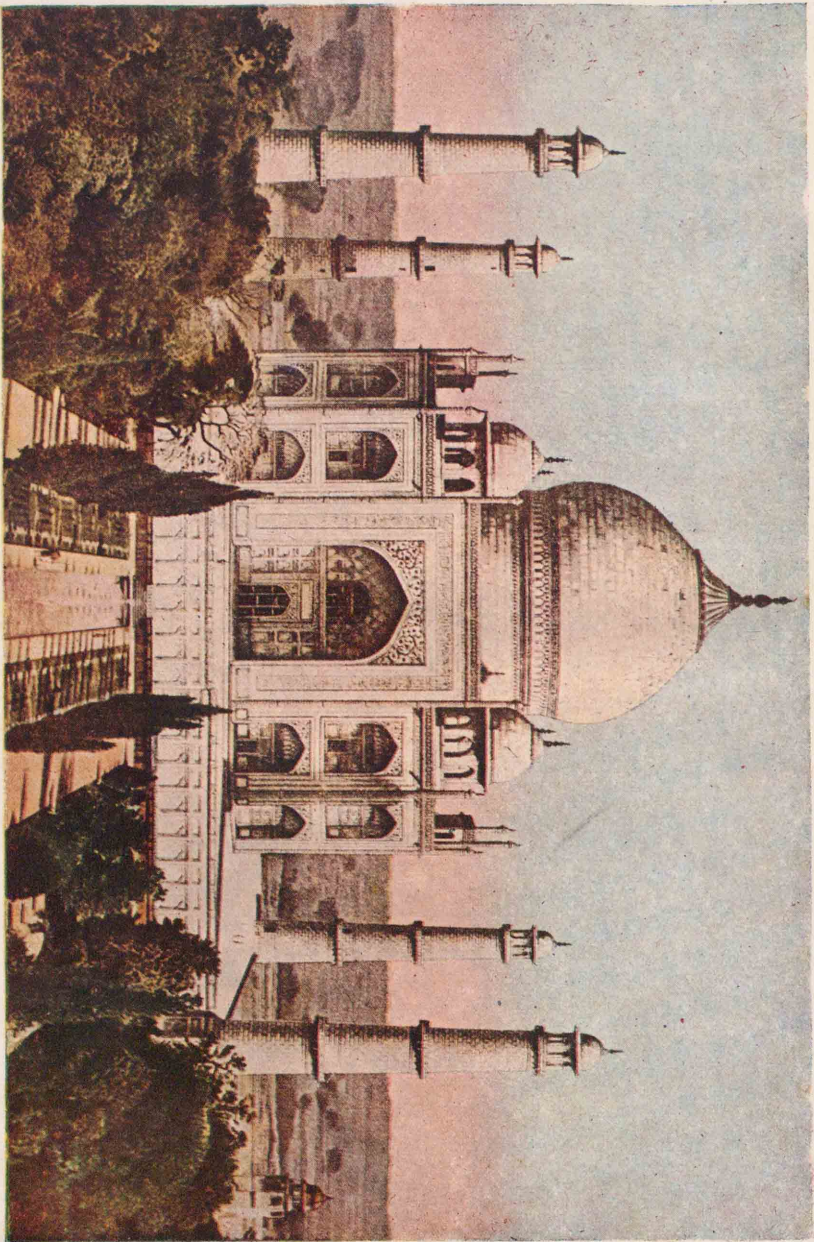
國を盛ならしめ、大帝と稱せられ、莫臥兒帝國の名聲は、漸く西洋に傳はりて、西洋人の注意を動かせり。其後アクバル曾孫アウラングゼブの時(徳川綱吉時代)に至り、南印度を征して一時全印度を統一せしが、國內の諸教徒を遇すること不公平にして、人民漸く反抗する者あり。且つ其後暗君相つぎて、國勢漸く衰微せる時に乗じて、英國人等の印度侵略ありし事は、之を次篇にのべん。

帖木兒大王及び莫臥兒帝の系圖



バベル(印度の莫臥兒皇帝) — フマユーン — アクバル — ジハンギル — シャジハン — アウラングゼブ

西洋人の東漸 元の盛時に當り、東西の交通一時盛なりしが、其後百數十年間、又殆んど中絶せり。然るに明の中世の頃より、歐洲の



タージマハル



タジマハール (Taj Mahal.)

タジマハールは、アクバル大帝以後の莫臥兒帝國の首府たりしアグラ  
 市附近に在り。アクバルの孫シャージャハン及び其の皇后の陵廟なり。  
 シャージャハン時代は、印度空前の繁榮なる時代として名高く、此の陵廟は、  
 白大理石中に、青玉・瑪瑙・珊瑚等の珠玉を嵌入し、甚だ美麗なり。晴天の  
 晝日此所に到るや、日光赫々、白石と相映じ、目を開き離き程なり。月夜  
 の觀望尤も美なりと云ふ。

西洋人東洋に着  
 眼す

葡萄牙人と澳門



明の末の澳門

機運大に開け、遠洋の航海、新陸地の發見、植民及び貿易の事業を獎勵せしかば、西洋の諸國は競うて東洋に着眼せり。

葡萄牙人と西班牙人 當時率先し

て東洋に來りし者は、葡萄牙人なり。初

め同國人 *Vasco da Gama* の喜望峰を廻

航して、印度に達せしより *Cape of Good Hope* (二一五八明の中)

同國人の東洋に來る者多く、遂に印度

の臥亞を取りて之に據り、更に東して

南支那の廣東近海に入り、ついで澳門(廣)を取りて、其根據地とし

を占めたり。次に西班牙人も葡萄牙人に次ぎて東洋に來り、*Spain* *Philippine*



西班牙人とマニラ

明末の耶蘇教

西洋人の漢名

ピン群島を占領し(二二五) マニラに據りて、東洋貿易を營めり。

耶蘇教の東傳 葡萄

牙人の東航と共に、耶蘇教士も頗る多く東に來りて、布教につとめ、耶蘇教はここに三たび支那に流行せり。中にもジェズイット派のザビエル及びリッチ最も有名なり。

ザビエルは、印度と我國に布教し、後ち支那に向ひしが、廣東近海の上川島に死せり。リッチは漢名利瑪竇と稱し、北京に入り、明の神宗の許可を得て會堂を建て、布教に力め、明の徐光啓等其教を信仰せり。



(左)寶瑪利及び(右)啓光徐の明

第八章 元明の文物

者は概して新説を出さず。ただ明の世(足利義政より義晴の頃)にまで、王守仁

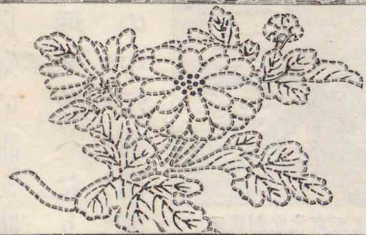


(傳畫堂笑晚)明陽王の明

儒學 北方蠻族より起り、武事に長じ、喇嘛教の流行せし元代にも、學術を尊びし事なきにあらず。又一代の名儒ありしと雖ども、皆宋儒に及ばず。明初、方孝孺の凜然たる節義は既にのべし。所、其學問亦淺からず。然れども明の學



致良知



畫の樹藤江中



王陽明

陽明學

(陽明と)あり。博學にして獨創の識見に富み、始めて良知の説を唱へ、道は我心に求むべきことを説き、また知行合一の理を教へたり。此説は朱子學に對し、陽明學として世に行はれ、我國の中江藤樹熊澤蕃山、大鹽中齋、平八郎等も篤く之を信ぜり。

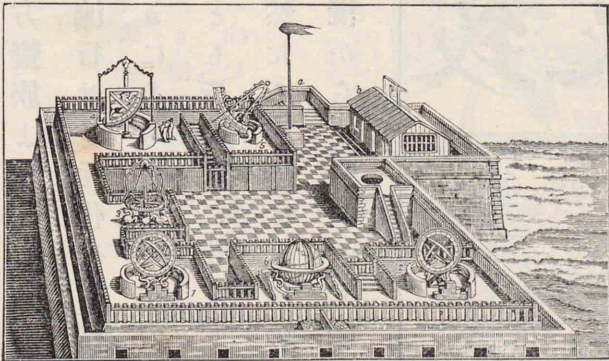
山中の賊心中の賊

小説・戯曲の發達

良知の知は、知事の知と同じく、主宰の義にて良知とは天然自然善良なる知といふことにて、人の心中の主宰にして、善を知り惡を知るは良知の端緒なり。次に知行合一の大意は、知は行の始め、行は知の成るなりといふにあり。又陽明曰く、「破山中賊易、破心中賊難」と。適切なる教訓といふべし。

小説戯曲

元明文學の一特色は、小説戯曲の發達に存し、三國志演義水滸傳な



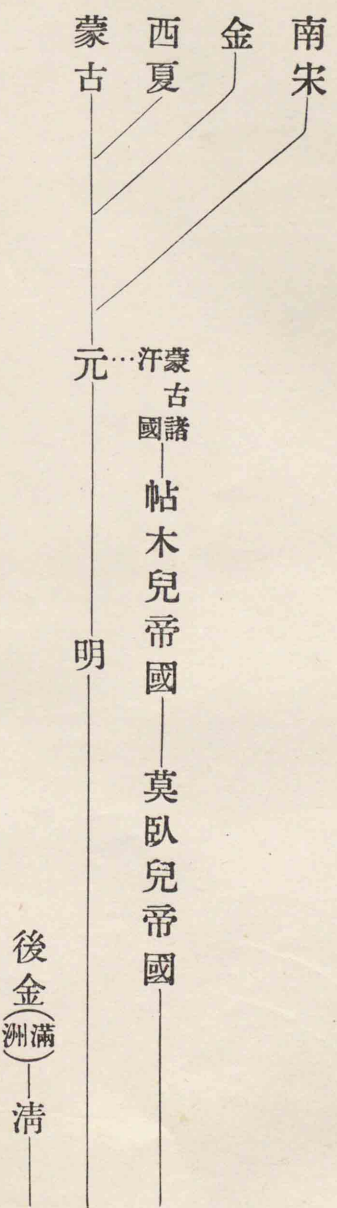
元代創立北京天宮文臺の天軍儀(右にあり)等(逸獨)のツッホの國語合聯及盟同の後戰大界世がしり在に死庭内宮王前ムダ(りせ)還送に京北月四年十正大りよに約條和平のと逸獨と

December 5th 1911

同順德	一八七九	一三九	蒙古の大軍西征す	同小松	二〇五三	一三九三	朝鮮の太祖(李成)元年
同後堀河 北條義時	一八八四	一三四	蒙古軍阿羅思に侵入す	同義持	二〇五九	一三九九	帖木兒印度に入る
同	一八八五	一三二〇	同	同	二〇六一	一四〇二	同



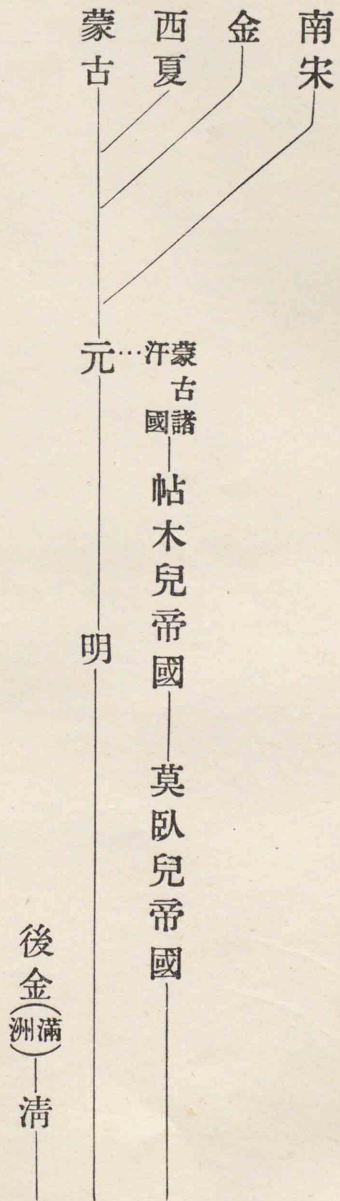
近古史摘要年表



年		重要事蹟	年		重要事蹟
皇紀四代			皇紀四代		
同	龜山時宗	元の太祖元年 <small>蒙古の鐵木眞成吉思汗と號す</small>	同	長慶	帖木兒サマルカンドに都す
同	後深草時頼	蒙古の大軍西征す	同	後小松	朝鮮の太祖(李成桂)元年
同	同	蒙古軍阿羅思に侵入す	同	同	帖木兒印度に入る
同	同	西夏亡ぶ○元の太祖死す	同	同	足利義滿始めて明に通ず
同	同	高麗の軍蒙古に降る	同	同	明の成祖(永樂帝)即位
同	同	金の滅亡	同	同	帖木兒土耳古を破る
同	同	拔都の西征	同	同	明の英宗瓦剌部に擒にせらる
同	同	蒙古人ブルスタトに大勝す	同	同	葡萄牙人ブスコ・ダ・ガマ印度に達す
同	同	旭烈兀の西征	同	同	パベル・莫臥兒帝國を興す
同	同	元の世祖即位元年	同	同	明の王守仁死す
同	同	海都推されて蒙古の大汗となる	同	同	此頃韃靼屢、明に入寇す
同	同		同	同	此頃「倭寇」明を攻撃す
同	同		同	同	葡萄牙人澳門に據る
同	同		同	同	西班牙人フィリッピン群島を占



近古史摘要年表



年	皇紀	代紀	重要事蹟	年	皇紀	代紀	重要事蹟
土御門源實朝	一一六六	一一〇六	元の太祖元年 蒙古の鐵木眞成吉思汗と號す	長慶	二〇三九	一三六九	帖木兒サマルカンドに都す
順徳	一一七九	一一一九	蒙古の大軍西征す	後小松	二〇五三	一三九三	朝鮮の太祖(李成桂)元年
後堀河北條義時	一一八四	一一三四	蒙古軍阿羅思に侵入す	同 義持	二〇五九	一三九九	帖木兒印度に入る
同 泰時	一一八七	一一三七	西夏亡ぶ 元の太祖死す	同	二〇六一	一四〇一	足利義滿始めて明に通ず
同	一一九二	一一三三	高麗の軍蒙古に降る	同	二〇六三	一四〇三	明の成祖(永樂帝)即位 帖木兒土耳古を破る
四條	一一九四	一一三四	金の滅亡	後花園 同 義政	二〇九九	一四四九	明の英宗瓦剌部に擒にせらる 葡萄牙人ヴスコ・ダ・ガマ印度に達す
同	一一九六	一一三六	拔都の西征	後土御門 同 義澄	二二五八	一四九八	バベル莫臥兒帝國を興す
同	一一九〇	一一四二	蒙古人グルルスタットに大勝す	後柏原 同 義晴	二二八六	一五三六	明の王守仁死す
後深草 同 時頼	一一九四	一一五四	旭烈兀の西征	後奈良 同	二二八八	一五三八	此頃韃靼屢明に入寇す 此頃「倭寇」明を攻撃す
同	一一九六	一一五六	元の世祖即位元年	同 義輝	二二一〇	一五五〇	葡萄牙人澳門に據る
同	一一九二	一一二七	蒙古國號をたてて元といふ	同	二二二七	一五五七	西班牙人フイリッピン群島を占領す
同	一一九三	一一二七	マルコ・ポーロ元に来る	正親町 同	二二三五	一五六五	伊太利人利瑪竇支那に来る
同	一一九三	一一二七	南宋亡ぶ	同	二二四〇	一五八〇	滿洲の弩爾哈赤(太祖)兵を起す
同	一一九二	一一二二	元軍我國に入寇して大敗す	同	二二四三	一五八三	我國朝鮮をうつ
伏見 同 貞時	一一九四	一一二二	元の世祖死す	御陽成 同 豊臣秀次	二二五三	一五九三	滿洲の弩爾哈赤後金の皇帝と稱す
同	一一九四	一一二二	耶蘇教徒會堂を元の大都に建つ	後水尾 同 徳川秀忠	二二七六	一六〇六	後金國號を清と改む
同	一一九四	一一二二	元亡び 明興る	同	二二九六	一六三六	清の太宗朝鮮を降す
後村上天 同 足利義滿	一二〇八	一一三六	明の太祖洪武元年	同	二二九七	一六三七	



December  
1904

天文・曆法の進  
歩  
洋書の翻譯

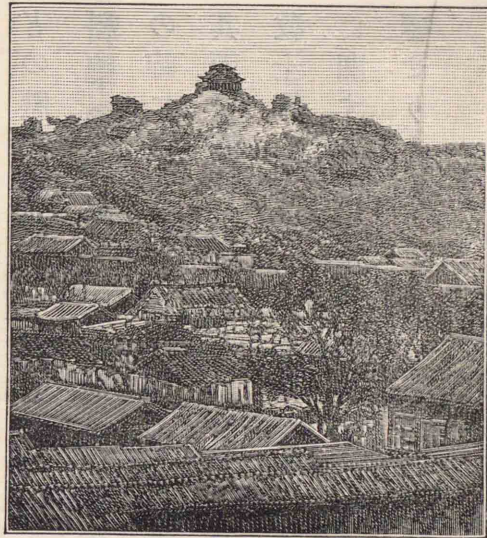
どの歴史小説も元代に出でたり。次は此時代學術の新潮流は科學の進歩にあり。元の時には東西交通の開くると共に、西方の學術支那に傳はり、特に其天文曆法の進歩を助け、郭守敬の如き學者を出せり。明末の耶蘇教士等は、布教の傍ら、西洋の天文曆法、數學、砲術を傳へ、是等の學術に關する洋書の翻譯も、始めて支那に起り、本邦近世の文明にも影響せり。



第四篇 近世史 (代皇紀二千二百六十年頃より現)

第一章 清の統一

明の滅亡 近古時代の末に勃興せし滿洲の清朝は、既に滿洲族を統一し、遼東蒙古地方を征服せしのみならず、朝鮮を屈服せしめたり。



(眞寫) (内城京北) 山景の難殉宗毅の明

かくて清は東方後顧の憂を絶ち、力を專にして明に迫る。明の毅宗(神宗)は吳三桂を遣して之を防がしむ。時に明の國內には神宗以來の悪政に苦める不平の流賊諸方に起り、李自成の勢最も強く、遂に北京を陥れ毅宗は自殺して國難

吳三桂の防禦

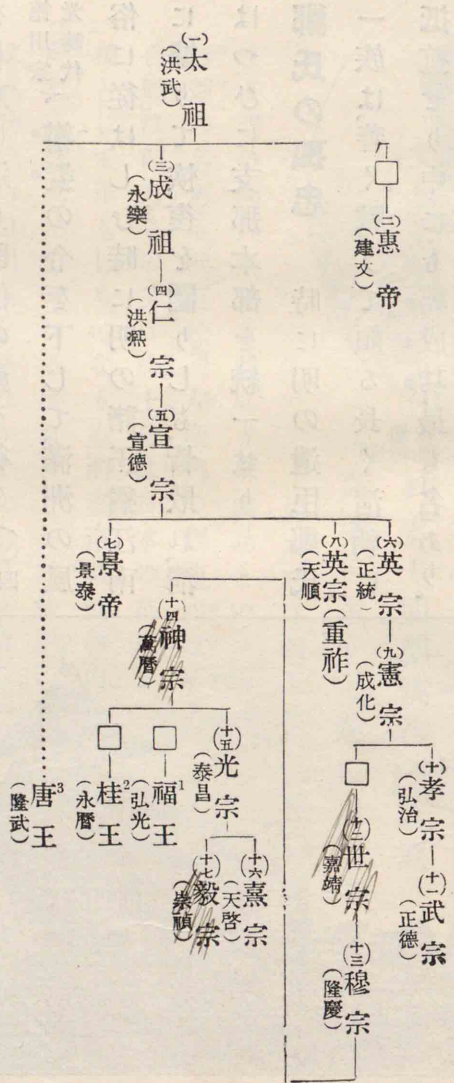
流賊の蜂起

毅宗の殉難

に殉じ、明は十七世二百七十七年にして滅びたり (二三〇四徳川家光時代西紀一六四四)

明の系圖

(括弧の内は年號なり) 123は明末南方の三王なり



吳三桂清に降る

清の統一 明の滅亡に先ち、吳三桂は北京防禦の爲め軍を還せしが、其途中、北京の陥落を聞き、遂に清の世祖(太宗の子)に降り、清軍を導



北京遷都

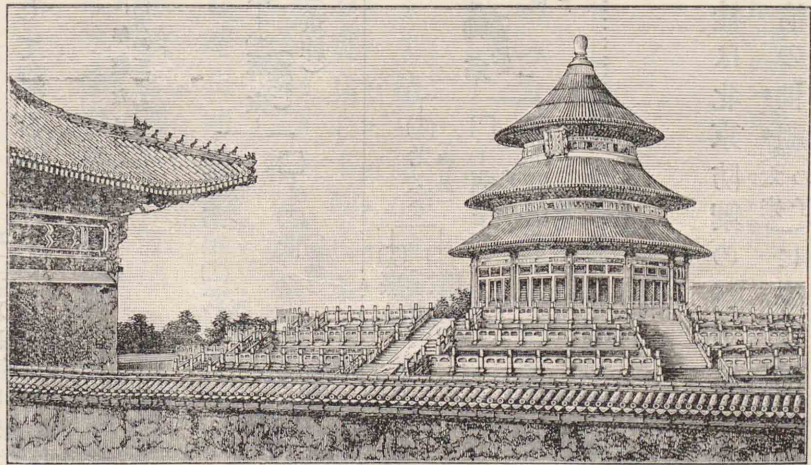
辨髮令

鄭成功及び其父母

きて李自成を伐ちしかば、清は容易に北支那を平定せり。世祖は乃ち都を北京に遷し、即位の禮を行ひ(二三四) 德川家(德川家) 辨髮の令を下して、滿洲の風俗に從はしむ。時に明の諸王猶江南に據りて恢復を圖りしも、皆敗れ、清はつひに支那本部を統一せり。

鄭氏の孤忠 時に明の遺臣鄭氏

一族は善く戦うて、頗る長く清朝に抵抗せり。中にも鄭成功最も名あり。其父は鄭芝龍、母は我平戸の人なり。初め厦門(廈門) に據り、後臺灣(臺灣) に據る。臺灣は古より支那に屬せず。明末倭



北京天壇

倭寇と臺灣

臺灣占領

國姓爺

朱舜水及び隣元

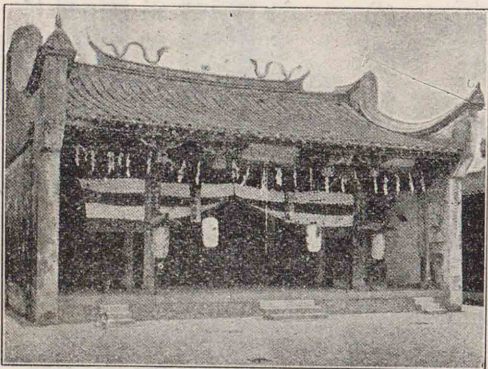


鄭成功の像 (臺灣南臺開山神社)

寇之に據りて高砂と呼ぶ。後和蘭人之を奪ひしが(二三四) 鄭成功は和蘭人を逐ひて之を占領せり。(二三二) 德川家綱(時代西紀一六六一) 然れども、明朝恢復の志竟に成らず。其孫克塽に至りて、遂に清に降れり(二三四)。

鄭成功は明王

より明の國姓朱氏を賜はり、朱成功といひ、國姓爺の名あり。我近松門左衛門の劇曲、國姓爺合戦は、即ちこの父は唐土、母は日本の英雄を種として作りしものなり。臺灣臺南縣社開山神社は鄭成功を祭れる神社にして、其後殿には成功の母田川氏を祭れり。また明清革命の際には、明の遺臣の我國に投歸せるもの少からず。中にも朱之瑜、即ち朱舜水、僧隱元等最も有名なり。



開山神社



日のもとに土にひたして撫子の名も高砂にほひぬるかな 力石重遠

生為遺臣歿為正神獨有千古 (此二聯は開山神社にあり)

今受大名昔受賜姓諒哉完人

今は大名を受け昔は賜姓を受く諒ことなる哉完人(完全の人)

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉

祖業の大成

清は建國より第三世の世祖に至りて、略支那を統一し、其子聖祖(康熙帝)に至りて、祖業を大成擴張し、文武の功業並び高

聖祖康熙帝

康熙帝は在位六十一年(徳川家綱綱吉家宣家継吉宗の時代)の間、まづ明の降將にて雲南の大藩に封ぜられたる吳三桂等の叛亂を平げ、又明の遺臣鄭氏を降して臺灣を取り、尋で親征して、蒙古を併せ、更に

在位六十一年 武功

聖祖

高宗の交渉

9th. 1925

文徳

在位六十年文武の功業



聖祖康熙帝

に謁し、敬禮を行ひしが如きは、尋常の君の所爲にあらざるなり。

高宗乾隆帝

康熙帝の子世宗(雍正帝)在位

十三年にして崩じ、其子乾隆帝之

につぐ。帝も亦在位六十年(徳川吉家重宗家重)の久しきに及び天山南北兩路を平げ、緬甸安南及び明末に我山田長政が武功を立てたる暹羅等の後印度諸國を降



高宗乾隆帝 (満洲寫眞帖)



し、其武勳赫赫たるが上に、學術獎勵の功も亦大なり。然れども、征戰行幸の爲に金穀を費すこと多く、清朝財政難の一端、因は此時代に起れり。

### 清露の交渉

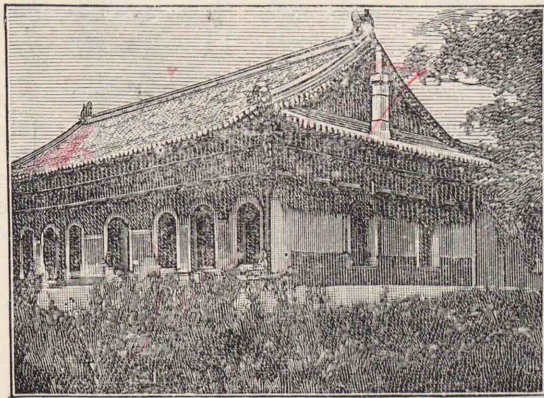
清朝極盛の時既に將來の清國のみならず、他の東

洋諸國にも大關係ある露西亞の東方侵略漸く甚しくして、遂に清露の交渉を見るに至れり。

露國は蒙古の拔都の西征以來、多年欽察汗國に屈服せしが、同汗國の衰微するや、始めて獨立して、(明の中世)遂に同汗國を滅せり。是より露國の勢漸く興り、コサック部をして漸次に地を西伯利亞に拓かしめ、清初に至りては、遂に滿洲北部に侵入せり。

明の中世以前の露西亞

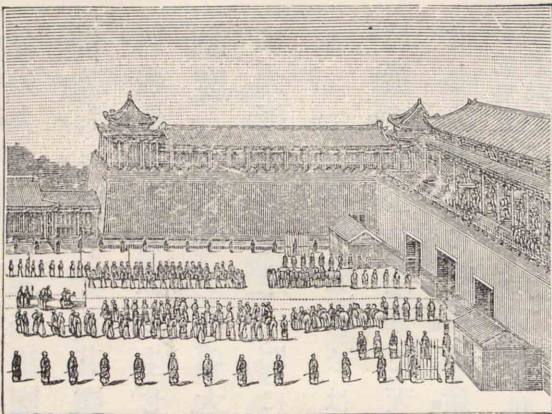
滿洲北部侵入



(眞寫)(京北)宅住教主會教正亞西露の來以熙康

15th January 1925

康熙帝とピーター大帝



圖の朝入に京北人古蒙代時隆乾

康熙帝は乃ち支那本部平定の餘威を以て露人をうち、且つ書を露國のピーター大帝に送りて、境界の協議を求め、清露の使臣は尼布楚(外バライ)に會して、外興安嶺を兩國の界とし、(二三九四九德川綱吉)以て露人の南下を防げり。

### 第三章 邊外の征服 清の文物

#### 邊外の征服

前章にのべしが如く、康熙

乾隆時代に征服して、清の領地となせしは、内外蒙古、西藏、青海、天山南北、兩路及び臺灣にして、安南、暹羅、緬甸等の後印度諸國も之を降して、清の冊封を受けしめしのみならず、朝鮮も既に朝貢の國たり。かくて清國の面積は、大體東亞大陸の十



清國の全盛と其  
悪弊

分の九を占め、邊外諸國皆其國威に服し、一時の隆盛は漢・唐の上に  
出でたり。然れども、其國運隆盛の結果、支那人をして、益々驕慢自尊、外  
國輕侮の悪習慣を生ぜしめたり。

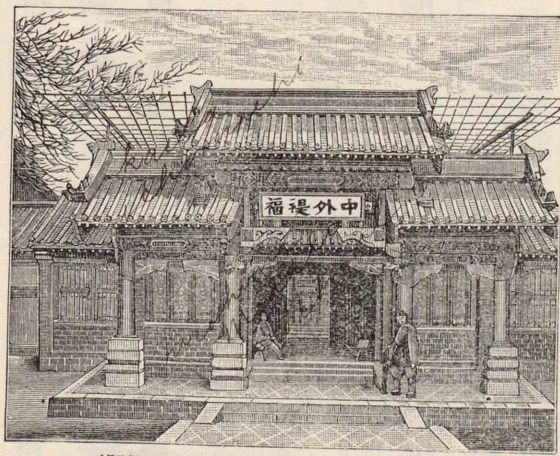
**制度** 清朝が右の大領地を統治せんが爲に設けし左記の制度

内閣

六部

軍機處と軍事内

り。〔中央政府〕初めは内閣に大學士  
協辨大學士を置きて、天下の政を總理  
せしめ、其下に吏・戶・禮・兵・刑・工の六部（官長  
を尙書次官を侍郎とす。其  
職務は唐の六部と同じ。ありて、政務を掌り  
しが、雍正以後、特に最近世界大戦中の  
英佛二國の軍事内閣に比すべき軍機  
處を設け、軍機大臣をして天下の樞機  
に參與せしめられたれば、内閣の實權は大



(門外福) 門外事務各國理總

十八省

新疆省

東三省

藩部

清末の中央行政  
部

抵此に移れり。〔地方行政〕支那本部を分ちて十八省（直隸山東山西

浙江江西福建廣東廣西湖南（新とし、省の

湖北陝西甘肅四川雲南貴州）とし、天山南北兩路も之を一省（新とし、省の

下に、府州縣あり。一省又は二三省毎に總督を置きて、文武の大權を

握らしめ、其下に民治の巡撫と、軍務の提督あり、共に毎省一人を常

とす。尙其下に知府知州知縣等ありて、其管内を治む。次に滿洲の東

三省（盛京吉林には將軍及び府尹を置きしが、後ち支那本部と同じ

く、總督巡撫を置きて之を治めしめ、藩部（蒙古西藏は、皆理藩院に屬せ

しめたり。

清朝の晩年時勢の進歩に適應して、制度を改め、諸部の増設及び改廢を行

ひ、清末の中央行政部は、外務民政度支學務陸軍海軍司法農工商郵傳理藩

の十部となれり。

**學術** 宋代以來の儒者は、哲學的研究を主とし、やや空論の弊を

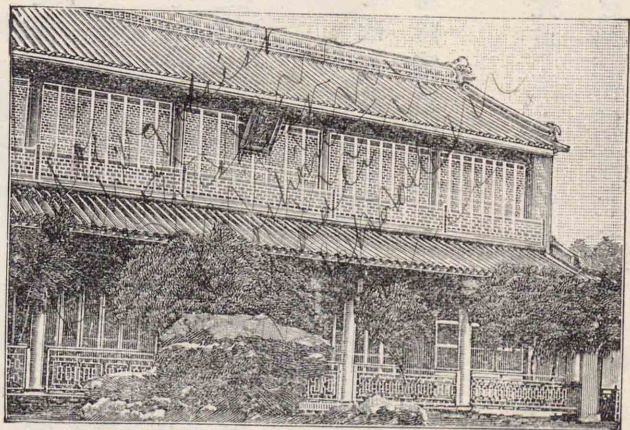
生ぜしが、明末以後、其反動として、古典を緻密精確に研究する考證

16th January 1928



明末及び清朝の新學風

學風起り、顧炎武、黃宗義等、新學風の首唱となり、清の史學、地理學、文字學、考古學等大に發達せり。また康熙、乾隆の間には、勅撰の大著少からず、中にも康熙字典の如きは、我國にも廣く行はる。尙また康熙帝は和蘭人南懷仁(原名フエルビースト)を天文館の副長とし、西洋の學術にも注意せり。かくて支那近世に於ける西洋學術は、我國より早く開けしも、其發展利用は、つひに本邦に及ばざりき。



(縣杭道塘錢省江浙) 庫書閣瀾文

西洋人の東漸

### 蘭英二國

明の中世に發端せし西洋人東漸の勢は、近世に至り

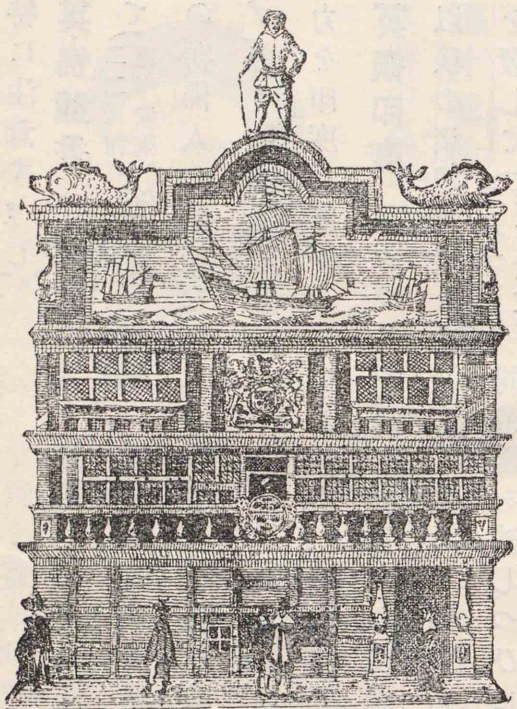
### 第四章 英國の東方經略

て益、烈し。

和蘭人は明末より東洋貿易に従事せしが、先來の葡萄牙、西班牙兩國人と競争して之に克ち、瓜哇(ジャバ)のバタビアに其政廳を置き(二二)更に一時臺灣を占領し(二二八四德川家光時代)我長崎の出島に居留して、盛に貿易を營めり。英吉利人も和蘭人と略同時に、東洋の利權に着眼して、東印度會社を立て(二六〇豐臣秀頼時代西紀一六〇〇)着々葡萄牙人を壓倒せり。此會社は貿易會社たるとともに、後には統治機關たるに至りしこと、

東印度會社の特色

和蘭人と瓜哇  
蘭人と長崎  
英吉利人と印度



(初清末明) 社會度印東國英

和蘭人と略同時に、東洋の利權に着眼して、東印度會社を立て(二六〇豐臣秀頼時代西紀一六〇〇)着々葡萄牙人を壓倒せり。此會社は貿易會社たるとともに、後には統治機關たるに至りしこと、



英人クライブの勝利

22th Jan. 1925

莫臥兒帝國の滅亡  
印度女皇  
英人と後印度諸國

特に注意すべし。

### 英佛競争

(二二六四)

佛蘭西人も亦英人と殆んど同時に東印度會社を立て(德川家康)各莫臥兒帝國の衰運に乗じ競うて印度を侵略せり。競争

の初、佛人の勢盛なりしが、其後英國東印度會社書記出身のクライブ善く戦ひ、大に佛軍をブラッシーに破り(二四一七、德川家重)英人の威力を印度に輝かせり。時に清朝の乾隆年間なり。

以後の諸總督、着々功を奏し、漸く莫臥兒帝國を蠶食し、遂に其皇帝を廢して(二五一七、西)同帝國を滅し、つひに英國女王ヴィクトリア印度女皇の位を兼ねるに至れり(明治)其後英國は緬甸を併せ(一九)馬來半島の諸小國をも保護國とせり。

### 英領印度

クライブ及び初任の印度總督たりしヘステイングス

以後の諸總督、着々功を奏し、漸く莫臥兒帝國を蠶食し、遂に其皇帝を廢して(二五一七、西)同帝國を滅し、つひに英國女王ヴィクトリア印度女皇の位を兼ねるに至れり(明治)其後英國は緬甸を併せ(一九)馬來半島の諸小國をも保護國とせり。

馬來半島の諸小國をも保護國とせり。

古來全印度の完全なる統一なし。英國の統治に至りて始めて、普遍的統一に近き施設あることゝなれり。然れども印度と稱する語中には、英領印度

英領印度と土地王侯領

22th Jan. 1925

英領印度と鴉片の害

と土地王侯領とを包有する者にして、後者の數は、全印度を通じて、六百餘に達し、其面積は全印度の約三分の一を占む。

### 第五章 鴉片戰役

#### 鴉片戰役

康熙乾隆の全盛既に往きし後は、清の憂患時代となり、鴉片戰役に至りて、始めて一大外侮を受



林則徐



(康健)去過の者烟吸片鴉 (在現)來未(惰怠) 態狀三の(弱衰)

林則徐たり。此戰役は實に前章の英國の東方侵略と關係する者なり。

英人は既に印度に勢力を得てより、盛に印度の鴉片を清國に輸入せり。清人は其金錢を費し、時間を失ひ、而して心身を害



林則徐の決斷

すること甚しきを以て、其輸入を禁ぜしに、猶密輸入を行ひしかば、乾隆帝の孫宣宗(道光帝)の時、欽差大臣林則徐は廣東英商の鴉片を焼き(二四九九西紀一八三九)遂に其通商を禁ぜり。

英・清の開戦

鴉片戦役

是に於て、英國艦隊は貿易保護を名として、廣東・廈門・

寧波(浙江)等の諸港を封鎖攻撃し、遂に南京に迫る。

南京條約

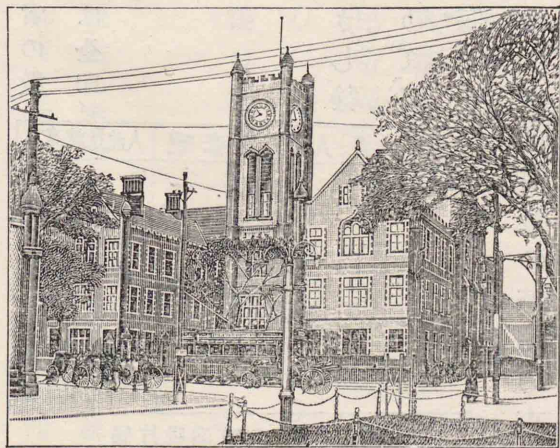
清朝も是に至りて大に

恐れ、南京に於て和約を結び、償金(二千萬)を出し、五港(上海寧波廈門福州廣東)を公開し、且つ

香港英領となる

香港を割譲せり(二五〇二徳川家慶時代)是より後清

國との條約漸次に締結せられ、其關係愈密接なり。ついで英國は上海等に領事館を設けたり。



上海海關

近年に至り、支那人も鴉片吸烟の身體上精神上經濟上風俗上其他に及ぼす害毒の甚だ大なることを痛切に感じ、清朝の晩年既に鴉片嚴禁の上諭(四一)禁烟大臣の任命あり、人道の爲に慶賀すべき傾向あり。

第六章 長髮賊 英佛軍の侵入

長髮賊

洪秀全の策略

清朝の鴉片戦役に敗れて、其威嚴を損するや、之に乗じて亂民蜂起の勢あり。洪秀全は亂を廣西に起し(二五〇)清を討ち明を

太平天國

興すと稱して、漢人の心を收め、耶穌教に附會して、外人の意を迎へ、國を太平天國と號し、其勢頗る猛烈、遂に南京を取りて之に都す。之

洪秀全南京に據る

を長髮賊(剃頭辮髮せざるが故に)と稱す。時に官軍弱くして之を平ぐることは

ず。宣宗の子文宗(咸豐帝)詔して勤王の兵を徵す。曾國藩首として義勇兵を起して、賊軍を破りしも、賊勢未だ挫けず。

曾國藩等の諸名臣

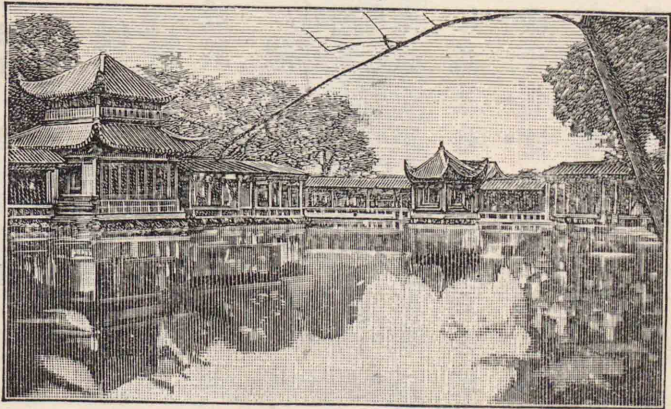
曾國藩は文正と諡し、近世支那の文武兼備の名臣なり。湖南の出身にして



左宗棠、胡林翼等の諸名士も同地方より輩出せり。安徽の李鴻章も實に曾國藩の推舉によりて立身せる者にして、曾國藩を稱して諸葛孔明、司馬溫公等を合して一人とせん。偉人なりとせり。曾國藩奉公の精神に富み、且つ平生修養に注意し、勤儉自ら持し、勞に習ひ、苦に習ひ、早起を貴び、恒心を貴べり。また愧あれば之を書し、悔あれば之を録し、以て意を克己の工夫に致せり。

### 英佛の侵人

時に廣東の官吏英船（アロア）を搜索し、乗組清人の犯罪者を執へし事ありしが上に、佛國の宣教師も廣西にて殺されしかば、英佛二國聯合して、北清を攻め、遂に天津に迫り、假條約を結びて、二國の兵又天津、北京を陥



曾國藩の湖南湘江道長沙縣

英佛聯合軍北京を陥る

Jan. 29th 1925



ゴドルン

れ、遂に北京條約を結び、（二五二〇）孝明天皇、（御代西紀一八六〇）清國は償金を出し、基督教の布教を許し、新に七港（牛莊、漢口、九江、汕頭、瓊州、臺灣）を開けり。

### 長髮賊平定

此外患の爲めに、長髮賊の平定大に後れしが、文宗の子穆宗（同治）に至り、米人ワルド、英人ゴルドン（戈登）等相つぎて官軍を助け、曾國藩、李鴻章等奮戦して南京を恢復せしかば、（二四）洪秀全自殺し、餘賊も次第に平定せられたり。此亂前後十五年、其禍を被れる者十六省に亘り、清の國力疲弊し、外國の壓迫益甚しからんとす。

當時官軍を助けたる西洋人の率ゐたる義勇的砲兵隊は、到る處に勝を得

亂後の清國

ワルド及びゴルドン

戈登及び常勝軍



たるが故に常勝軍の名あり。ゴルドンは特に大膽にして勇氣あり。其戰に臨むや、常に一鞭と一雙眼鏡とを携へ、戦線に出入して、號令指揮平生の如し。清朝も其功を賞して、特に黄色乗馬用衣を賜ひ、以て名譽を表彰せり。

### 第七章 露國の滿洲經略

#### 滿洲經略

ムラビヨフ總督

露國東略の鋒も、康熙帝の世、一時挫折の狀ありしが、常に好機を窺うてやまず。ムラビヨフ東部西伯利亞總督となるに

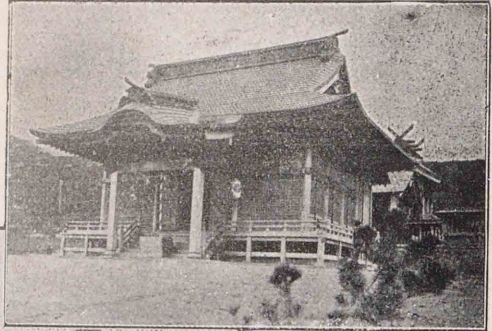
及び、頻に滿洲經略を計り、遂に長髮賊の亂に乗じて、黑龍江北の



(カフロバハ)像銅フヨヒラム

地を占領す(二五)尋で英佛聯合軍の北京を陥るや、露國は講和の事に周

大連神社は大連全市我が日本人の氏神として奉崇するものにして、境内神さびて神靈愈々尊し。



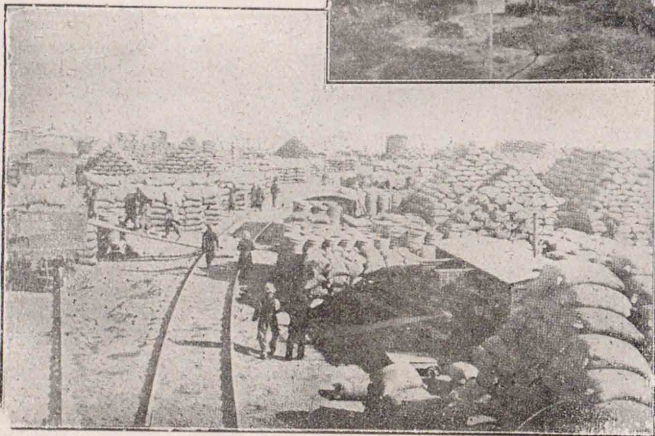
關東州及南滿鐵道沿線附屬地には、既に内地同様の小學校を新設せり何ぞ中學校の設備なきを得ん。左圖は即ち旅順中學校の實寫なり。



此音樂堂はもと露國樞東大守の娛樂せし處。日本人は今や此堂の主人となりて間を後樂園と命名す。前に憂苦して、後に樂む、旨ある哉此の命名。



南滿洲の一大富源は豆にあり。大連埠頭豆によりて賑ひ豆の爲に働く者多し。盛なる哉大連埠頭。





浦鹽斯德

露領樺太を占領す

露國の地慾益々大なり

旋せし報酬として、烏蘇里江以東の地を

取り(二五)其南端に浦鹽斯德港を開きて、

東方經營の根據地とせり(明治四)

滿洲經略の餘波 是に於て、露國は漸

く朝鮮の北境を壓するの形勢あり。而し

てまた露國は我國と交渉し、千島と換へ

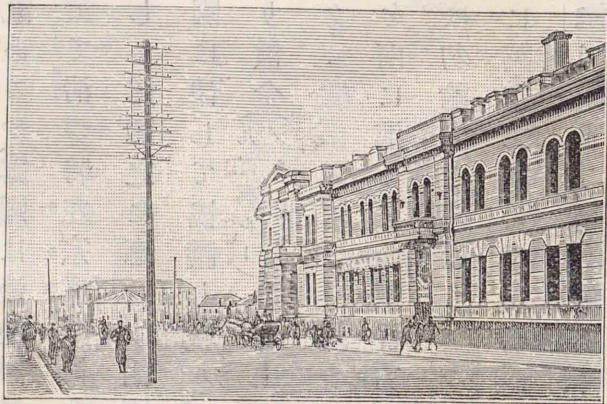
て樺太島を得たれば(明治八)日本海北部沿

岸の大陸及び一大島は悉く露國の領地

となれり。

### 第八章 露國の中央亞細亞經略 伊犁事件

中亞經略 露國の地慾は東方の經略に満足せずして、中亞にも及べり。中亞の地は帖木兒大王の死後分裂紛争して統一せず。露國



浦鹽斯德の露清銀行



は之に乗じて、康熙帝の頃より之に着眼し、漸く之を侵略して、明治九年の頃迄には、<sup>Amu</sup>アム河以北の地は、悉く露國の有となせり。

**伊犁事件**

かくて露國は次第に清國の西北境に接近せり。而して偶、清國同方面の伊犁<sup>天山北路</sup>に回教徒の亂あるや、露國は邊境鎮撫を名として、同地方を占領せり<sup>(四) (明治)</sup>。是に於て清の將左宗棠<sup>其亂を</sup>平げ、清國は露國に同地方の還附を求めしも、露國之に應ぜず。兩國將に開戦せんとせしが、曾紀澤<sup>(曾國藩の子)</sup>露國に使用して協議し、<sup>Khorgos</sup>コルゴス河<sup>(伊犁河の支流)</sup>を兩國の境界とし、且つ清より償金<sup>(九百萬ルーブル) (Pashie)</sup>を出して局を結び<sup>(一四) (明治)</sup>。

露國の伊犁占領

伊犁條約

**英露衝突** 露國は更に中亞侵略の鋒を南に進めて、印度洋方面に出でんと欲せしも、印度を領せる英國は、勿論之を喜ばず。アフガニスタンの後援となりて、之に反對し、遂に英露二國の委員會議して境界を定めたり<sup>(二〇) (明治)</sup>。而して中亞の<sup>Pamir</sup>パミール地方も清英露特に

アフガニスタン問題

パミール問題

英露二國の利害衝突の地となりて、又紛議を生ぜしが、二國協議して、同地方に於ける二國の勢力範圍を定めて其局を結び<sup>(二八) (明治)</sup>。

**第九章 佛國の印度支那經略 清佛戰爭**

**佛國と安南**

さてまた佛蘭西は清初より安南に着眼し、遂に其地の王族阮福映<sup>(二四六二德) (川家齊時代)</sup>を助けて、越南國を建てしめ、且つ基督教布教に力む。安南人は佛人に親まず、また其布教に政治的意味ありとて、排外の心を起し、屢、其宣教師を虐待せしかば、佛帝ナポレオン三世は柴棍<sup>(Sai Gon)</sup>を占領して越南に迫り、終に交趾支那<sup>(Cochin China)</sup>の地と償金を得<sup>(二二五)</sup>、且つ柬埔寨<sup>(Cambodia)</sup>も其保護國とせり。かくて佛國は愈々侵略を逞しうせしかば、越南王は長髮賊の殘將劉永福<sup>(Hue)</sup>をして佛軍を伐たしめしが、國都順化府<sup>(Hué)</sup>の陥るに及んで、佛國の保護國となり、且つ東京地方<sup>(Tonkin)</sup>を割きて講和せり<sup>(一六) (明治)</sup>。

佛帝ナポレオン三世の東方經略

を割きて講和せり<sup>(一六) (明治)</sup>。



佛領印度支那の成立

**清佛戰爭** 然るに、清國は越南を以て其外藩なりとして、此講和を黙視せず。劉永福を助けて佛軍を攻撃せしより、清佛二國の和親忽ち破れ、佛國の海軍は福建地方を攻め、且つ臺灣の諸港を封鎖せしが、李鴻章は佛國公使と會議して、和約を結び、清國は佛國の東京地方占領を承認せり(明治一八)。是に於て佛領印度支那成立し、さきに印度に於ける英人との競争に失敗せし佛人も、此方面に於ては成功せり。

**佛暹關係**

ついで佛國は、湄公河東の地は曾て越南及び柬埔寨に屬せりと主張して、暹羅に迫り、同河を以て佛國領地と暹羅との境界となさしめたり(明治二六)。

**第十章 清國に對する諸強國の壓迫**

(一) 北清事件に至るまで

日本と清との關係

**總說** 清國は外患を被ること、道光以來既に五十餘年なり。而かも近時に至りて、諸強國の壓迫益甚しく、清朝前半の隆盛と、後半の衰弱とは、相對して、非常の相異あり。今之をのぶるについて、東洋諸國の關係より説を起さん。

**臺灣征伐**

清國は第十世の同治帝に至り、明治維新の我國とも新に和好の條約を結びしが(明治四)、我琉球の漁民臺灣に漂着し(明治五)、生蕃に殺されしかば、我國は清國を責めしも、要領を得ざるを以て、生蕃を征服す(明治七)。清國は俄に異議を唱へしも、遂に償金(五十萬兩)を出して和を請へり。其後我國の琉球に沖繩縣を立つるや、清國又異議を唱へたり。かくて日清兩國の感情和合せず。遂に朝鮮に於て衝突するに至れり。

**朝鮮開國**

さて朝鮮は、清初以來、世々清の冊封を受けて、清に朝貢し、我國に對しては、徳川將軍の更代毎に來聘し、近世に至るまで





其國內に大事なし。明治維新の初め、第二十六世の李太王位に在り。年猶幼に院して、生父大院君(李昰應)攝政し、清國と自君國とを以て天下と爲し、清國の外に強

大院君の排外鎖國主義

日本と朝鮮の開

ずして、固く排外鎖國の主義を執り、我國より開國通商を勧めしも之に應ぜず。加之、韓人は遂に我軍艦(雲揚號)を江華島(仁川灣内)に砲撃せしかば、我國使黒田清隆、井上馨、其罪を問ひ、遂に朝鮮をして通商條約を結び、釜山の外に元山、仁川の二港を開かしめ、且つ其獨立國たることを確認せり(明治九年)。是に於て歐米諸國も亦我例に倣ひしが、朝鮮は猶清國に對して外藩の禮を執れり。

朝鮮の二黨

朝鮮の内訌と日清の交渉 此頃よりして朝鮮に二黨あり。獨立黨は大體我國に依りて、獨立開國の實を全くせんとし、事大黨は

大院君の擧

獨立黨と事大黨との争

所謂大國(清國)に事へて、其國を保たんとする者なり。而して朝鮮王の長じて政を親らするや、王妃閔氏の一族政を專にせしかば、大院君は不平を抱き、遂に亂兵を煽動して閔黨を撃ち、併せて京城の我公使館を襲ひしかば(明治一五年)、我公使花房義質は其罪を責めて、償金(五十五萬圓)を取り、且つ我公使館に守備兵を置くことを約せり。是に於て清國も亦袁世凱をして兵を京城に駐屯せしめたり。

已にして獨立事大黨の軋轢益甚しく、獨立黨の金玉均、朴泳孝等遂に兵を擧げて、事大黨を撃ち、國王を擁して、我公使の援を求めしに(明治一七年)、清國は事大黨を助けて獨立黨を破り、且つ我公使館を襲へり。是に於て我國は井上馨を遣し、朝鮮を責めて、償金(十三萬圓)を出さしめ、また特に伊藤博文を清國



金玉均



天津條約

事大黨の勝利

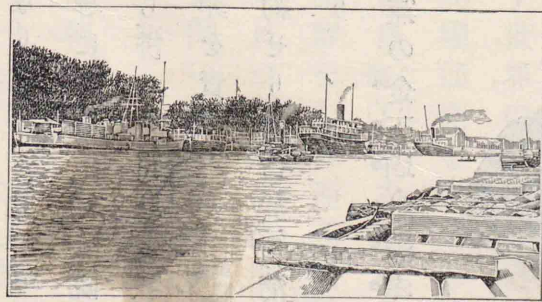


李鴻章

に遣し、李鴻章と天津に會議して、日清兩國の朝鮮駐在兵を撤去し、且つ將來軍隊の派遣を要する時は、兩國互に通知すべき事を約せり(明治一八)之を天津條約といふ。時に獨立黨は多く國を去り、事大黨要路に立ち、清國の駐在官袁世凱は朝鮮の政治に干渉し、朝鮮に於ける清國の勢力は甚だ盛なり。

日清戦争

天津條約の後、大約十年を経て朝鮮に東學黨の亂あり。東學黨はもと西教を斥け、東學を興さんとする保守狂熱的人士の團體なりしが、暴官汚吏に苦める人民も、亦之に合して、遂に亂を起す(明治二七)其勢猛烈にして、



天津紫竹林泊舟處

日清戦役の導火線

February 12th 1895

下、關係約

制し難きを以て、朝鮮は援を清國に乞ひ、李鴻章は直に大兵を發せり。是に於て、我國も亦出兵して、朝鮮在留の國民を保護し、且つ日清兩國協力して、朝鮮の政治を改善せんことを清國に勸告せり。時に我朝鮮公使は大島圭介なり。然るに清國は猶朝鮮を藩屬視して、我勸告を拒絶し、反つて我國に對して撤兵を求めしかば、日清の國交ここに破れ、其の戦端、陸は成歡驛に、海は豊島沖に始まり、山縣有朋、伊東祐亨等の率ゐたる我陸海軍は連戦連勝して、將に北京を衝かんとす。清國大に恐れ、李鴻章等を我國に遣し、伊藤博文、陸奥宗光と下、關に會議し、清國は朝鮮の獨立を認め、償金(大約三億圓)を出し、遼東半島及び臺灣、澎湖列島を割讓し、且つ沙市(湖北)、重慶(四川)、蘇州(江蘇)、杭州(浙江)を開放することを約して局を結べり(明治二八)。

三國干渉 かくて我國は名譽ある戦勝國となりしに、歐洲列國



獨・露・佛三國の干渉  
遼東半島還附

中、我國の隆盛を悦ばざる者あり。獨・露・佛の三國は協同して、遼東半島の還附を勸告せしかば、我國は深く時局の大勢(遼東還附の語の中の字句)を察して之に従ひ、代償金(大約四千五百萬圓)を受けて、遼東半島を清國に還附せり(明治二八)。

### 諸強國の壓迫

日清戦争後、歐洲列國は清國の弱點を看破し、競うて清國を壓迫し、佛國は先づ佛領印度支那に近き廣東・廣西・雲南の鑛山採掘權を得(明治二八)、露國は滿洲鐵道の敷設權を得(明治二九)、獨逸は其宣教師の殺されしを口實として、償金の外に九十九年間膠州灣(山東)租借の權を得(明治三一)、ついで露國は更に旅順口(盛京)及び大連灣(盛京)の二港を(明治三一)佛國は廣州灣(廣東)を借り受けたり(明治三二)。かくて英國も其清國に於ける勢力平均の上より列國の進取を傍觀せず、威海衛(山東)を租借し(明治三一)て、權衡を保てり。

北米合衆國と東洋及び南洋

歐洲諸強國の支那の要地租借及び利權獲得

當時從來亞細亞方面に其地を有せざりし北米合衆國も、東洋及び南洋に

着眼して、布哇國を併せ(明治三)、また西班牙と戦ひ、之に勝ちて、遂にフィリピン群島を得たり(明治三)。又伊太利の如きも、浙江省の三門灣を要求せしも、清國は之を拒みたり。

### 清國の改革黨

かくて清國の國歩益、艱難となる。有志の清人は

大に憤慨して、改革自強の說を唱へ、廣東の學者康有爲(光緒)の如きは、屢、其改革意見を上りしかば、德宗(光緒)は之を納れて、政治上の改革を計畫せしが(明治三)、清廷の老臣及び滿洲人多く之を悦ばず、西太后(咸豐)を擁して政を聽かしめ、帝を幽し、改革黨を除き、排外保守の氣運また盛なり(明治三二)。



康有爲

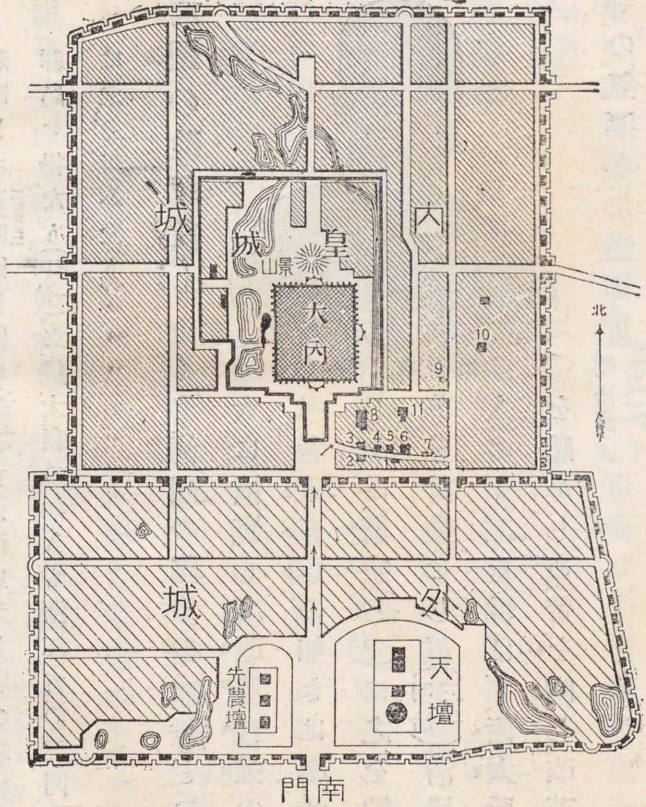
康有爲の改革計畫の失敗

義和團と保守派

義和團の亂 已にして山東地方に耶蘇教の撲滅と、外人の排斥とを旨とせる義和團といふ暴徒起り(明治三二)、皇族端郡王等の保守派



は、寧ろ之を保護する状ありしかば、團徒益勢を得て、遂に北京に入り、列國の公使館を攻撃せり。



(京北)

- 解 説
- 一 北京城總周圍……九里許
  - 二 內城周圍……六里許
  - 三 外城周圍……四里許
  - 四 皇城周圍……二里半許
  - 五 大內周圍……一里許
  - 六 列國公使館等位置
  - 七 獨逸
  - 八 北米合衆國
  - 九 露西亞
  - 十 西班牙
  - 十一 日本
  - 十二 佛蘭西
  - 十三 伊太利
  - 十四 英吉利
  - 十五 白耳義
  - 十六 清國總理衙門
  - 十七 清國總稅務司ロバートハート邸宅
  - 十八 軍隊進入路



光緒帝及西太后



光緒帝及び西太后

(一) 德宗光緒帝は、其在位三十四年(自明治八年至四十一年)、國家内外多事の時にあたり、天資は聰明にして進取の氣力あり、政を勤め民を愛するを本とし、特に其進歩的思想によりて、政治の改革を圖り、大に爲す所あらんとせしが、平素多病、其志を果さずして崩殂せり。其遺詔の中にいはく、庶幾はくは九年以後立憲を領布し、克く朕の未だ果さざるの志を完うせば、在天の靈よりて以て稍や慰めん、と以て其素志を察すべし。

(二) 西太后は、もと咸豐帝妃なり。同帝の崩殂後、大約五十年、垂簾の政を聽き、國步艱難内憂外患、頻に至るの時にあたり、よく人心を收め、人才を統べ、政治家的の才智ありし皇太后として有名なり。

列國と清との講和

February 13  
1925

朝鮮國號を韓と改む

列強の進撃

是に於て、日・英・米・露・獨・佛・奧・伊の東西八強國の聯合軍は、急に公使及び居留民を救ひて、遂に北京を占領せしかば、德宗と西太后とは、一時西安府(陝西)に避難し、慶親王李鴻章は列國使節と議し、償金(四億五千萬兩)を出し、謝罪使派遣各國の北京駐兵公使館保護等の事を約して、此所謂北清事件の局を結び(三四)。

北清事件の際、我國軍隊の精銳にして、其規律の嚴肅なることは、廣く各國に熟知せられたるが、清國も亦我國の義勇に感じて、我國に依頼するの念を起し、或は官吏を派して、我制度文物を視察せしめ、或は留學生を遣して、我諸學校に入學せしむること多きを加へたり。

(二) 北清事件以後

朝鮮の獨立 さて朝鮮は日清戦役の下、關係條約の結果、我國の爲に獨立國の意義完全し、清國に對する朝貢の禮を廢し、遂に國號を韓と改めたり(三〇)。而して我國は益々熱心に之が扶植に力む。



露國と朝鮮



韓 國 皇 帝 (後 李 太 王)

然るに、是より先き、英佛軍の北清侵入の頃より、漸く韓國の北境を壓迫せし露國(百四十五べ)の勢は、次第に朝鮮に加はり、韓國皇帝及び太子は一時、王宮を出でて、露國公使館に幸するに至れり。(明治二九)かくて韓國に於ける我國は、日清

日・露協商

戰役前、清國に對せし所を以て、今や清國よりも強大なる露國に對することとなれり。されど、我國は力を盡して之に當り、遂に日・露協商を結びて(明治三一)、共に韓國の獨立保全を確保することを議定せり。

日・英の同盟

然れども、韓國に對する露國の野心は猶未だ止まず。加之、露國は義和團の亂に乗じて、滿洲の要地を占領し、其志測る可からざるの形勢あり。是に於てか其利害共通一致の點を有する日・英兩國は、遂に同盟を結び(明治三五)、清韓の保全と、東亞の平和とを圖

露國滿洲を占領す

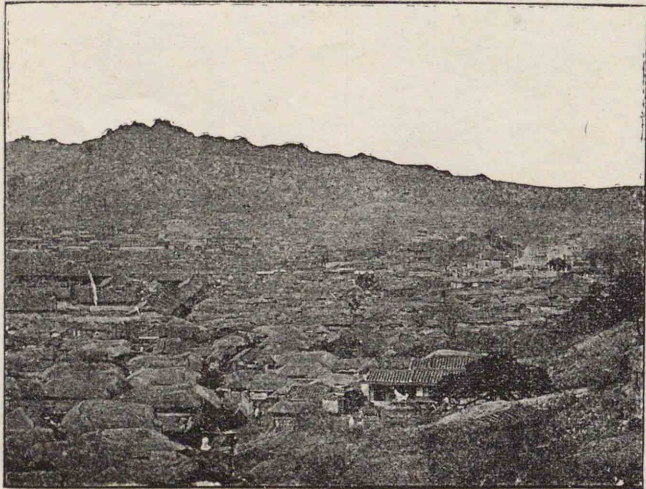
日・英同盟の目的

滿洲撤兵の宣言

るを以て目的とせしかば、露國も遂に十八箇月間に撤兵すべきことを宣言せり(明治三五)。

日露の戰役

然るに、露國は撤兵の宣言を實行せざるのみならず、韓國に於ける我國の權利を侵害し、韓國の安全をも危うするが如き狀あり。是に於て我國は誠實なる妥協によりて時局を解決せんことを切望せしに、露國は之に應ぜざりしかば、我國は自國の安全と、東亞の平和との爲に、遂に宣戰を公布するに至れり(明治三七)。

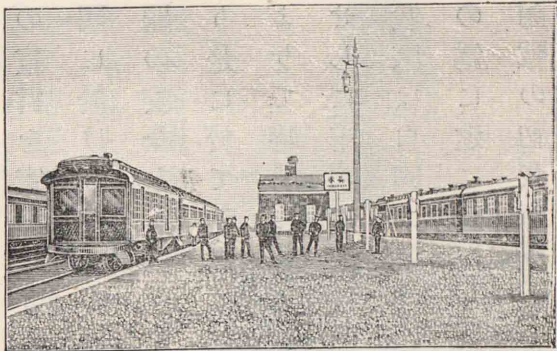


朝 鮮 京 城

日勝・露敗

開戰の初、我海軍よく機先を制したる後、大山巖、東郷平八郎等の率



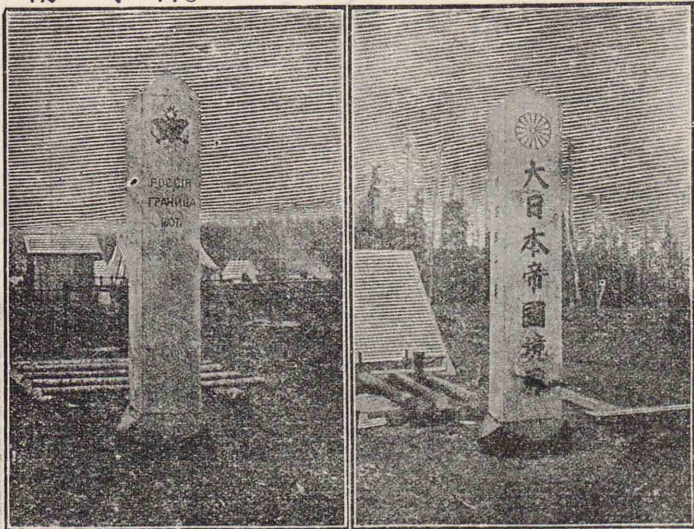


長春の春の停車場

わたる我陸海軍は連戦連勝し、露國の勢大に屈す。時に米國大統領ローズヴェルト和を講ぜんことを勸む。日露兩國之に應じ、我全權大臣小村壽太郎等は、

露國の全權大臣ウヰッテ等と、米國のポーツマスに會議して、露國は韓國に於ける日本の優先權を認め、遼東半島の租借權と、長春(吉林)以南

ポーツマス條約



樺太の日の露境界

滿洲南端の日本租借地

の鐵道を日本に讓與し、兵を滿洲より撤し、且つ樺太南部を割讓することを約して和を結べり(明治三八年)。

戦後の滿洲

日露戰役後、滿洲の大部分は、露國の勢力範圍より脱して、世界に開放せられんとするに至り、滿洲の南端は我國の租借地となり、我國は關東都督府を開きて、之を經營せり(明治三九年九月)。此租借地は日本が外國に租借地を有する始なり。ついで旅順鎮守府の設置あり(明治三九年十月)。是れ即ち亞細亞大陸の一角、我帝國の外に國法上の海軍根據地を置く始なり。



伊藤博文

日本の韓國併合。日露戰役後、國狀變動の最も大なるものは、韓國なり。ポーツマス講和條約の結果、我が國は韓國に對する優先權を得たれば、先づ日韓協約を結び、韓國の外交權を收め、新に統監府

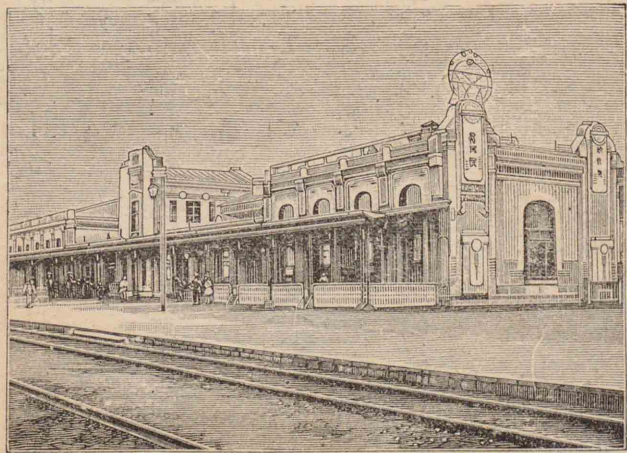


文 韓國統監伊藤博

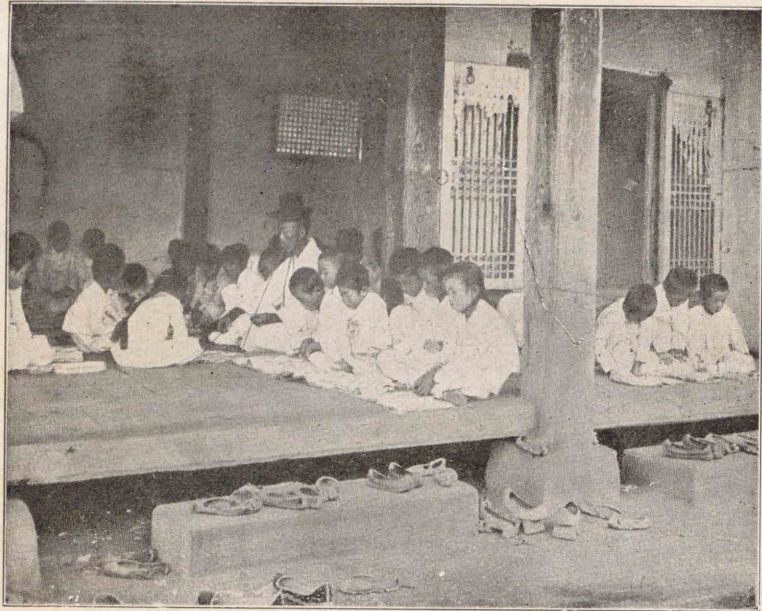
韓皇讓位

伊藤公爵の奇禍

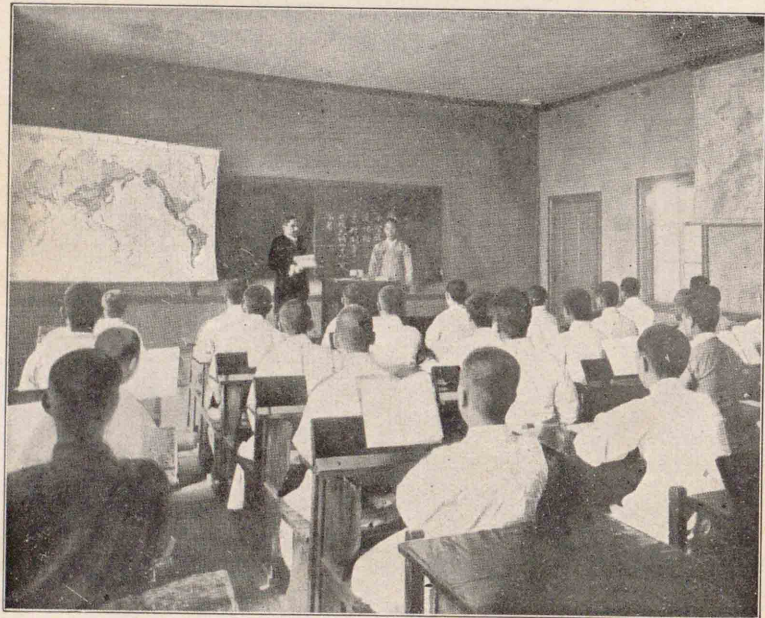
を置き、伊藤博文始めて韓國統監の重任に就けり(明治三八年十二月)。是に於てか、千數百年間日本支那及び滿洲方面の諸強隣國の勢力競争場たりし朝鮮半島も、今や全く日本の保護監理の下に歸するに至れり。然るに韓國皇帝は之を快しとせず。往々時宜に適せざる行動を試みて、物議を起せしかば、遂に位を皇太子(今の李王)に譲り(明治四〇年七月)、ついで第二の日韓協約を結びて、韓國の内政も亦統監の承認指揮を受くることとなれり。かくて韓國に對する我國の宗主權は益確實強大なり。爾來韓國保護施政改善の實益、舉がりしが、禍源猶未だ絶えず、我伊藤博



伊藤公爵の奇禍にあつたハルビン停車場



昔時の朝鮮人の教育



現今の朝鮮人の教育



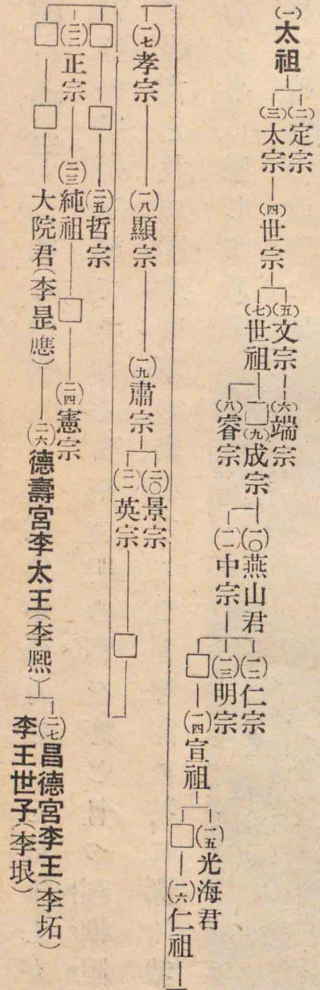
永久の併合

韓國を改めて朝鮮と稱す

文は遂に韓人の毒手に斃れ、内外大に驚く（明治四二年十月）。ついで韓國の一進會員は日韓合邦請願書を提出せしも（明治四二年十二月）、事未だ成らざりしが、日韓相互の安寧を増進し、東洋の平和を永遠に維持せんが爲に、韓國併合の已むを得ざるを認め、遂に永久に韓國を我帝國に併合することとなれり（明治四三年八月）。

かくて韓國を改めて、朝鮮と稱し、朝鮮總督を置きて、諸般の政務を總轄せしむ。

朝鮮の系圖

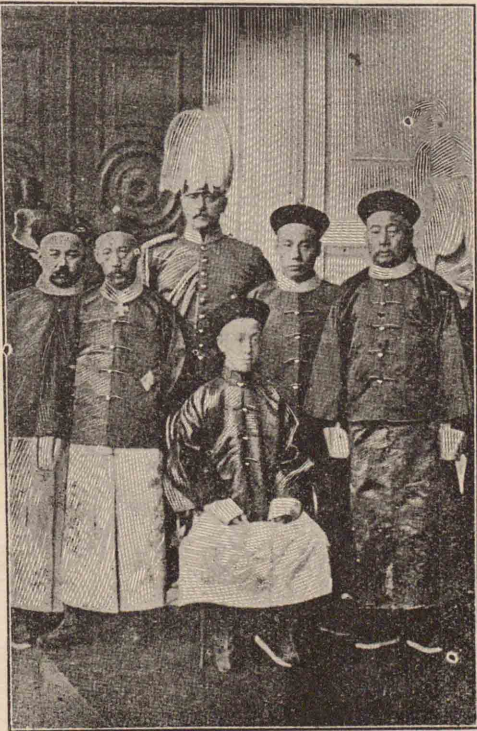




清國の覺醒

兩皇崩殂

清國の晩年 次に清國は、日露戰役中、局外中立を守りしが、我帝國戰勝の結果を視て、益、深く日新文明の利を感じ、且つ利權回收の念を起すと共に、國政改革の緊要なることを認め、特に深く我明治維新の事に感じて、教育及び政治の改善に注意し、遂に立憲政體採用の上諭を發し、(明治三)ついで十年の後に國會を開くべきことを約し、(明治四)其他纏足を鴉片吸烟の弊風改良等の議もあり、德宗及び西太后の崩殂して、(明治四)其年僅に三歳の幼天子宣統帝の位に即くや、其父醇親王政を攝して、銳意國事に當り、



(央中)王親醇政攝

國勢稍輓回の兆あり、其後輿論は益、國會の速開を希望し、遂に宣統五年(大正二)には國會を開くべき旨の上諭發布せられ、(明治四三)且つ新内閣官制の發布と、其組織とを見るに至れり、(明治四四)然れども、其閣員は、皇族を以て多數を占む。是に於て全國の志士は、皇族内閣は列國に無き所、國家の益なきのみならず、また皇族の幸に非ず。別に立憲責任内閣を組織せんことを要求せしも、攝政王は之を許さず。人心つひに大に去れり。

### 第十一章 支那の革命

革命の國 支那は其國體我國と異なり、古來屢、主權者の革命興亡あり、政治上歷代の國號を有するも、自ら固有なる地理的國名なし。國人が自稱する所の中國、または中華は、外に對する自尊的の美號にして、國名にあらず。支那といふは、衆説に従へば、今より二千一

和漢(日支)國體の相異

中國・中華支那



漢・唐

百餘年前に全國を統一せる秦朝の威名遠近に震ひ、諸外國は秦を轉訛して支那と呼びたるなりといふ。また漢といひ、唐といふは、漢唐二代は歷代中の盛時にして、その國運頗る長久、その威名四方に傳はりしを以てなり。清朝も太祖以來十二世、約三百年の命數を保ちしが、天命人心二つながら、清朝を去りて、清朝も亦遂に革命の哀史に記さるる事となれり。

孫逸仙

**革命軍勃興** 光緒十八年<sup>(明治二五)</sup>廣東人孫文<sup>(逸仙と號す)</sup>興中會を創立

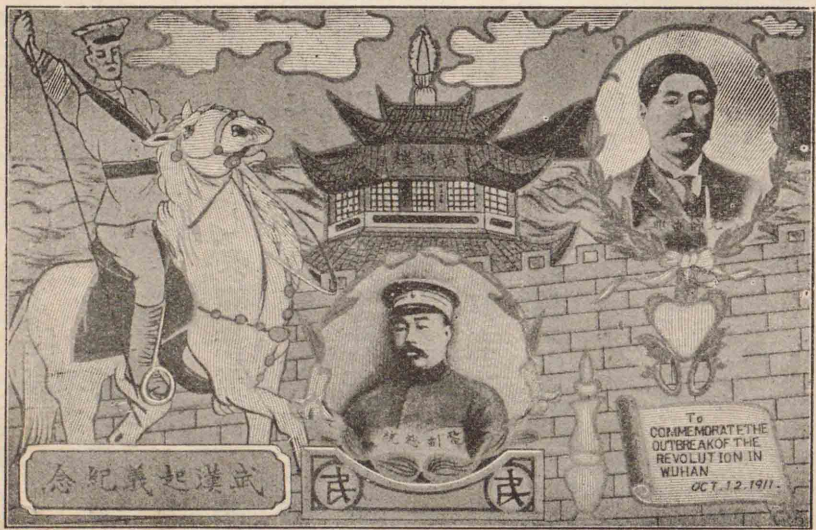
して、革命の機關とし、清朝を倒し、漢人の天下を興さんとす。其會員には廣東人多く、米國及び南洋諸島に寓居する者、また相つぎて入會す。日清戰役の起るや、兵を廣東に擧げんとせしも、密謀露顯し、孫文海外に遁れ<sup>(明治二八)</sup>至る所革命を鼓吹し、黨員漸く盛となり、北清事件の頃より革命黨員の兵を起す者少からず、廣東省内に事を起せし黃興も、其一人なり。而して清朝は改革日新の氣運に伴ひて、内閣

黃興

革命の近因

黎元洪

制度を定むるに至りしも<sup>(明治四四)</sup>政治依然として振はず。廣東の革命軍また起る謀洩れて黨員の死する者七十餘人なり。時に清朝鐵道國有を斷行するや、各省の人民多く之に反對し、四川地方の反抗尤も烈しく、官吏の壓制も亦最も激し。而して湖北の地方官亦嚴に革命黨を抑壓せるを以て、黨員は湖北の軍隊と結び、兵を起して、武昌を占領し、黎元洪を擧げて革命軍の都督とし、やがて漢口・漢陽を陥る。



樓鶴黃の昌武び及(下)洪元黎と(上)興黃 きがは繪念記革命革



南北の和議

南京の臨時政府

清帝退位

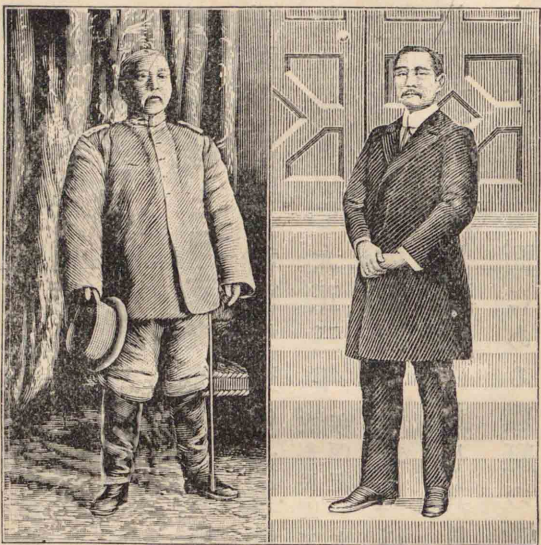
支那共和國 清朝は武・漢の事變を聞き、大に驚き、陸海軍をして、漢口を攻めしむ。相持すること十日許、湖南・江西・山西・陝西の諸省も、また既に革命軍に應じ、北方の軍隊も亦政體改革を唱ふる者あり。清帝已むことを得ず、己れを罪するの詔を下し、又憲法信條を頒つ。然れども人心の共和に向へるは、つひに之を防ぎ難く、漢口方面の清軍亦利あらず。清廷大勢日に去るを以て、使を遣して民軍即ち革命軍と和を議す。民軍代表者伍廷芳は、清使唐紹儀と談判すること旬日、將に國會を召集して政體を解決せんとす。時に各省の代表者南京に會し、孫文を擧げて臨時大總統とし、臨時政府を組織す。清朝の内閣總理袁世凱は、民軍と和議を計る。然れども民軍の意氣甚だ盛なりしかば、清帝も爲すべき策なく、袁世凱に命じて、民軍と清朝皇室優待條件を議決せしめ、乃ち退位の詔を降し、一切の政權を去り、ただ依然皇帝の尊號を存す。(明治四五年二月)かくて清朝は太祖

袁世凱

第一回民國國會

第二革命軍

支那共和國の正副大總統

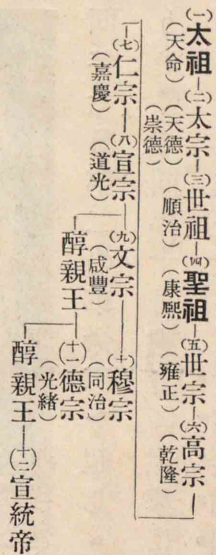


より十二世二百九十七年世祖の北京即位より十世二百六十九年にして終りたり。

孫文この報南京に至るや、孫文は辭職し、袁世凱は參議院(支那地方代表者の集會)に推されて、臨時大總統となり、翌年(大正二年)四月、第一回民國國會を北京に開けり。既にして舊革命黨員等、袁世凱の專横を憤り、同年七月第二の革命軍を起し、も、大敗し、孫文黃興等海外に奔れり。かくて同年十月、國會の選舉によりて、袁世凱は大總統に、黎元洪は副大總統に就任し、支那共和國(即ち中華民國)正式に成立し、列國之を承認せり。



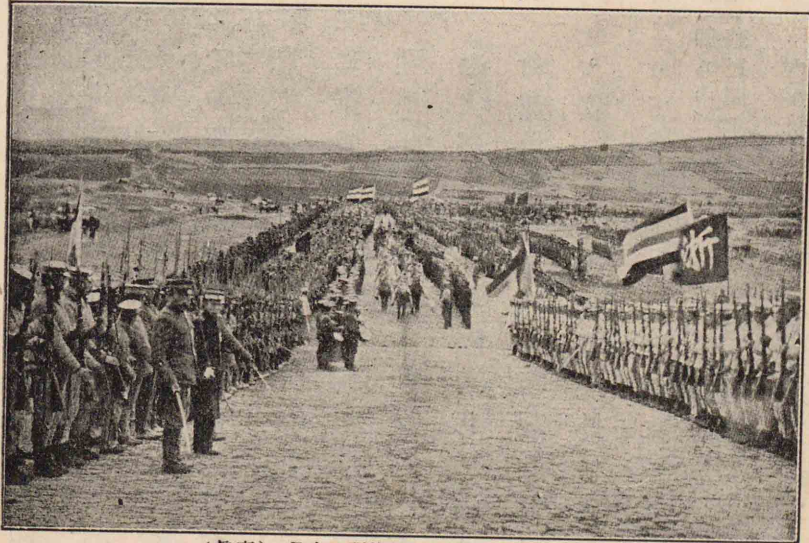
清の系圖 (括弧の内は年號なり)



第十二章 東洋近事

日獨開戦と日支交渉 東洋

平和の維持は、我國外交の大方針なり。是を以て大正三年(支那民國三年西紀一九一四)七月、歐洲の大戦起るや、我國は此大方針に基き、獨逸に對し、其日本海支那海方面にある艦艇の撤



(眞寫) 景光の謁進に義祖太の京南等文孫

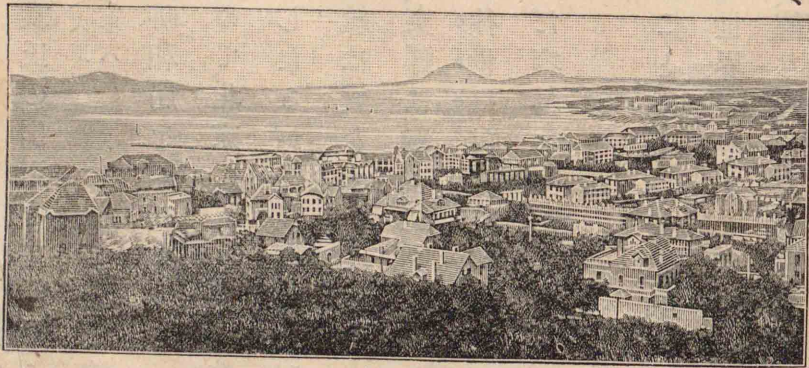
膠州灣占領

日・支條約

第三革命軍

退、及び膠州灣租借地の還附を勸告せしも、應ぜざりしにより、遂に戦を宣し(大正三年八月)膠州灣を占領せり(同年十一月)又我國は此大方針により、翌年五月、日支條約を結び、(一)遼東半島の租借期限を延長し、(二)南滿洲及東部蒙古に於ける我優越權を認めしめ、(三)山東省に於ける獨逸の利權を我國に於て繼續する事などを承認せしめたり。

**袁氏失敗** 袁世凱は、大總統となりてより、益々專横を逞くし、終に共和制を廢して、自ら皇帝たらんとす。是に於て、唐繼堯、蔡鍔等第三革命軍を雲南に起すや、南北の諸省之に應じ、其大勢袁氏に不利なりしかば、袁世



部一の街市島青



袁氏の悶死  
黎氏就任

突然の復辟

段氏の武力

馮國璋就任

徐世昌就任

凱は帝制宣言を撤回せしも、革命派は堅く袁氏の引退を主張せるを以て、袁氏は困惑憂悶して、終に病死せり(大正五年六月)。是に於て黎副總統は大總統となり、帝制首唱者を懲罰し、一時和局を結びたり。

### 支那近事

其後安徽督軍張勳は、兵を率ゐて、北京に入り、突然復辟(宣統幼帝の復位)を唱へて、共和政府を倒さんとしたるが、段祺瑞等に討

たれて忽ち失敗せり(大正六年七月)。此事變後、黎總統は責を引いて辭職し、馮國璋之に代り、段祺瑞は國務總理となり、支那は獨逸二國に對して戦を宣せり(大正六年八月)。ついで現任の大總統徐世昌就職し(大正七年十月)、銳

意政を執るも、内外多事多難、支那の前途、未だ容易に樂觀すること能はざるなり。

あ、支那は萬里國土を闢き、世を閱すること幾千年、文化夙に開け、聖賢英雄時に臨みて多く出でたり。試に世界の歴史を觀れば、盛衰強弱皆源因あり。地廣く人衆しと雖ども、徳なければ、何ぞ治を致

支那は今や特に偉人を要す

し盛を望むことを得ん。支那は今や特に大賢英傑を要す。誰かよく支那をして平和隆盛ならしめん。

### 印度の近狀

次に印度に於ても、其識者間に國民的自覺潑刺として起り、自治運動(Swaraji)は、次第に盛となり、英國に對する印度の形勢、亦斷じて平穩にあらざるなり。

印度の自治運動

## 訂編新 外國歴史教科書 東洋之部 終



一 明 正 一 三九二 一 六三 明の李自成亂を起す

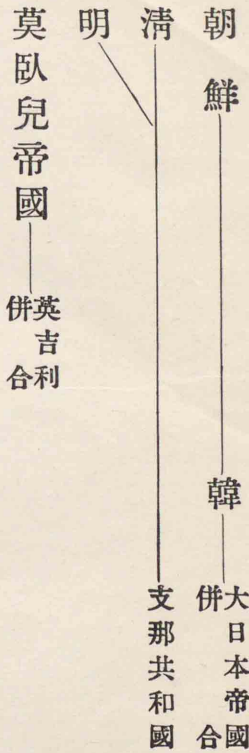
一 同 一 四 一 三五四 一 六二 清露の伊犁問題起る

三九二 一六三 明の李自成亂を起す

三五四 一六二 清露の伊犁問題起る



近世史摘要年表



年	皇紀	西紀	重要事蹟	年	皇紀	西紀	重要事蹟
後陽成	三六〇	一六〇〇	英人東印度會社を建つ	明治七	二五三四	一八七四	日本臺灣を征す
豐臣秀頼	二六四	一六〇四	佛人東印度會社を建つ	同八	二五三五	一八七四	露國樺太を得
徳川家康	二七九	一六一九	蘭人瓜哇に據る	同九	二五三六	一八七六	日・韓條約成る
後水尾	二八四	一六二四	蘭人臺灣に據る	同一〇	二五三七	一八七七	露國の中亞占領地益々大なり
同 秀忠	二九二	一六三二	明の李自成亂を起す	同一一	二五四一	一八八一	清露の伊犁問題起る
同 家光	三〇四	一六四四	明亡ぶ	同一二	二五四三	一八八三	朝鮮の亂兵日本公使館を燒く
後光明	三一一	一六一一	明の鄭成功臺灣に據る	同一三	二五四四	一八八四	日・清の守備兵朝鮮に争ふ
同 家綱	三二三	一六三三	清の聖祖康熙元年	同一四	二五四五	一八八五	日・清の天津條約成る
後西院	三三三	一六九三	清の吳三桂等の亂平ぐ	同一五	二五四六	一八八六	佛領印度支那確定す
同 綱吉	三四一	一七〇一	臺灣・清の有となる	同一六	二五四七	一八八七	英國・緬甸を併す
靈元	三四三	一七〇三	清の聖祖康熙元年	同一七	二五四七	一八八七	アフガニスタン方面の英・露境界問題定る
同 綱吉	三四九	一七〇九	清・露二國の尼布楚條約締結	同一八	二五四七	一八八七	日・清戰役起る
同 山	三五六	一七一六	清の聖祖漠北親征大勝利	同一九	二五四八	一八九一	日・清の下ノ關係條約成る
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二〇	二五四九	一八九二	獨・佛三國の干渉
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二一	二五五〇	一八九三	朝鮮國號を韓と改む
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二二	二五五〇	一八九三	日・露協商成る
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二三	二五五〇	一八九三	獨・露・英の三國清國の港灣を借る
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二四	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二五	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二六	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二七	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二八	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同二九	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三〇	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三一	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三二	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三三	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三四	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三五	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三六	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三七	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三八	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同三九	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四〇	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四一	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四二	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四三	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四四	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四五	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四六	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四七	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四八	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同四九	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五〇	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五一	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五二	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五三	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五四	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五五	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五六	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五七	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五八	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同五九	二五五〇	一八九三	清國改革の失敗
同 山	三五七	一七一七	外蒙古・青海等清の有となる	同六〇	二五五〇	一八九三	佛國の廣州灣租借

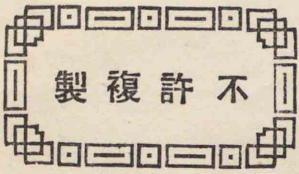






大正十一年一月十九日  
 文 部 省 檢 定 濟

明治四十四年十月二十九日印  
 明治四十五年二月二十二日發行  
 明治四十六年九月二十四日發行  
 大正三年十一月二十五日發行  
 大正四年十月二十六日發行  
 大正五年一月十四日發行  
 大正七年十月二十五日發行  
 大正八年十一月二十五日發行  
 大正十一年一月十九日發行

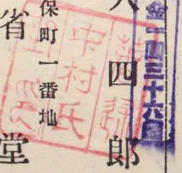


編纂者 中村久  
 發行所 東京市神田區通神保町一番地  
 印刷所 東京市神田區三崎河岸十二號地  
 株式會社 三省堂印刷部  
 代表者 能勢鼎三

發行所 (東京神保町) 株式會社 三省堂

電話神田(九)四三二七・振替口座東京三一五五五番

訂五  
 編外國歷史教科書(東洋之部)  
 定價 金 八 拾 錢  
 大正十一年度 金壹圓五拾貳錢  
 臨時定價











庫  
2  
75

広島大学図書  
2000080475  
